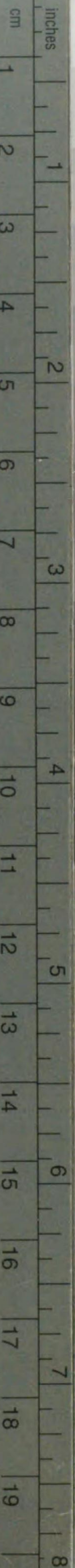


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

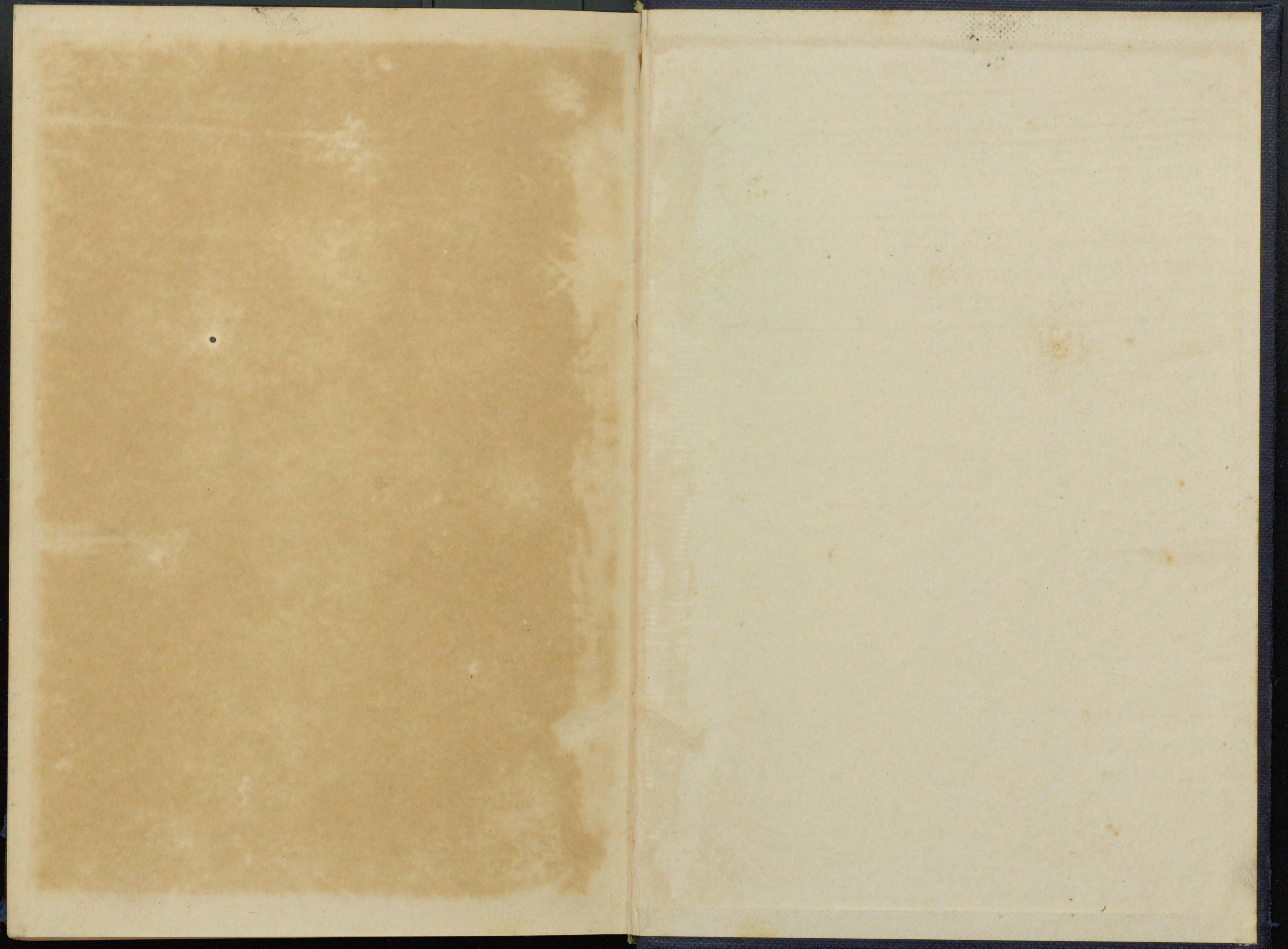
© Kodak, 2007 TM: Kodak



600-161



\*1200601304492\*



佐藤弘著

經濟地理學概論

東京古今書院發行

佐藤弘著

經濟地理學概論

東京古今書院發行

600

161



I種

W



\*1200601304492\*

## 序

まだ早い――

とは思つたが、とう／＼出版することにした。跳ぶ前には、必ず踞むといふことがあるが、いくら踞んでも、そのうち元氣がなくなつて、跳べそうにもないので、思ひきつて上梓することにした。従つて、本書の體系といひ、内容といひ、決して充分なものとは思はれぬ。この點について先づ、江湖の了解を得たいと思つてゐる。

また、本書の體系についても、廣く歐米の斯學先人の門を敲いてみたが、これといふ満足するものも得られなかつたのみならず、それかといつて、自分自身で獨創的な體系を作り出す勇氣もなかつたので、止むを得ず、一部分改容を加へたるディートリッヒの體系に従ふことにしたのである。

更に内容に關しても、四分通りは、ディートリッヒによつたが、その他、フリードリッヒ、リットゲンス、サッバー、バーチエ、ヘットナー、シュミット、ドーヴェ……

序

一

などに辜負するところが多く、また、本書に收めた自餘の文獻によつたのである。これからみれば、本書は全く編纂であつて、自分の創意になる部分は、一つもないといつていゝ。が、強ひて「獨創的」なものを探せば、全體にみらるゝ、改容の點に關してであらう。然し、これも、とるには足らぬ。その上、内容の排列についても、第一編はとにかくとして、第二編の環境論の部門では、説明が淺く、簡單で、統一なく、加筆すべき多くの場所があり、また第三編の地帶論の部門でも、論述が分布論の範圍を越えて稍、商品學の領域には、いりすぎた傾向があり、且つ取扱つた素材の數も僅少に失した傾きがないでもない。

要するに、本書は、その體系と内容との點に關して、充分に完璧を期したものと、いふべきでなく、總體から見ても、本質論は、その検討の方法に於て、環境論や地帶論と往々一致してゐないところが多い。これからみれば、本書は「經濟地理學概論」と銘打れたが、すべてが、まだ幼稚で、原語を添へて小供らしく作つた單なる教科書にすぎないのである。

體系の未完、内容の未熟、文章の杜撰、魯魚の謗りに對しては、私自ら深く慚愧

に堪へないところで、これらに關しては、廣く諸賢の御叱正を俟つて、これが完成は、他日に期したいと思つてゐる次第である。

昭和五年秋

著者

目次

第一編 經濟地理學の本質とその課題 ..... 一

第一章 經濟地理學の概念 ..... 一

第二章 史的考察 ..... 九

第三章 經濟地理學の本質・分類及び素材領域に關する種々なる見解 ..... 三二

一、本質論 ..... 三二

二、分類と素材領域 ..... 三三

第四章 交替作用 ..... 四九

第五章 方法論 ..... 六六

第六章 地理學に於ける地位 ..... 七三

第七章 領域論 ..... 七九

第二編 環境論(一般經濟地理學) ..... 八九

第一章 地表面と現經濟人 ..... 八九

第二章 土壤と現經濟人 ..... 一〇四

第三章 氣候と現經濟人 ..... 一二一

第四章 水と現經濟人 ..... 一二七

第三編 地帶論（一般比較經濟地理學） ..... 一四

第一章 文化階梯と經濟階梯 ..... 一四一

一、文化階梯 ..... 一四三

二、經濟階梯 ..... 一五四

三、經濟形態 ..... 一六三

第二章 經濟地帶 ..... 一八五

一、經濟地帶と經濟地域 ..... 一八五

一、（熱帶的）高熱濕潤な原始林氣候の經濟地帶 ..... 一八五

二、週期的に乾燥するサヴァンナ氣候の經濟地帶 ..... 一八九

三、ステップ及び沙漠氣候の經濟地帶 ..... 一九二

四、暖溫帶降雨氣候の經濟地帶 ..... 一九五

五、ボレアール（亞寒帶）森林氣候の經濟地帶 ..... 二〇八

六、降雪氣候の經濟地帶 ..... 二二四

二、主要穀物地帶 ..... 二二五

(1) 小 麥 ..... 二二八

(2) ライ 麥 ..... 二三七

(3) 大 麥 ..... 二四一

(4) 燕 麥 ..... 二四五

(5) 米 ..... 二四八

(6) 玉蜀黍 ..... 二五八

(7) 穀類輸出入 ..... 二六一

三、植民地生産物 ..... 二六五

(1) 珈 琲 ..... 二六五



經濟地理學概論

(2) カカオ ..... 二七三

(3) 茶 ..... 二七七

(4) 棉花 ..... 二八四

(5) 羊毛 ..... 三二三

(6) 護謨 ..... 三三六

四、砂 糖 ..... 三三七

五、動力源 ..... 三四六

(1) 石 炭 ..... 三四六

(2) 石 油 ..... 三六〇

六、工業地帯 ..... 三七七

第三章 自然的・人爲的經濟空間 ..... 三九一

第四章 經濟的ドミナテン ..... 三九七

第四編 參考文獻 ..... 四〇五

圖 版 目 次

一、チエーネンの「農業圈」 ..... 一九

二、經濟地理學構成 ..... 六六

三、貨物販賣の圖 ..... 九四

四、平地と斜地 ..... 一〇一

五、氣候圖 ..... 一五

六、地球の年平均氣温 ..... 三一

七、玉蜀黍生産と降雨量 ..... 三三

八、熱帶旋風の分布 ..... 三四

九、世界の主要な漁場 ..... 三三

一〇、世界の漁場と各國の生産高 ..... 三三

一一、歐羅巴の民族分布 ..... 四三

一二、地球上の文化の分布 ..... 四三

一三、アジアの民族分布 ..... 四八

一四、大西洋文明時代 ..... 四九

一五、文化階梯と經濟階梯 ..... 五一

一六、地球の歐羅巴化 ..... 五一

---

一七、世界の經濟階梯 ..... 一五六

一八、南アメリカの民族分布 ..... 一五九

一九、世界の人種 ..... 一六〇

二〇、北アメリカの民族分布 ..... 一六一

二一、アフリカの民族・言語分布 ..... 一六三

二二、經濟形態の分布 ..... 一六六

二三、世界のミルク經濟の分布 ..... 一七九

二四、地球上に於ける經濟形態の帶狀性 ..... 一八一

二五、アフリカに於けるオリブと油椰子との栽培地域 ..... 一八七

二六、世界の經濟地帯と經濟地域 ..... 一九〇

二七、牛の飼育地域と世界支給 ..... 一九七

二八、世界の金産出 ..... 一九八

二九、アドーの主要産地 ..... 一九九

三〇、南歐及中歐のアドー栽培地域 ..... 二〇〇

三一、主要な豚飼育地域 ..... 二〇四

三二、世界の銑鐵産出 ..... 二〇五

三三、生絲の生産と輸送 ..... 二〇六

三四、米國の煙草栽培地域とその産出	二〇七
三五、世界の銀産出	二〇八
三六、世界の森林分布	二〇九
三七、主要な牛飼育地域と牛肉の輸出状況	二一〇
三八、毛皮の主要産地	二一一
三九、世界の銅産出	二一二
四〇、農業地帯の分布と気温との關係	二一三
四一、小麥の主要産地	二一四
四二、カナダの小麥收穫と輸出状態	二一五
四三、北アメリカの小麥栽培地域	二一六
四四、世界の小麦栽培地と世界支給	二一七
四五、小麦の生産分布(鐵道省運輸局)	二一八
四六、ライ麦生産と世界支給	二一九
四七、大麥の産出状態	二二〇
四八、大麥の生産分布(鐵道省運輸局)	二二一
四九、燕麥の産地	二二二
五〇、米の産出とその輸送	二二三
五一、印度の米耕作の分布	二二四
五二、玉蜀黍及び米の耕作地域と輸出	二二五
五三、臺灣及び朝鮮の米收穫(鐵道省運輸局)	二二六
五四、米の收穫高分布(鐵道省運輸局)	二二七
五五、米の分布とその北限界線の移動(福井)	二二八
五六、米の世界取引	二二九
五七、玉蜀黍の産出と移動	二三〇
五八、玉蜀黍の輸出	二三一
五九、珈琲の生産とその動き	二三二
六〇、珈琲及び茶の生産と輸出	二三三
六一、ブラジルの珈琲栽培地域	二三四
六二、カカオの主要産地	二三五
六三、アフリカ黄金海岸のカカオ栽培地域と主要港からの輸出状況	二三六
六四、世界のカカオ産出高並に Konsum カカオと Edel カカオとの全消費	二三七
六五、茶の生産とその動き	二三八
六六、季節風帯に於ける茶の生産	二三九
六七、英國の茶輸入	二四〇

六八、棉花の生産と世界支給	二四一
六九、米國の棉花栽培地域	二四二
七〇、米國の棉花栽培地域	二四三
七一、印度の棉花栽培地域	二四四
七二、アフリカの棉花栽培地域	二四五
七三、埃及の棉花栽培地域	二四六
七四、ダシラ(アフリカ)の棉花栽培地域	二四七
七五、中央アフリカの棉花栽培地域	二四八
七六、ブラジルの棉花栽培地域	二四九
七七、南アメリカ(ペルー)の棉花栽培地域	二五〇
七八、支那の棉花栽培地域	二五一
七九、西印度諸島の棉花栽培地域	二五二
八〇、棉花、亞麻、黃麻、大麻、ヘネクエンの生産と取引	二五三
八一、前アジアの棉花栽培地域	二五四
八二、羊の飼育地域と世界支給	二五五
八三、モヘリア、駱駝毛、カシミリアの産地と輸送	二五六
八四、氣候に關聯するオーストラリア綿羊の増減	二五七
八五、オーストラリアの綿羊飼育地	二五八
八六、世界の羊毛産出	二五九
八七、羊毛の生産と世界支給	二六〇
八八、ゴムの産出(東南アジアの獨占)	二六一
八九、世界のゴム生産と輸送状態	二六二
九〇、野生ゴムと栽培ゴムの産出關係	二六三
九一、甘蔗の生産地と世界支給	二六四
九二、世界の甜菜栽培地域	二六五
九三、砂糖及びカカオの世界産出	二六六
九四、歐羅巴の甜菜及び南果の栽培地域	二六七
九五、世界の甘蔗糖と甜菜糖との産出状況	二六八
九六、砂糖消費	二六九
九七、世界の石炭産出	二七〇
九八、北アメリカの炭田分布	二七一
九九、米國の炭田分布	二七二
一〇〇、歐羅巴の炭田分布	二七三
一〇一、オーストラリアの炭田分布	二七四
一〇二、アジアの炭田分布	二七五

一〇三、南アメリカの炭田分布…………… 三五四

一〇四、アフリカの炭田分布…………… 三五六

一〇五、石炭の産出と輸出状況…………… 三五九

一〇六、英國の石炭輸出…………… 三六〇

一〇七、主要産出國の石炭需要…………… 三六二

一〇八、本邦の炭田分布(鐵道省運輸局)…………… 三六五

一〇九、石油の主要産地…………… 三六八

一一〇、米國の油田・生産高及び油送管…………… 三六九

一一一、メキシコの石油産出状況…………… 三七〇

一一二、米國の主要油田の産出状況…………… 三七一

一一三、アメリカ合衆國の鐵、石炭、石油の産地…………… 三七一

一一四、世界の石油産出…………… 三七三

一一五、主要國の石油産出とその割合…………… 三七四

一一六、本邦の油田分布(鐵道省運輸局)…………… 三七六

一一七、世界の人口密度…………… 三七八

一一八、工業經濟の主要地域と(黒色)栽植經濟の地域…………… 三七九

一一九、ユーラシア大陸の人口密度…………… 三八一

一二〇、北アメリカの人口密度…………… 三八二

一二一、南アメリカの人口密度…………… 三八四

一二二、アフリカの人口密度…………… 三八五

一二三、オーストラリアの人口密度…………… 三八七

一二四、歐羅巴の工業地帯と工業都市…………… 三八八

一二五、世界の經濟圏と工業地帯…………… 三九〇

一二六、温熱地方の乾燥によつて生ずる經濟上の不安定地域…………… 三九〇

國家經濟群(オフセット四色刷)…………… 卷末

—— 本書に挿入された地圖類は、主として、ラインハルト、パッサルゲ、サッパ、テイトリツヒ、フリードリッヒ、トッド…………… などから其のまゝ採用したるものと、これらのものに改容を加へたるものと、そして二、三の著者自身のものから成つてゐることを、お断りして置きたい——

# 經濟地理學概論

## 第一編 經濟地理學の本質とその課題

### 第一章 經濟地理學の概念

經濟地理學の概念は、一八八二年ウィルヘルム・ゲッツ(Wilh. Götz)によつて始めて確立されたもので、彼は地球空間を人間の經濟生活の土地として考察し、かくすることによつて、これから起るあらゆる可能性を究めようとしたのである。

Die wirtschaftliche Geographie betrachtet die Erdräume als Boden des menschlichen Erwerbslebens; sie stellt den Zusammenhang zwischen Natur der Erdoberfläche und dem Erwerb der Völker dar.

„die Erträume als Boden des menschlichen Erwerbslebens aufzufassen, so dass dadurch zugleich die physische Grundlage der Nationalökonomie angegeben werde.“<sup>(1)</sup>

元來、地理學は、地球表面そのものについての學問であり、又同時に、地球空間に起る現象の因果的討究に關する學問であることは、云ふまでもない。然し、この際に於ける認識の對象となる素材的觀察物は、地球空間の充足に屬してゐるのみならず、その觀察物のあらゆる個々の本質的個性も、また地球空間の充足に屬してゐる。こゝに於て、人間それ自體も、また有機的客體として空間の充足を構成してゐるのみならず、特定の條件のもとに於て、空間の本質及び作用を利用するものである。

註I Will. Götz: Lehrbuch der wirtschaftlichen Geographie für Handels-, Real- und Gewerbeschulen. Stuttgart 1861, S. 1.

註II Will. Götz: Die Aufgabe der „wirtschaftlichen Geographie“ („handelsgeographie“). Zschr. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin, 1882, S. 364.

かくのごとくして、地理學は空間科學(Raumwissenschaft)として承認せられ、自然と人間との關係を探究すべきであると見られてゐる。即ち地球空間に於けるあらゆる現象の地的束縛性

(Ergebnishaltigkeit)を究むるものであつて、そのうち、經濟現象の地的束縛性とその原因と分布とを檢討するのが、經濟地理學の目的であると云はれてゐる。この目的を達成するがためには、第一に、經濟の地理的基礎として表示さるゝ所與のものの中に於て、空間と經濟との間に存する因果關係を究めねばならぬ。こゝに於て一つの關係——空間と現經濟人(Wirtschaftende Menschen)との關係が確立してくる。即ち本質的に、場所、方法、原因によつて、空間とその充足との影響が、人間の經濟の上にはあらはれてくる所の關係が、生じてくるのである。

然しながら、一方に於て、人間は經濟的主體として空間の影響に反作用を與へるものである。勿論、これは、衣食住の慾求に對する民族の人格的個性に従つて、大小の差異は免れないが、もし、この空間への反作用によつて、空間とその充足とに變化が惹起するならば、その變化の現象こそは、疑ひもなく地理的現象であつて、その經濟に關する現象の分布と構成と因果律とは、同時に經濟地理學の研究分野に屬してゐるものである。

かくのごとくして、空間の現經濟人に及ぼす作用と、現經濟人の地球空間に與へる反作用とは、相互に、同權的に<sup>(1)</sup>(gleichberechtigt)同值的に<sup>(2)</sup>(gleichwertig)存立してゐるのである。こゝに於て「經濟地理學は、地球空間と現經濟人との間に於ける交替作用(Wechselwirkung)について

の學問であり、且つその交替作用の結果として生ずる地球上の經濟景に付いて、これが原因、成立、統一を究むる學問である」と云ふことが出来る。これ、即ちシヨイの所謂「空間的交替作用を明確にし、個景或は個地域の内的結合を鮮明にするのが、斯學研究の魅力ある目的の一である」と云つてゐるところに一致する。即ち經濟地理學はベンクの云つてゐる様に、「正に切迫する地球の充足について常に考察し、地球表面に於ける人間の意のまゝになる自然の補助手段に論及すべきであつて」、<sup>(四)</sup>「如何なる經濟現象が、確定地域に存在してゐるか、又、如何なる空間の限界的要因のもとに、その現象が存立してゐるか」<sup>(六)</sup>を明解するものである。地理學と同じく、經濟地理學を、空間科學と是認したラインハルト<sup>(七)</sup>が、斯學の目的は、經濟現象の空間的分布を地球表面に確立すべきであるとなしてゐる所以も、前者の説と一致してゐる。更にまた、ホーファーによれば、「經濟地理學は、自然と人間とによる地球空間の經濟、その構成、その充足の地理的基礎についての科學であつて、その課業は、經濟現象及び生活現象を地理的環境即ち空間に於ける自然的所與から研究し且つ説明するにある。」<sup>(八)</sup>となし、又、シヨイは、「地理學的空間とその自然的準備を追究し、工業と農業とに對する場所的因子の系列を求めめるのが、經濟地理學の任務である」と<sup>(九)</sup>なしてゐる。

これを要するに、經濟地理學は、同權的な自然と人間との間との間に於ける交替作用が、如何なる方法に於て、如何なる程度に於て作用し合つてゐるかを究め、これが分布と統制とを究むべきであつて、その第一の手段として、經濟作用と經濟効果との空間的把握を行ひ、かくして、過去及び現在に於ける地球上の經濟景の研究を通じて、將來の經濟景の如何を推論すべきである。

- 註一 R. Lütgens in den Mitteilungen der geographischen Gesellschaft in Hamburg. XXXIII, 1921, S. 131 ff.
- 註二 K. Sapper: Allgemeine Wirtschafts und Verkehrsgeographie. Berlin 1930, S. 1 ff.
- 註三 B. Dietrich: Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie. Berlin 1927, S. 7.
- 註四 E. Scheu: Deutschlands wirtschaftsgeographische Harmonie. Breslau 1924, S. 3.
- 註五 A. Penck: Das Hauptproblem der physischen Anthropogeographie. Zeitschr. f. Geopolitik, 1925, Heft 5, S. 342.
- 註六 Erde und Wirtschaft. Heft 1, April 1927, S. 1.
- 註七 R. Reinhard: Über Wesen und Wert der Wirtschaftsgeographie. Mitt. d. Verlagshandlungen, Hirt, Breslau, Nr. 3, 1924, S. 37 f.
- 註八 C. J. Hoffer: Notwendigkeit der Wirtschaftsgeographie für den Landwirt und Agrarpolitiker. Berlin 1929, S. 5.

註九 E. Scheu: Der Einfluss der Raumes auf die Güterverteilung. Mitt. d. Vereins d. Geogr. u. d. Universität Leipzig, VII, 1927, S. 31.

而して、一方、經濟地理學は、世界經濟の依存現象(Ablängigkeiterscheinungen)を分析、説明するもので、世界の經濟景に於ける自給自足(Antarkie, Selbstgenügsamkeit)と非自給自足(Anantarkie)との關係交渉を論述するものである。世界戦争以前に於ては、各國の經濟景には自給自足の現象が、可及的多く是認せられたが、戦後の現在に於ては、この自給自足は最早認められなくなり、英國を始め、伊太利、獨逸、佛蘭西ですら、食料に關しては外國の生産に依存し、比較的自給自足に近い米國及び支那ですら、外國の物資に依存してゐる状態で、英國及び我國の米國棉花への依存、或は米國の南洋一帯に於けるゴムへの依存、米國の我國に於ける生絲への依存、その他あらゆる大小の經濟上の依存現象は、交通路の支配と交通手段の發達とに對し、又、生産の量と價格との獨占性に關し、或は各國の關稅問題に對して重大なる影響を與へてゐるものである。各國は、いまや、關稅の高度障壁の上に立つて、世界戦争中に於ける獨逸の如く、現に強制的自給自足(Zwangsanarkie)政策をとらんとしてゐる。その關稅の障壁が、高くなれば高くなるほど、各國に運命づけられた經濟的對象、即ち經濟群、及び經濟基礎

が、重大なる意義をもつて擡頭し、依存現象と關稅と固有經濟群との研究が、經濟地理學の動態的研究分野の重要な核心をなしてくるのである。

これを要するに、經濟地理學は、地理的要因に對する現經濟人、換言すれば、人力によつての不變的所與物(Gegebenes)即ち氣候、位置、土地、富源に對する現經濟人との間に起る交替作用を究むるもので、フリードリッヒの所謂「現在の場所、量、質に従つて、經濟事實の地理的分布を、空間的に、自然的に、人爲的に制約されるがまゝの現象として、地球表面上に記述する」ところのものである。と、同時に、その作用自體から生じてくる經濟的依存現象の分析比較をなし、「該當地方が世界貿易に演じてゐる役目を究め」、經濟の自然的基礎から世界經濟の機構を論述するところのものである。

註一 アウタルキー(Autarkie)は、ギリシヤ語の autos = selbst, eigen 及び arkein = genügen からなつてゐるもので、自給自足の意味であり、獨逸語の Selbstgenügsamkeit, Selbstinlänglichkeit, Selbständigkeit, Sichselbstgenügsamkeit に相當するものであり、オプストの所謂 vollständige Selbstversorgung である。

佐藤弘、アウタルキー 政治經濟地理學 昭和三年 一六九—一七二頁

飯本信之 國家に對する自給自足の意義 政治地理學 昭和四年 三四四—三五二頁

R. Reinhard: Weltwirtschaftliche und politische Erdkunde. Breslau 1925, S. 182 f.

- E. Obst: Die Wirtschaftreiche in Vergangenheit und Zukunft. Eine Schicksalsfrage der deutschen Wirtschaft. Hannover 1922, S. 1—6.
- 註II R. Reinhard: a. a. O., S. 183.
- 註III E. Friedrich: Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie. Berlin 1926, S. 1.
- 註IV A. Supan: Archiv für Wirtschaftsgeographie. Ergänzungsheft Nr. 84, Pet. Mitt. Götta: Justus Perthes 1886, S. 1.

## 第二章 史的考察

„Wirtschaftliche Geographie“ 經濟地理學の名前(この命名表示 wirtschaftliche Geographie に反對して、<sup>(一)</sup>ハットナーは Wirtschaftsgographie とした)は、一八八二年、ゲッツの力作、「經濟地理學の課題」<sup>(二)</sup>に於て始めて作出されたもので、彼はこの論文に於て、一般地理學と經濟地理學との關係を究め、經濟地理學の本質を論じ、<sup>(三)</sup>また經濟地理學の構成に論及してゐる。<sup>(四)</sup>このゲッツの出現以來、經濟地理學は、専門科學として擡頭し、とくに世界戦争以後に於て、その顯著なる發達をみたのである。

然しながら、經濟地理學的考察の萌芽は、他の分科地理學と同様に、既に古代に胚胎して居つたのであつて、アラビヤ人は、九世紀及び十世紀に於て、氣候帯と文化階梯との關係を論じまた「地誌の發表に於て生産學の記述をなして居つたのである」<sup>(五)</sup>。かくて十七世紀の末葉までは總ての發展が、休止状態にいつたのであるが、十八世紀の聲を聞いても、經濟地理學は、古代に於けると同じく、經濟的事實、名前、數字を取扱つた單なる報告書にすぎなかつた。當時、

現經濟人と環境との間に存する經濟的因果關係を闡明しようとする試は、まだ起らなかつたのである。然るに、一七五九年、ブッシング (A. F. Büsching) によつて著述された地球の記述 „Kuriosen Nachrichten“ に於て始めて、自然と人間との間に於ける因果關係 (Kausalzusammenhänge) が論述されたのである。この考察は、今日に於ても、尙、有効性を持續してゐるので、彼は、自然と人間とを二個の非作用的對照因子とせず、兩者はこれを對立的關係にある一有機體と認め、自然を人間に對する行使の動機として承認したのである。そのみならず、彼は氣候の影響、即ち、空氣及び天候が、身體、生活法、國民的情調などに影響を與へることを述べ、地心理學 (Geopsychologie) について論究したのである。

- 註一 A. Leutenegger: Begriff, Stellung und Einteilung der Geographie. Gotha: Justus Perthes 1922, S. 147.  
 一八二二年マックスは、「經濟地理學の課題」を Zeitschr. Gesell. f. Erdk. zu Berlin に書いてゐる。これに對してハットナーは Wirtschaftsgographie の命名表示を採用して、マックスの „Wirtschaftliche Geographie“ の表示採用に反對してゐる。それは „Wirtschaftliche Geographie“ が、*カ、キ、リ、ニ、ニ* „lederner Handschuhmacher“ を思ひ出すからである。が、この反對説の是非曲直は別として、とにかく現に „Wirtschaftliche“ なる語は使用されて居る。例へば、R. Reinhard の „Weltwirtschaftliche Erdkunde (Breslau 1919)“ 及び Ch. Gruber の „Wirtschaftliche Erdkunde (Natur und Geisteswelt, Bd. 122)“ に用ひられてゐる。尙米國のマントマックス (Wittbeck) は、經濟地理學の名稱に満足せず

經濟地理學を更に擴張して、*ニ、ニ、ニ、ニ、ニ* (Geonomics) なる名稱を與へてゐる。

- R. H. Whitbeck: A Science of Geonomics, Ann. Ass. Amer. Geogr. 16, 1926, 117—123.  
 註二 W. H. Götz: Die Aufgabe der „Wirtschaftlichen Geographie“ (Handelsgeographie). Zeitschr. d. Gesell. f. Erdk. zu Berlin, 1882 S. 354 ff.  
 註三 W. Götz: a. a. O., S. 354—364.  
 註四 W. Götz: a. a. O., S. 364—368.  
 註五 W. Götz: a. a. O., S. 368—388.  
 註六 A. Kraus: Versuch einer Geschichte der Handels- und Wirtschaftsgeographie. Frankfurt a. M. 1905, S. 3.

然しながら、當時に於ては、尙一般に、自然を主たる創造的經濟要素と見做したのであつて交替作用に於て、自然と人間とが、同權的に、相互に作用し合ふと云ふことは、まだ判然と意識されなかつた。依然として一方的考察が重要視され、多くの非地理學者ですら、自然の人間に及ぼす影響を強調したのである。即ちホールバッハ (Holbach) は、「氣候の人間に及ぼす影響について論じ、ヘルヴェティウス (Helvetius) は、氣候が、人間の感情性癖に及ぼす直接的影響について記述し、更に、人間を多様な自然的狀態の上に行使し、又種々なる生活形式に導くところの「技術」(„Künsten“)にまで論及したのである。」<sup>(1)</sup> また有名なるモンテスキュー (Montesquien)



は「Contrat social」に於て、とくに氣候の人間に與へる影響を述べ、「人間の制度を自然現象から説明し、國家形態を國家領域の自然に基礎づけ、人間の法則を自然法則と調和させ、且つ實證的法則は、地方の自然、空氣の溫度、土地の構造、土地の位置及び環境、住民の生活方法から規定されねばならぬ」となし、「人間を一つの機械——如何に感情し、如何に意慾し、如何に行爲するかは、氣候によつて決定される機械」と見做し、「多くの因子は、人間を支配する。即ち氣候、宗教、法律、政府原則、過去の範例、風俗習慣……の總體から、一般的精神(esprit général)が生ずるのであつて、„Das Reich des Klimas ist das erste aller Reiche.“」となして自然的要因、とくに氣候を最主要因子とみとめたのである。

また、ヘルダー(Herder)——地理的要素を、體系的に、意識的に、世界史の唯物的理解にまで持ち込んだ——ヘルダーは、氣候と共に、否、氣候を超へて、「地球上に於ける創造の母」(„die Mutter aller Bildungen auf der Erde“)である内的エネルギー所謂「生成力」„genetische Kraft“)を考察したのである。然し、その生成力は如何なるものであるか、どこから來たか、その眞の内容は如何なるものであるか……などに關しては語らず、たゞ、それは生き生きしたる一つの有機的力であることを認めてゐる。かくて、ヘルダーは、生活體に及ぼす自然の影響を

否定してはゐないが、氣候が如何に働らくにせよ、總ての人間、總ての動物、植物は、固有の「氣候」をもつてゐることを述べ、當時に於ける自然的影響への偏重からのがれてゐる。そして「氣候は相互に不平等に、又緩漫に多様に生活體に作用し、遂にその内部にまで滲透して、その習性を、變化せしむるに至るところの原因の混沌たる集りである。これに對して生活力は、緩漫に、強度に、獨特の方法をもつて、その本性に従つて之に抵抗する。然し、それは外的作用に對して、無關係であり得ないから、時の經過と共に、自らを外的作用に適應せしめねばならぬ」と云つてゐる。

- 註一 K. A. Wittfogel: Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus. Unter d. Banner d. Marxismus. Heft Nr. 3, Jahrg. 3, 1929, S. 478.
- 註二 P. H. Schmidt: Wirtschaftsforschung und Geographie. Jena 1925, S. 38 f.
- 註三 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 438.
- 註四 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 490.
- 註五 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 491.
- 註六 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 44.
- 註七 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 491.

坂田吉雄 ヴィットフォーゲル「風土政治學・地理的唯物論並にマルクス主義」 「思想」 昭和五年 第九七號 七五二―  
七六四頁

更に、經濟地理學の古典的先驅者として有名なるフンボルト (A. von Humboldt) 及びリッター (K. Ritter) は、何れも自然を主體と考へ、人間は自然と云ふ所與の空間に定置されたものであるとなし、とくにフンボルトは、その著「*Neu-Spanien*」に於て政治經濟地理的考察を以て該地方の住民の文化及び安寧は、一に以て土地の自然地理的要因に支配されてゐると主張し、尙進んで、國家及びその行政も亦、自然的影響物として描寫してゐる。即ちこゝに於ては、自然が總ての行使の權力を把握してゐるので、自然と人間との二要素に對する同權説 (Gleichberechtigung) は、まだ當時提唱されなかつたのである。然して一方、リッターは、フンボルトより、稍進歩した考察をなし、自然を全人事現象の基礎と見做したと同時に、自然界に於て經濟行爲をなしつゝ、ある人間を認識するようになったのである。それは尙、本質的交替作用の記述までには到達しなかつたが、彼によつて、自然が地球表面と人間とに附與する關係は、何時でも同一、不變的のものではなく、常に寧ろ可變的のものであることが主張されたのである。これから觀すれば、リッターは、人間の自然への依存關係を是認し、これが關係を一部分比較論

究したのである。然し、リッターも亦、自然偏重説に傾いて居つたことは、「地球を人間の教育場所となした彼の基本考察によつても明瞭であつて、彼にはヘルダーの影響が、フンボルトに於けるよりも、より強くあらはれてゐたのである」<sup>(一)</sup>。かくしてリッター學派は、皆この見地から進出し、有名なるコーン (Kohl) は、交通と工業とに關し、アンドレー (K. Andree) は、その力著「世界貿易地理 (Geographie des Welthandels)」に於て、コッタ (Kotta) は、工業と經濟とに關し、クリーク (Kriegk) は製品について、またノイマン (K. Neumann) は、「ギリシヤの地理」に於て、何れも自然を強く鼓吹したのである。

而して、次の時代に於ても、經濟地理學の主要考察點は、依然として自然的條件の上に置かれて居つた。勿論、原因論は、當時、綜合地理學の全般に互つて進展したので、自然地理學の進出、とくに地理學に基礎を置く地文地理學が發達したのである。これが影響をうけて、斯學も進出したが、然し人間は、依然として經濟主體と認められず、自然への屬性として認められて居つたのである。

かくして、ペシヘル (O. Peschel) が、独自の地誌學に於て、經濟地理學の餘命を保持して以來、こゝに約一世紀の回轉を劃して、經濟地理學は、とくに世界戰爭以降に於て、飛躍また高

調の途を辿り、人間對自然の同權説が是認せらるゝ様になつたのである。

リュットゲンス<sup>(三)</sup>(R. Lütgens)は、經濟地理學を、現經濟人と充足せる地球空間との間に於ける交替作用の學であるとなし、また、斯學への命名と概念とを與へて有名になつたゲッツ<sup>(四)</sup>は、人間の經濟生活の土地としての地球空間、即ち、經濟の自然的基礎に考量の核心を置いたし、また一方、リヒトホーフ<sup>(五)</sup>(F. v. Richthofen)やフリードリッヒ<sup>(六)</sup>(E. Friedrich)は、人間を経濟する本質として強く主張したのである。これに對して、サッパー(K. Sapper)は、空間、即ち經濟の地理的基礎が、一方側に、そして經濟する本質としての人間が、他方側に、同價值的に考察されることは、正當なことであると結論してゐる。著者も亦、多くの經濟地理學者と共にこのサッパーの説に賛意を表するもので、空間及び自然所與(Naturgegebenheit)が、現經濟人に及ぼす作用と、現經濟人が地球空間に及ぼす反作用とを、場所的・分布的・原因的・統一的に比較分析研究するところに、經濟地理學の本質及び目的があるのである。

註一 A. von Humboldt: Versuch über den politischen Zustand des Königreichs Neu-Spanien.

註二 P. H. Schmidt: Wirtschaftsforschung und Geographie. Jena 1925, S. 79.

註三 R. Lütgens in den Mitteilungen der geographischen Gesellschaft in Hamburg. XXXIII, 1921, S. 131 ff.

註四 W. Götz in der Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde. XII, Berlin 1882, S. 354 ff.

註五 F. v. Richthofen: Vorlesungen über allgemeine Siedlungs- und Verkehrsgeographie. Berlin 1908, S. 123.

註六 E. Friedrich: a. a. O., Leipzig 1907.

而して、こゝに於て、最近過去一世紀に亙る主なる國民經濟學者の主張したる地表面と人間との關係について簡単な記述を試みることにする。

先づアダム・スミス及びその學派は、當時壓倒的な自然法的觀念に立脚して、自然の法則を經濟生活に適應しようとして試みた。彼は「生産の自然的基礎を認めて、ブドー、砂糖、煙草、米、馬鈴薯などに對する栽培條件を規定し、距離や交通状態が地代や生産價格に影響することを説述した<sup>(一)</sup>。が然し彼は、土地の富源を自然的準備に認めず、寧ろ、獨立して労働それ自體の中に求め、交換價值及び價格は、土地の富源に對する分度器であるとなしたのである。

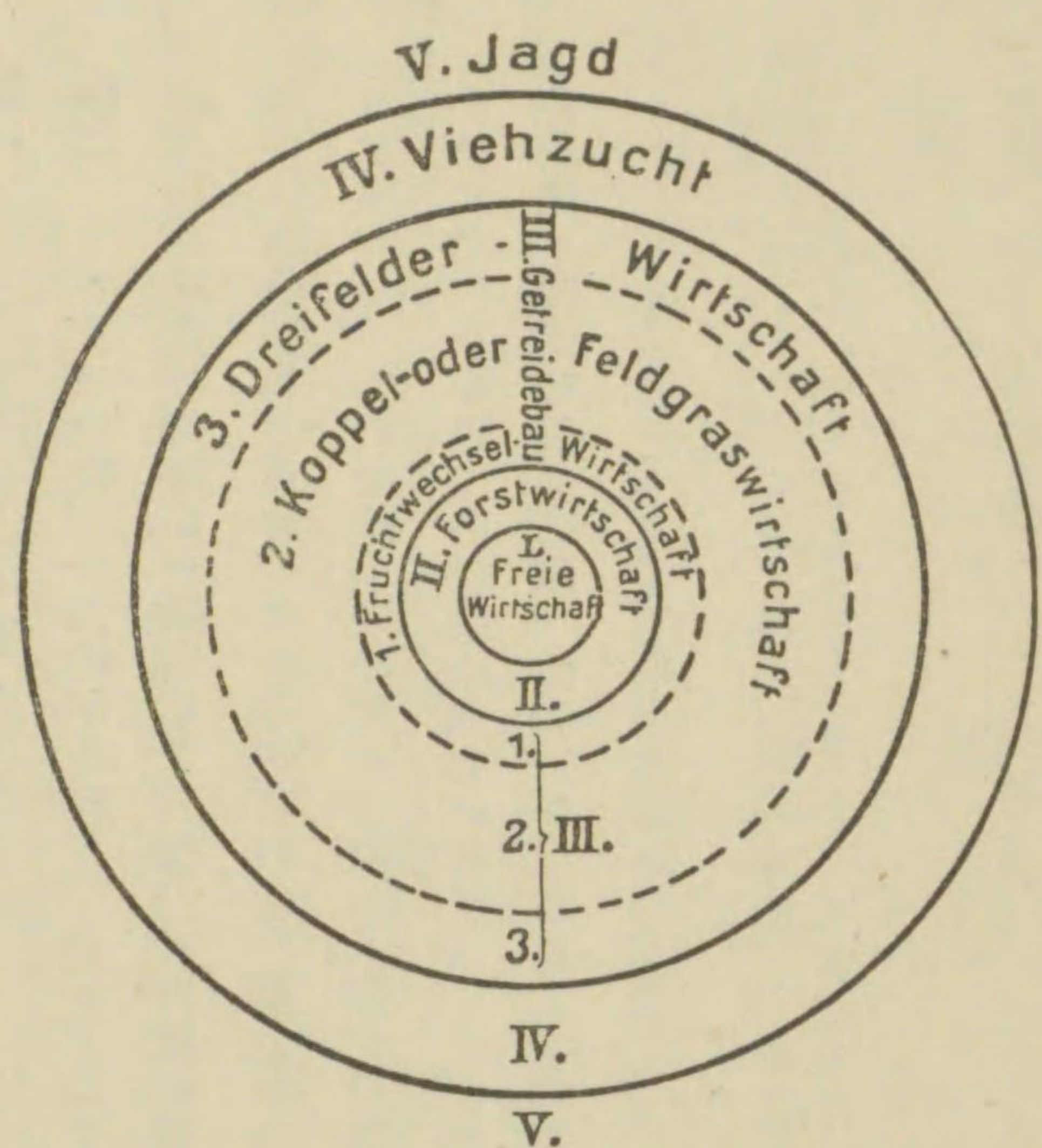
一方、これに對してマルサス(Th. R. Malthus)は、その高著「Essay on Population」(1793)に於て、地球を人類の飼養空間として取扱ひ、地球表面に於ける空間の制限性を以て、地球が支持し得る可能人口<sup>(二)</sup>を論じ、更に「地球空間の構成に於ける多様性と豊富及び缺乏の分布に於ける多角性とをみとめ<sup>(三)</sup>」地球上に於ける生産地、或は非生産地の差異性に留意し、また人間が

食を得るために、地球表面と争闘する手段を考察したのである。

またミユラー<sup>(四)</sup>(A. H. Müller)は、地理的理論による經濟理論を „Elementen der Staatskunst“ (1809) に於て論述し、經濟と土地との有機的關係を、あらゆる研究に對する前提となし、地理的位置が、土地の多様性と共に、耕作及び交通貿易に重大な影響を與へることを説明したのみならず、自然それ自體は、永久に不變的要因を形成するものでなく、寧ろ人間の精神的に働き掛ける支配慾によつて、不斷に新しい生き／＼した力を出す可變的のものである事を認め、この見地に立つて、彼は自然に働き掛ける人間の勞働によつてのみ、自然を洞察、滲透することが出来るとなしたのである。この彼の理念が、百年後に於て、現在の經濟地理學の概念の核心を形成したのである。

このミュラーに對して、リカード(D. Ricardo)及びチューネン(T. H. V. Thünen)は、地球空間の多様性が、經濟に與へる影響を強く認めず、勞働、技術、資本による獲得を、地代論の基礎概念の構成とみとめたのである。また勞働、技術、資本の結合作用によつて、地球表面から得らる、一切の生産物は(一)土地の所有者、(二)土地を耕作するに必要な資本所有者、(三)勞力提供の勤勉な勞働者からなる共同團體の三階級に分割される<sup>(五)</sup>」ところのリカードの説に於て

も、またチューネンの孤立國(Der isolierte Staat)の「農業圈」<sup>(六)</sup>に於ても、地理的考察は、重用されてゐない。チューネンの圈に於ては、土地形態・土地構造の多様性、山脈、河川、沼澤などのあらゆる自然所與の多角性は、みとめられず、たんに地理的抽象の形式に於てのみ、その成立が是認されてゐるのであつて、「元來地理的なものの本質が地表面に於ける現象の多様性の中に、即ち現象の相對的滲透化と相互的影響化との中に存在すると云ふことは、全々、みとめられてゐないのである<sup>(七)</sup>」。



第1圖 チューネンの「農業圈」

I	自由經濟
II	山林經濟
III	穀物耕作經濟
IV	1. 輪環經濟 2. 穀草經濟 3. 三圃經濟
V	收狩畜獵

しかしながらリッターの影響を蒙つたロシャ(W. Roscher)

は、 „Grundriss der Nationalökonomie“ に於て、經濟の構成は、主として地理的契機によつて條件づけらるゝか、或は影響さるゝことを主張し、その因子として、土地、土地構造、山脈、

海水、氣候などをあげ、これを經濟の基礎となしたのである。

註一 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 50.

註二 マルサス以後、一三〇年を経て、ヘンク及びハウスホーファーは、經濟地理的立場から、地球上に居住し得る可能人口を耕作可能地から推定して、尙、五六億の最可能人口数を算出してゐる。他の計算によれば、地球上の耕作可能地は八四〇〇萬方キロ、ステップが四〇〇萬方キロ、沙漠が一三〇〇萬方キロで、これらの地域のもつ人間の支持力から推算して、この地球上には約六〇億の人類が、居住し得ることになり、毎年〇・六六%づゝ繁殖して行くものとするれば今後二〇〇年を以て六〇億の人口に達することが出来る。左記参照

佐藤弘 政治經濟地理學 昭和三年 二八一三四頁

A. Hauskoler: Bemerkungen zum Problem der Bevölkerungsdichte auf der Erde. Ztschr. f. Geopolitik, 3 Jahrg. 1926, S. 789—797.

A. Penck: Das Hauptproblem der physischen Anthropogeographie. Ztschr. f. Geopolitik, 2 Jahrg. 1925, S. 330—348.

註三 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 57.

註四 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 93—98.

註五 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 59.

註六 佐々木清治 農業地理研究法 地理教育 昭和五年九月 三五頁

註七 P. H. Schmidt: a. a. O., S. 69.

### 第三章 經濟地理學の本質・分類及び素材領域 に關する種々なる見解

#### 一 本質論

地球表面と人間との間の關係に對する認識は、その程度の差こそあれ、古代ギリシヤ時代から存して居つたものである。従つてまた、この認識の發達を歴史的に概観しようとする考察も勿論、決して新らしいものではない。然し我々は、地球表面と人間との間の相互關係の歴史的發達及びこれが關係の認識とに關して、遠い過去より二十世紀に至るまでの何十世紀かの間に表現された無數の見解や思想を、悉く追究しようとするものではない。蓋し我々は經濟地理學の本質を考察せんとするものであるからである。

然るに經濟地理學の本質に關する色々な見解は、最初、自然と人間との間の相互關係に就いて明確な認識が、與へられなかつたことに基因してゐるのであつて、ミュラーからヘットナー、サッバー、リュットゲンスを経て交替作用に對する認識があらはれ出たその瞬間に於て、始めて、

經濟地理學の本質に關する見解が、明確な形をとるに至つたのである。而して、自然が、人間を制約する關係に就いての全見解を統一綜合し、且つそれを發達の域に到達せしめたのは、最近に至るまで、かのヘットナーのなしたる功績によるのである。

從來、經濟地理學は、多くの路を辿つて發達して來たものであり、従つて經濟地理學の本質に關する種々異つた見解も、これに相應じて、二十世紀の初頭に雜然として對立してゐる状態である。「實際的存在として全地理學に所屬する經濟地理學は、多くの漸増的文獻あるにも拘はらず、今日尙、完成されない」と云ふシュリューターの聲明も、また夥多なる自然的要素を列擧して、暫し、これを凝視した後、「如何なる人間が、かかる混沌たる原因結果を、その各々の要素を、夫々正當に評價しつゝ、而かも一の統一にまで秩序付けることが出来るだらうか」といふことを地理的唯物論に投入したヘルダーの嘆聲も、これみな、一方に於ける對立的な強い主張であつて、このよつて來たる所以も了解されないではない。ひとり、これらの本質論に關する反動批判のみならず、「經濟地理學の所屬とその科學の系列に於ける位置とに關して、就中、論争が行はれたのである」<sup>(三)</sup>。然り、この多數の異なる見解を、こゝに再現せしむることは、本書の如く、概論と云ふ形式を以て敘述する著述の課題ではないかも知れぬ。然し、これら多數の見

解を概観することは、かくすることによつて殆ど總ての經濟地理學者の追究してゐる一の路を容易に展開することが出来るために、是非とも必要なことである。これがために、我々は、經濟地理學の本質に關する諸見解を簡単に記述することにする。

註一 O. Schlüter: Die Ziele der Geographie des Menschen. Berlin 1906, S. 31.

註二 坂田吉雄 ヴェイトフオーゲル 「風土政治學 地理的唯物論並にマルクス主義」 思想 昭和五年六月 一〇六頁

註三 A. Hettner: Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen u. d. ihre Methoden. Breslau 1927, S. 148.

最近の經濟地理學の發達を支配してゐる重要な問題が二つある。それは、勿論、最近、非常な勢力を以て進展しつゝ、ある實質的な經濟地理學的研究を何等妨げるものではない。而して、その二問題とは次の如くである。

一、經濟地理學は、全地理學の一部門であるか、獨立科學であるか。或は補助科學であるか。  
二、もし、經濟地理學が、その存在の權利を有する獨立科學であるとするならば、經濟地理學は、規定された獨特の素材領域をもつてゐるか。

勿論、上述の二問題は、相互に密接に結合してゐる。

(而して爰に、第三の問題として、ハルムス Bernh. Harms の主張することく、經濟地理學は、將來、社會

經濟地理學 Sozialwirtschaftsgeographie として經濟科學から論究さるるであらうと云ふ重大問題がある。經濟地理學を、全地理學の特別部門であると解する見解は、地理學の實際的效果、即ち應用性の問題によつて、著しく影響されて來た。蓋し、海洋學は、航海の實際に役立つてゐると同じく、經濟の實際も地理學を必要としてゐる。即ち、地理學は、經濟的意義を、地理的意義によつて説明し、且つこれを促進することが出来るかどうか、或はまた、もしそれが可能であるとするならば、如何なる程度まで、かくすることが出来るか、といふ様な問題に解答する必要がある。かくして商業が特に重要な産業とされて居つた時代に於て、經濟の實際は、地理學の説明を補助として必要とした。事實に於て、經濟、商業、工業などは疑もなく早くから實業地理學、貿易地理學、商業地理學の名に於て、經濟地理學の發達を促したのである。即ち「經濟地理學は、商業地理學(Handelsgeographie)として重商主義(Merkantilismus)から出立したのである」。アメリカの經濟地理學者ホイットベック——精神文化よりも物質文明の優秀なアメリカの如き國土にゐる彼に従へば、信仰、封建主義、武士道の時代を超越して、商業時代にまで發達してゆかねばならぬ時に於ては、經濟地理學は、時代思想であると見做されてゐる。この彼の言葉の中にも、一應の眞理は窺知されるのである。

註一 ハルムス(Bernh. Harns)は、將來、經濟地理學は、社會經濟地理學として經濟科學から取扱はれるだらうと公表してゐるが、その一方に於ては、特別化の自然關係をもつ各異なる地球空間と、これに生活する人類群とを自然科學的・ホルゴロ格的(ergologische)側面から研究することは、地理學の任務であると主張してゐるのである。そして、地理的研究の出發が、個々の地球空間であるならば、社會經濟地理學的考察は、經濟活動の全相互的把握に對して、あらゆる地球空間に於ける多種多様な自然關係の具體的交替作用(konkrete Wechselwirkung)を究むることであると見做してゐる。かかる見地に於て、ハルムスは社會經濟地理學を解説してゐる。(Bernh. Harns: Volkswirtschaft und Weltwirtschaft. Versuch der Begründung einer Weltwirtschaftslehre. Problem d. Weltwirtsch., Schriften d. Inst. f. Seeverkehr u. Weltwirtsch. a. d. Univ. Kiel, Jena 1912, Gustav Fischer)

H. Bernhard: Die Agrargeographie als wissenschaftliche Disziplin. *Pet. Mitt.*, 61 Jahrg. 1915, S. 100. その他「社會學と地理學との關係を表示したものは、セルヒの「英國に於ける地理學と社會學との結合」がある。

J. Sölich: Die Verknüpfung von Geographie und Gesellschaftskunde in England. *Geogr. Ztschr.* 36, 1930, S. 145—157.

細井一六氏紹介 地理學評論 昭和五年九月 九二—九六頁參照

また、ドーズ(Dove)は、社會經濟學的及び經濟地理學的考察方法の接觸點に就て、獨特の見解を述べてゐる。

K. Dove: Über die Berührungspunkte sozialökonomischer und wirtschaftsgeographischer Betrachtungsweisen. *Weltwirtschaftliches Archiv*, Kiel H. 3, 1919, S. 323—35.

また最近ハンチントンは、「社會地理學の環境的基礎」を著述して、社會地理學の進出を期してゐる。彼によれば、從來の人文地理學が即ち社會地理學であると云ふ様に解せられて居り、地理學を二大別して自然地理學と社會地理學とにし

社會地理學の部門には従來の人文地理學部門が包含されてゐる。が、内容はそれほど新らしいものとは思はれぬ。

C. C. Huntington and A. Carlson: *Environmental Basis of Social Geography*, New York 1929, pp. 15—16.

註二 A. Leutenegger: *Begriff, Stellung und Einteilung der Geographie*. Gotha: Justus Perthes 1922, S. 147. 經濟地理學は、商業地理學として重商主義から出立したのであつて、商業地理學(*Handelsgeographie*)の名前は、現在に至るまで、時々使用されて來たのである。リッターは、「Der tellurische Zusammenhang der Natur und Geschichte in der Produktionen der drei Naturreiche oder über eine geographische Produktenkunde」の表題のもとに於て、經濟地理學を取扱ひ、また、ハミェンは「Abhandlungen zur Erd- und Völkerkunde」に於ても、經濟地理的仕事を行つてゐる。

以上のごとく、經濟地理學が、經濟の實際の要求に應ずるものであるとするならば、經濟地理學は、地理學内の一獨立科學ではなくなり、經濟學の補助科學とならなければならぬ。併し、ドイツトリツヒ及びその學派は經濟地理學を以て、地理學に屬するものとなしてゐる。彼等に従へば「實用のための」地理學は可能である。然し「實用地理學」は不可能であると考へられる。即ち「經濟の基礎」の地理學は成立し得るものと考察さるゝ。即ち、ゲッツの所謂「經濟の自然的基礎」として理解さるゝ、所以は、茲に存してゐるのである。

かくして、經濟地理學の本質に關する見解は、二つの極點——經濟學の補助科學か、獨立の

地理的科學か——の二點の間を動搖して來た。時には、寧ろ、經濟學であつたところのものが、經濟地理學であると稱されたこともある。レーマン(Lehmann)は經濟地理學を、「經濟學に對する地理學」として國民經濟學の一補助科學とみとめ、また、リユールは、經濟地理學を地理學のうちより追放して、國民經濟學のうちに加へんとしてゐる。蓋し、リユールの考察に従へば經濟地理學的問題取扱法は、全然、或は主として、自然科学的に方向を規定された思想によつて、妨害攪亂されたからであるとなしてゐる。

元來、經濟地理學の認識素材を専ら、生産、取引及び消費の分量的相違と性質的相違、或は分業等のうちのみあると考へるならば、この考量は、經濟の自然的要素を、餘りにも低位に評價してゐることを意味してゐることになる。その結果として、經濟地理學の考察方法は、純粹に國民經濟學的なものとなるだらう。そして地理學者にとつて、興味のあるところは、勞働效果の空間的把握で、勞働それ自體でないのであつて、このことが明確になれば、上述の思考の方法も、妥當でないことが察知さるゝであらう。

今日、一般に、廣汎に互つて普及された見解に従へば、經濟地理學は、經濟現象を、その分布と空間に於ける制約性との點から考察するものであり、従つて、經濟地理學は一般地理學の



地盤の上に立つてゐると見做れてゐる。このことは、即ち、經濟地理學が、地理學の一部分をなしてゐることを意味してゐる。これに對してジーガーは、「地理的經濟的關係の空間的擴大の比較は、一方が他方へ及ぼす作用のみならず、他方が一方へ及ぼす作用——即ち交替作用を顯しせねばならぬ。もし我々が、人文地理學の最高にして最終の目的を、地球上の人類分布の多面的に遺漏なき理解に見るならば、經濟的狀態と現象とに對する空間限界の知識が、經濟地理學の本質的基石となる」と云つてゐる。この意味に於て、ジーガーは、經濟地理學を人文地理學に屬せしむることを固執してゐるのである。

註I Wilh. Götz: Die Aufgabe der „wirtschaftlichen Geographie“ (Handelsgeographie). Ztschr. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin, 1882, S. 364.

註II R. Sieger: Forschungs-Methoden in der Wirtschaftsgeographie. Verhandlungen des Vierzehnten Deutschen Geographentages zu Köln. Berlin 1903, S. 96.

註III R. Sieger: a. a. O., S. 96.

かくのごとく、經濟地理學は、補助科學として、經濟學に從屬してゐるものではなく、斯學は實に、地理學の領域に屬してゐるとみられてゐる。然らば、更に問題が発生する。經濟地理

學は、全地理學の中に於て——勿論人文地理學のうちに於て——特殊な科學と見做し得るや否や。この問題に對して、經濟地理學が、地理學的考察方法を害されることなく、而かも、自己固有の研究領域を有し得たる曉に於て、經濟地理學は、地理學のうちにあつて、特殊な科學となすことが出来るわけである。

リュットゲンスは經濟地理學と地理學とを密接に結合させながら獨立科學としての經濟地理學の本質に關して最も適切な見解を説述してゐる。彼に従へば、經濟地理學は人文地理學の一部門である。そして斯學は、それに固有の研究領域を、現經濟人と地理學的空間との間の「問題」のうちに有してゐる。故に、斯學にとつては、獨立の問題定立が生じ、特定の研究領域が発生するわけである。かくして經濟地理學は、人文地理學の他の諸部門、例へば、居住地理學、政治地理學等と同じ程度の獨立性を有し得ることになる。而して彼は、斯學を第三部門として、全人文地理學に入れてゐるのである。

また、ラインハルト(R. Reinhard)は、先づ、人文地理學の定義を下して後に、經濟地理學の所屬に論及して曰く、「人間の地球表面に及ぼす影響によつて、自然と人間の勞働との間の多角的交替作用に存立する現象を研究の對照にしてゐるのが、實に人文地理學或は人間地理學又

は、文化地理學 (Anthropogeographie, Geographie des Menschen, Kulturgeographie) である。而して、地球表面の大部分と、人間の居住空間として重要な地域の大部分とは、人間對自然の交替作用によつて、改容されて居り、又、この改容が殆ど常に經濟的規準に牴觸してゐるが故に、經濟地理學は、全地理學の中で、基柱をなす重要科學である<sup>(二)</sup>となして、斯學を人文地理學に強く所屬せしめてゐる。

更に、サッバーは、國民經濟學と經濟地理學との本質論の相違を究め、「國民經濟學は Streben と Schaffen とをもつ經濟、即ち人間の勞働制度に結合してゐるに對して、經濟地理學は、空間と、その空間の内容とに結合してゐる。而して國民經濟學的成果は、一般に、もつと、時間的、變化的價值をもつて居り、一方、經濟地理學的成果は、一般に、空間的、そして屢固定的な價值をもつてゐる<sup>(三)</sup>」となし、以て、「經濟地理學は、人文地理學の所屬領域内にあり、他の多くの補助科學、とくに國民經濟學と強く接觸してゐる<sup>(四)</sup>」となしてゐるのである。

勿論、現代人文地理學の唯一の權威であるヘットナーは、經濟地理學は、その本質に従つて地理學の部門科學である<sup>(五)</sup>となして、その所屬を明確にし、更に、「科學系統の觀點から、經濟地理學は、地形學、氣候學、動・植物地理學と同様に、地理學にぞくして居る<sup>(六)</sup>」となしてゐる。

このヘットナーの所謂、地理學に屬して居ると云ふ意味は、云ふまでもなく、人文地理學への所屬を指示してゐるのである。またロイテネガーは、「地球のすべての Objekt-kategorien は、經濟價值として考察され、又、人間の全生活は、經濟的に觀察さるゝから、經濟地理學の内容を確定することは、非常に困難である。が然し、經濟地理學の實際的價值は、非常に大なるもので、全地理學内に於ける他の獨立科學と同列に參與してゐる<sup>(七)</sup>」となして、その地理學への所屬とその實際的價值とを認めてゐるのである。

- 註一 R. Lütgens: Allgemeine Wirtschaftsgeographie. Breslau 1918, S. 2.  
 註二 R. Reinhard: Über Wesen und Wert der Wirtschaftsgeographie. Mitt. d. Verlagsbuchhandlungen. Hirt in Breslau, Nr. 3, 1924, S. 37 f.  
 註三 K. Sapper: Allgemeine Wirtschafts- und Verkehrsgeographie. Berlin 1930, S. 1—3.  
 註四 K. Sapper: a. a. O., S. 1—3.  
 註五 A. Hettner: a. a. O., S. 147.  
 註六 A. Hettner: a. a. O., S. 150.  
 註七 A. Leutenegger: a. a. O., S. 147—148.

かくのごとく、多くの地理學者は、一般に、經濟地理學を、地理學部門に屬せしめてゐるが、

一方、國民經濟學者は、經濟科學の一部門であると見做してゐる。これは、著者の見解によれば、經濟地理學は、自らに附與さるゝ概念の如何によつて、或は地理學に、或は經濟學にぞくせらる性質のものであると考へらるゝのである。この著者の説に賛意を表するものは、シュミット及びジージャーなどである。

先づ、シュミットの意見に従へば、「經濟地理學は、その二重性のために、その内部に常に左の二區分を包含してゐる。

經濟の自然的根據、對、擴がりに於ける經濟それ自體

自然的附與物、對、財

地球空間の準備、對、富

而して經濟學は、財と富とに關係する。財が、自然的附與物から成る限り、財の本質と獲得との條件に自然が關與する限り、各の財生産に場所的變化があり、各は、一定の空間的作用圏を生ずる。こゝに經濟學と地理學との包括的領域があり、兩者はその尖端で對立するのではなく、對象の解釋、出發點、考察の仕方は異なるが、作業の共通であることが、共通な道程を歩ましめることになるのである。故に、經濟地理學は、地理學の方法に於ても、經濟學の方法に於

ても、何れも成立し得る<sup>(一)</sup>と云つてゐる。また、經濟地理學の人文地理學への所屬説を固執してゐるジージャーに従へば「左記二科學

經濟地理學 „wirtschaftliche Erdkunde“

地理經濟學 „geographische Wirtschaftskunde“

によつて表示さるゝ兩理解の鬭争は、考察方法の如何によつて、消滅するものである<sup>(二)</sup>となしてゐる。また、ヘットナーに従へば「強い密接な接觸に於て、固有な經濟地理學は、尙、「地理經濟學」から區別されねばならぬ。即ち、それは、一方は生産と生産物との地理的分布を論じ、他方は、異なる地域と場所との經濟的特徴を取扱つてゐるからである<sup>(三)</sup>」となして、兩分化科學の領域を確立してゐる。

要するに、ベルンハルト(H. Bernhard)の「經濟地理學は、地理學か、經濟學か<sup>(四)</sup>」と云ふ問題は、包括的領域内に於て、概念論の二軌道のうち、その何れを選定するかによつて確定されること、思はれる。それ故に、筆者は、リュール<sup>(五)</sup>などと共に、「經濟地理學は、地理學と國民經濟學との間の境界科學(Grenzwissenschaft)である」と認めたいのである。

註一 綿貫勇彦 地理學に於ける文化の意味 地理學評論 昭和五年四月 四六一―六三頁

- 註II R. Sieger: a. a. O., S. 96.  
 註III A. Hettner: Das Wesen und die Methoden der Geographie. G. Z., Leipzig 1905, S. 559 u. 563.  
 註IV H. Bernhard: Die Agrargeographie als wissenschaftliche Disziplin, Pet. Mitt. 1915, März, S. 99.  
 註V A. Rühl: Aufgaben und Stellung der Wirtschaftsgeographie. Zschr. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin, Nr. 718, 1918, S. 301.

## 二 分類と素材領域

經濟地理學の目的は、現經濟人が、地理的空間景に對する關係のうちから、成生するがま、の地球の經濟的空間景の研究にある。故に我々は、經濟地理學の内容を、體系的に組織することが出来る。即ち我々が、經濟的空間景を、指導的觀念として先端に把握しながら、自然的空間及び勞働と、現經濟人によつて、自然的空間のうちで、變化せしめられたものを、敘述するとき、我々は、經濟地理學の素材領域を、自由に、組織配列することが出来る。

而して、空間に於ける人間活動の表現物は、人間の創造した經濟價值、即ち商品、或は生産物である。故に、この事實からして、空間及び生産の方面から、斯學の素材を、體系的に分類することが出来る。然し、この素材分類に際して、或る場合には、空間が重要視され、或る場

合には、生産が重要視されることは、既に周知に屬するところである。

而して、最も簡単な形式の經濟地理學書は、生産物分布論の前に、準備的に、自然地理學的敘述をなす章を挿入した。また、この自然地理學的敘述の中に、多少經濟的評言や、交通に關する評言を附加することもあつた。然し、その自然地理學的序論は、後章に論述する生産とは、一般に、何等本質的に重要な關係がなかつた。例へばエツケルトの「商業地理學原論」はこれである。同書で、エツケルトは提言してゐる——「余の見解に従へば、經濟地理學の本質と課題とは、氣候學、地質學、國民經濟學、政治地理學などの重要な章は勿論のこと、位置、山岳論並に水路學的關係の認識によつて、個々の景觀地域、並に全商業的地表面の營利及び交通状態に關する根本的洞察を媒介することである」と。

かかる自然地理學的敘述を序論として挿入する要求は、それ以來、とくに、明確に提出されなくなつた。然し、暗黙のうちに、この要求は實視されて居つた。ヘットナーの所謂「經濟地理學は自然地理學のあらゆる關係と人文地理科學とを補助知識とすべきである」説も、實行されて來た。然し、その多くは、極めて貧弱な自然地理學の拔萃の形をもつて居つたし、また、經濟地理學の本質に關しても、生産の分布を研究するのが、その目的であると解せられてゐた。

即ち經濟地理學は、生産地理學なりと見做されたのである。そして、個々の經濟生産物の全地球上の分布、或は國土内の分布は、統計的形式を以て、自然の場所的諸關係を考慮に入れて記述された。かかる際、地的束縛性を考慮した生産の代りに、生産物、或は商品分布論が、あらはれる様な危険が極めて大であつた。時には、生産地理學<sup>(二)</sup> Produktionsgeographie の敘述は、地理學的に形成された商品學のうちに、自らの正姿を没入してしまふこともあつた。その際、人間の經濟的活動は、一般に、經濟階梯或は文化階梯を定立するといふ點から評定されたのである。

註一 A. Hettner: Das Wesen und die Methoden der Geographie. G. Z., Leipzig 1905, S. 559 u. 563.

註二 生産地理學(Produktionsgeographie)に對して、ヘットナーは「地理生産學(Geographische Produktenkunde)の名称を採用し、個生産、或は個生産物の地理學的分布の知識は、地理生産學として表示され、經濟的生産の科學か、或は商品學に屬してゐる」と云つてゐる。(A. Hettner: a. a. O., S. 559 ff.)

而して、生産は、地域によつて分量的に相違して居る。而かも生産物は、消費されなければならぬ。従つて消費も亦、地域によつて分量的に相違してゐる。故に、地球上には、生産地域と消費地域とが、成立するわけであり、その結果として消費及び使用も、經濟地理學的考察の

なかに入れなければならぬ。こゝに消費地理學が成立することになる。

然るに、生産物は、生産、交換、消費の三過程を経過して行くものであるが故に、生産に對して生産地理學、消費に關して消費地理學が存在する以上、生産物の經濟過程の中間項たる交換に對しても、地理學的考察が、成立しなければならぬ。即ち、この生産地理學と消費地理學との中間項は、屢々商業地理學(Handelsgeographie)と稱されたものである。

然らば、商業地理學とは、如何なる意味を有してゐるか。オスバール及びエッカート(W. Osbahr u. P. Eckardt)の所謂「斯學は商人的専門科學(kaufmännische Fachwissenschaft)である<sup>(一)</sup>」<sup>(一)</sup>や否や。

商業とは、生産された財貨を、その過剰地域から、要求地域へ交易なさしむるものである。然らば、商業地理學は、財の交易に關する地理學であるか。従來、商業地理學といふ名稱を冠した教科書は、多々あつた。が、その多くの内容を點検して見ると、それは嘗つて、經濟地理學と解釋されて居つたものと一致してゐることが多かつた。従つて商業地理學は、經濟地理學の別名に外ならないといふことになる。勿論、生産財の交換としての商業は、經濟地理學の取扱はねばならぬものである。然し、經濟地理學は、更に、取引所や金融技術上の諸設備の考察

をも、自個の固有領域に誘導しなければならぬだらうか。問題とするところは、特に運行してゐる財貨の分量と價值とに關する統計表的概念及び商業都市、定期市場、市場、商業中心地に關する學問と更に、中間取引、直接取引、交換取引などの形式のもとに於ける財貨授受の方法に關する問題とである。が、かかる際に於ては、商業は、常に貨幣交換、組織、銀行業務を考慮のうちに入れて、利潤を獲得しようとする企圖を以て、財の交換を媒介する事象——それは疑もなく、經濟地理學的思考方法から、遠くはなれた方法で、財の交換を媒介する——事象と考へられてゐるのである。

かくして、商業實務的、商業技術的問題が、解決されるならば、尙こゝに、商業場所の分布と、輸出入の高度との二問題が、地理學的考察に對して、即ち、空間景の點から把握し得る側面に殘存することになる。經濟地理學は、この二問題をも取扱つてゐる。かくして、商業地理學は、地理學的考察に於ける商業素材の優越してゐることを示視してゐるのではなく、それは結局、商業の方面からの強い要求によつて、經濟地理學の絶えざる發達が、惹起されたと云ふことを表示してゐるにすぎないのである。時には商業地理學を非常に狹義に解し、外國貿易の原因と結果とを研究する學問となしてゐるものもある。

而して、その方法論の觀點から、サッパは、原因考察の多寡を以て、經濟地理學と商業地理學とを區別し、「記載的な商業地理學に對して、原因考察の再來を以て現代の經濟地理學の特徴となしてゐる」<sup>(三)</sup>のである。

註 I Oshahr-Eckardt: Wirtschaftsgeographie und Wirtschaftskunde. Hannover 1929, S. 3.

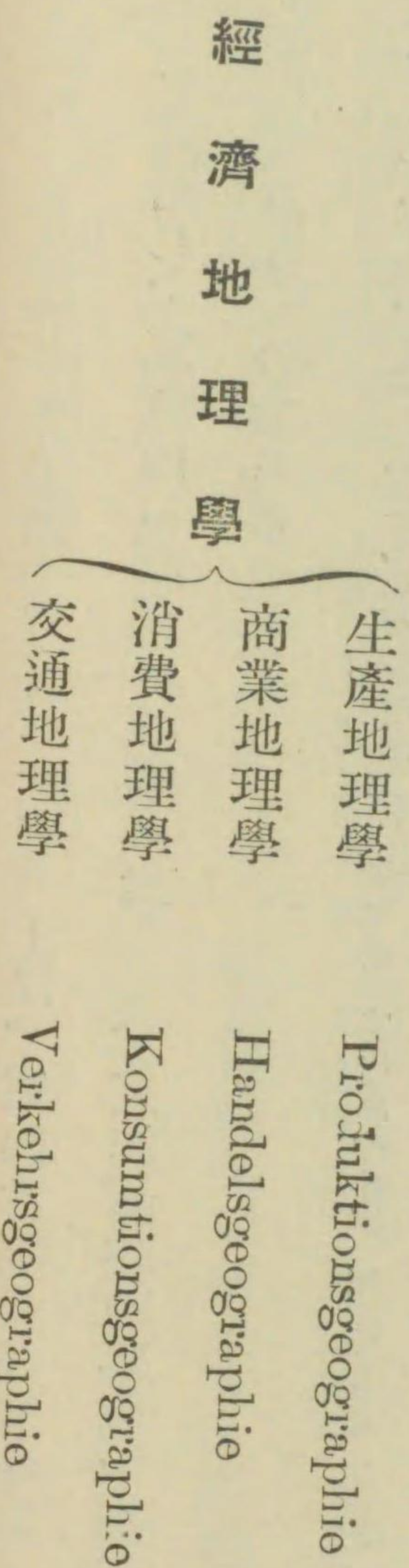
註 II ヘットナーは、「應用或は特別地理學の最重要は、商業地理學が、又は今日廣く採用されてゐる經濟地理學であつて、この學問は、異なる地球空間に於て、經濟的生産と交換との地理學的整理と分布とを對照にもち……」と云つてゐる。同く、商業地理學を經濟地理學と解してゐる(A. Hettner: a. a. O., S. 553 ff.)。また、ゲッツも、既に一八八二年のベルリンの地理學雜誌に、「經濟地理學(商業地理學)の課題」と云ふ表題のもとで、概念論一般を論じてゐる。(W. Götz: a. a. O., S. 354 ff.)

註 III K. Sapper: a. a. O., S. 2.

生産地理學——商業地理學——消費地理學の體系に於ても、まだ完全と云ふことは出來ぬ。生産、交換、消費の生産物進行の經濟過程はそれで完了的なもの様に考察せらるゝのであるが、尙そこに缺陷がある。即ち、空間把握は、人間、財貨、通信及び空間景のなかで捕捉の出來る手段などの地理的分布及び空間的運動を敘述し、説明することを要求する、即ちこの要求の具體化が、交通地理學である。而して交通地理學が、交通關係の地理的分布に關する學問と

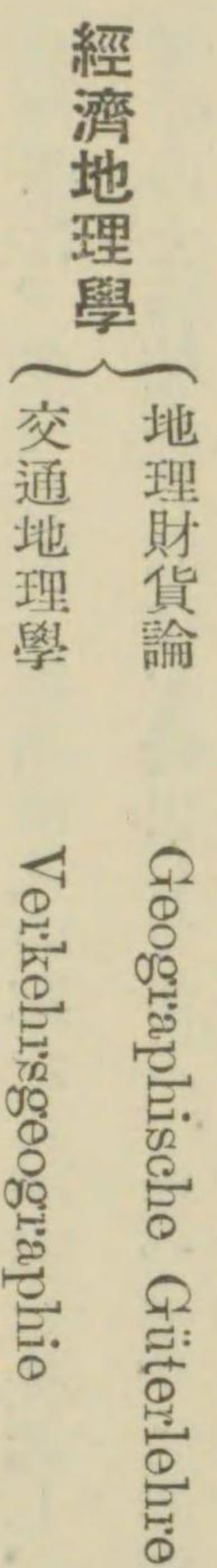
解されるか、或は、人間と財貨とを通じて行はれる空間結合の學問と解されるかの問題は、經濟地理學體系中に於ける交通地理學の位置に關しては、先づ差當り關係のないことであらう。然し、「商業地方誌經濟學」(Handelschorographische Wirtschaftskunde)を希望することは、國家學と商業政策との方面に、個々別々に侵入してゆくことを意味してゐる。かくして、ベック(L. C. Beck)は、利潤を、商業の主要觀念に導入し、商業地理學を以て、生産と消費との地方誌であるとなしてゐる。かくするとき、商業地理學は、財の生産場所と消費場所とを確立し、生産と欲望とを對立表示し、更に、財貨の集散地と市場とを取扱はねばならぬ。斯學を、かくのごとく解するならば、斯學は、精々、「商業統計的地理學」(handelsstatistische Geographie)にすぎないだらうと云ふことになる。

かくのごとくして、經濟地理學の第一次體系は次の如くなる。



この分類に於ては、經濟事象が、その上で演せられてゐる土地、即ち、空間的基礎は、當然附與されてゐるものと見做されてゐる。勿論、生産から消費に至るまでの個々事象は、常に、地理學的要素から説明されなければならぬ。

この分類法と同一方法を採用してゐるのは、ラインハルト<sup>(1)</sup>で、財貨生産と財貨運動との地理的依存を研究するに際して、經濟地理學は、これを二部門、即ち



とに分類されてゐる。

註一 L. C. Beck: Die Aufgaben der Geographie mit besonderer Berücksichtigung der Handelsgeographie. Stuttgart 1884, S. 44.

註二 ラインハルトは次のことき理由を以て經濟地理學を二部門に分つてゐる。「生産は、交通と同じく、決定的方法で地理學的條件から影響され、あらゆる動・植物の原生産は、土地の構造、土地の形態、氣候、該當地域の灌漑、販賣市場に對する位置などに依存してゐる。また、一方、土地富源の探掘や、工業品の生産は、一般獲得物よりは、より多く地理的所與に制限されてゐる。これと同じく、交通に對しても、空間的遠隔、土地形態、高度位置、氣候狀態……などが交通可能地域に對して、決定的役目をなすものである。上述の物産生産と物産運動との地理的依存を、經濟地理學は、

二部門—地理生産學と交通地理學とに分ちて研究すべきである」となしてゐる。

R. Reinhard: Über Wesen und Wert der Wirtschaftsgeographie. Mitt. d. Verlagsbuchhandlungen, Hirt in Breslau, Nr. 3, 1924, S. 38.

以上の分類法以外に、交通地理學を經濟地理學から取り出し、後者と同時に對立せしめる法がある。即ち、交通地理學は、既に早くから、經濟地理學と同資格の獨立したる領域として全體から取り出されて居つた。勿論、經濟地理學と交通地理學との境界は、地理的なもの、換言すれば、相互に交錯し合つてゐる地帯で、鋭い線状のものでないことは云ふまでもない。然し經濟地理學は、主として、現經濟人の點から問題を提起し、一方、交通地理學は、主として、交通條件の立脚點から問題を提出してゐる。従つて、この兩者の間は、類縁的なものでありながら、共に獨立の地位を保有してゐるのである。そこで、次の第二次分類法が生ずる。

生産地理學

經濟地理學

商業地理學

消費地理學

交通地理學

而して、經濟地理學の體系に對する集中統一化運動は、尙、依然として繼續されたのであつて、その結果として、財生産の地理學的考察、即ち、生産地理學が、斯學の主要課題となり、商業地理學と消費地理學とは、それらが現實に、地理學である限り、商業・消費地理學のなかに綜合されてしまつたのである。

また、フリードリッヒは、經濟地理學を生産地理學と商業・交通地理學との二部門に分ち、後者から、消費地理學を存立せしめてゐる。これからみても、生産地理學を重要視してゐることが窺知されるのである。

經濟地理學の所謂、三副部門の分割は、一般に、純理論的なものである。蓋し、地球の經濟的空間景のうちには、生産と消費とは、極めて密接に錯綜し合ひ、之を分離するには、強力を必要とする。この觀點から出發して、ラインハルトは、これ等の三領域を「地理財貨論」(„geographische Güterlehre“)換言すれば、財生産の地理學的依倚關係に關する學問として總括してゐる。彼は、この考察を次の如く分解してゐる。

一、空間的分布、即ち、財貨の靜態論(Statische Güterlehre)

二、因果關係の説明、即ち、財貨の動態論(Dynamische Güterlehre)



かくのごとく、經濟地理學の考察方法を、靜態的考察方法と、動態的考察方法とに分割することは、經濟地理學それ自體と同じく古いものである。このことは、既に、空間に於ける財の分布以外に、この分布の原因を、先づ、自然への依存關係のうちに、次に、現經濟人への依倚關係のうちに認めた時代に見ることが出來た。經濟地理學といふ名稱の創始者たるゲッツは要求した——「地球を人間の營利活動の地盤と解すべきである。換言すれば、經濟生活、即ち、財貨の生産と運動とを、地球空間の自然的準備を以て、立證しなければならぬ」と。然し、ゲッツの要求は、今日から批評すれば、餘りにも狹義である。我々は、自然への一面的依倚關係を超越して、外圍(環境)と現經濟人との間の因果關係及び生産、商業、消費の三領域に及ぼす外圍の作用を問題としなければならぬ。

註一 E. Friedrich: Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie. Berlin 1926, S. 2.

註二 R. Reinhardt: a. a. O., S. 37—40, 56—58.

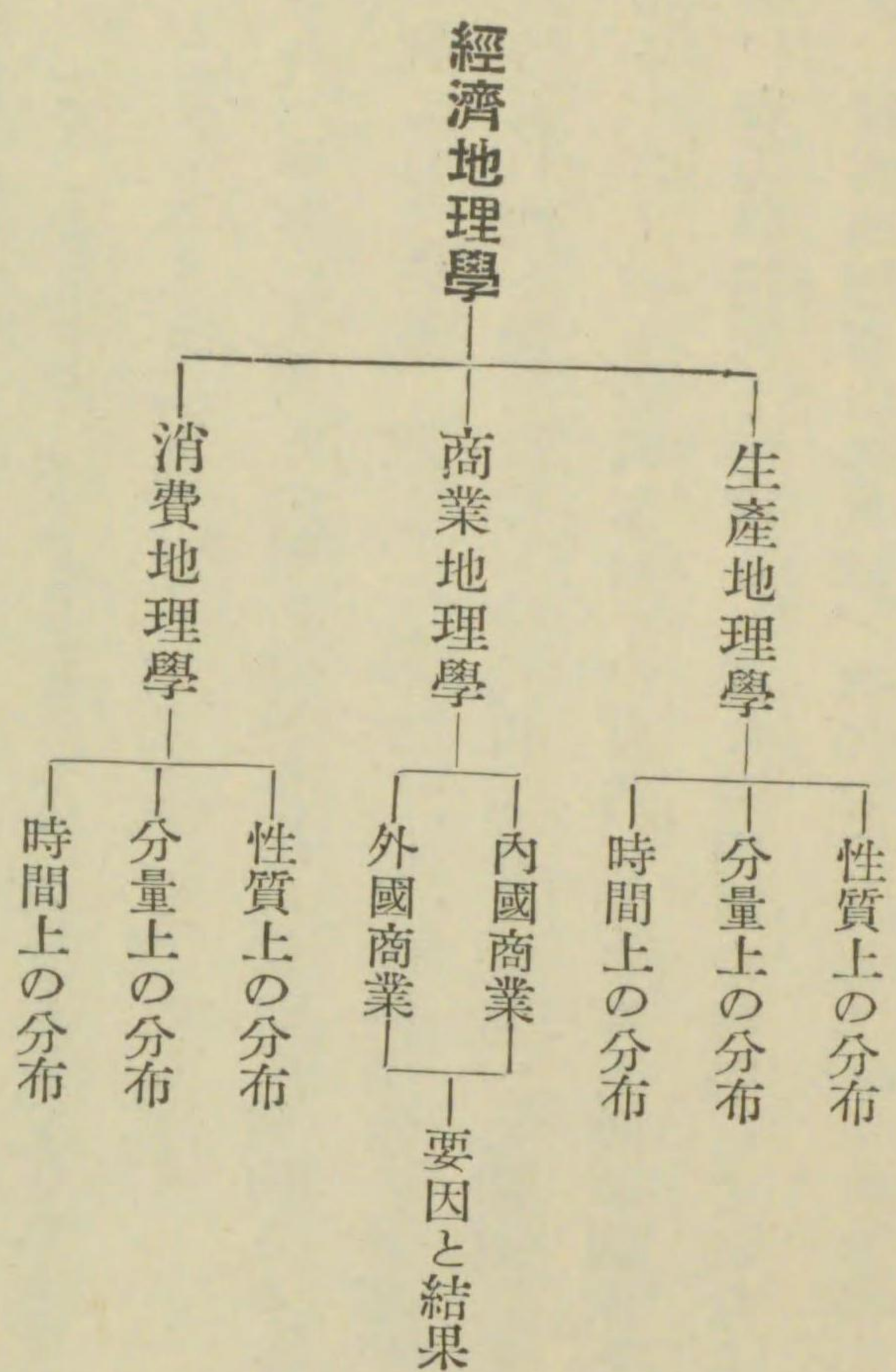
註三 W. Götz: Die Aufgabe der wirtschaftlichen Geographie. Ztschr. d. Ges. f. Erdk. Berlin 1882, S. 364.

かくの如くして、經濟地理學は、如何なる範圍まで、自然が經濟生活を制約してゐるか、如何に、これに作用を及ぼしてゐるか、或は、如何にして景觀なる地理學様相に、特定の特徴を

附與してゐるか、を示現しなければならぬ。換言すれば、環境と現經濟人との間の交替作用の研究に始めて始めて、經濟景の正當な觀念が與へらるゝのである。環境と現經濟人との二要素は、到底、離すことは出來ない。何んとなれば、英國の經濟地理學者ブラウン(R. M. Radnose Brown)の言明のごとく、人間社會は、それが生活し、活動してゐる環境から、はなれて考究することの出来るやうな抽象物ではないからである。従つて、經濟地理學の本質に關する今日の見解は、次の如くである。

Die räumliche Verbreitung der Wirtschafterscheinungen, wie sie durch die Wechselwirkung zwischen Erde und Mensch bedingt sind.

即ち、「地球と人間との間の交替作用に依つて制約さるゝがまゝの、經濟現象の空間的分布」の研究これである。然し、このことは、經濟現象の分布が、分量と性質とに於てのみならず、時間的制約性と變化性即ち時代相(Temporität)に關連して陳述しなければならぬことを包含してゐる。ブーバンの云ふ如く、「自然に對する人間の關係を、考究せんと欲するものは、その考察を、廣義の現在と呼べる、様な短期間に制限してはならぬ」と。かかる要求を考察に入れるとき、經濟地理學の體系は、次のごとくなる。



經濟地理學研究の本質は、單に、自然と人間との間の交替作用に基いて、經濟價值を空間的に把握せんとするところにあるばかりでなく、又、自然的關係と現經濟人の生活表現とを研究し、敘述するところに存在してゐることを認識しなければならぬ。とくに、このことは、經濟地理學に於て、色々な素材を秩序付ける際に、考慮しなければならぬ。かのサッパ<sup>(一)</sup>は、このことを、極めて明確に、彼の高著「一般經濟・交通地理學」の序論に述べてゐる。そして、該書に於ける經濟地理學の章節を、次の如くに分つてゐる。

- 一、經濟に及ぼす自然の作用
- 二、現經濟人としての人間
- 三、財生産の概観

また、フリードリッヒ<sup>(二)</sup>は、一般經濟地理學を二章に分ち、第一に經濟地理學の課題を論じ、第二に、動態及び靜態經濟地理學、即ち、經濟の要素とその地理的分布とについての學問を取扱つてゐる。更にまた、田中秀作氏は、「經濟地理學の本質及びその内容についての私見」<sup>(三)</sup>に於て、經濟地理學概論要目の一例として次の如くに分章してゐる。

- 一、緒論
- 二、物産地理學
- 三、工業地理學
- 四、商業地理學
- 五、交通地理學

この分類に於て、他の多くの權威と異なるところは、工業地理學を、他の部門と同位地に置いてゐることである。

更にまたリネットゲンスは、經濟地理學を左の三點から論述して居る。

- 一、經濟生活の自然地理的基礎
- 二、現經濟人に對する動・植物界の意義
- 三、經濟支持者としての人間

かくのごとく、種々な經濟地理學の分類方法があるが、筆者は、本書に於ては、主として、<sup>(四)</sup>デイートリッヒに從つて、經濟地理學の内容分類を、一、經濟地理學の本質と課題、二、一般經濟地理學(環境論)、三、一般比較經濟地理學(地帶論)の三章節に定めたのである。

註一 K. Sapper: a. a. O., S. 1.

註二 E. Friedrich: a. a. O., S. 1.

註三 田中秀作 經濟地理學の本質及びその内容に就いての私見 地理教育 昭和四年十二月 二二—二三頁

註四 B. Dietrich: Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie. Berlin 1927, S. 5 ff.

## 第四章 交替作用

ミュラーの思想に胚胎して、ゲッツ、ヘットナー、サッバー、リュットゲンス、ジーガー、デイートリッヒを経て、徐々に發展して來た交替作用の理論(Wechselwirkungslehre)とは、如何なるものであらうか。それは一言にして云へば、廣義の自然と、人間との間に行はる、變換作用、即ち、自然が人間を自らに適應せしめ、人間が自然を利用するところの相互作用である。即ち、ジーガーの所謂、「地理的・經濟的關係の空間的擴大を比較して、一方が他方へ、他方が一方へ及ぼすところの交互作用」である。

而して、この際に於ける人間は、單なる人間(Mensch)ではなくして、現に經濟行爲をなしつつ、ある現經濟人<sup>(三)</sup>(wirtschaftender Mensch)たることを必要とする。それは、現經濟人でなければ、文明の飛躍に對して、また文化の支持者として重要な要素と成り得ないからである。自然の脅威に畏縮しながら、漁獵を唯一の業とするエスキモーの如き、或は、獨立と兇暴とを以て原始林にすむ純粹なインディアンの如き、乃至は、採集生活に子孫を養ふバンツ黒人の如き

は、何れも、これを現經濟人として、強く是認するわけにゆかぬ。彼等は、曰はゞ、單なる人間で、エスキモーは、氷原の自然と對立し、インディアンは熱帯の原始林と對抗し、バンツ黒人は、濕潤熱帯の大森林と對存して、徒らに呼吸し、飲食し、睡眠するのみで、これらの對立關係の間には、人間の意志も、自然の魅力も、何等相互的に作用して居らぬ。かくあるべしと希ふ意志と行爲とを有せぬ人間は、茲に所謂、交替作用の一成員としての現經濟人として、深く承認するわけにゆかぬ。

かくの如く、交替作用は、自然と現經濟人との對立關係から生じてくるものであるが、果して、この交替作用に、ある一定の理論があるだらうか。

註一 Wechselwirkung を交替作用と譯したのであるが、相互作用、變換作用、交換作用と譯しても差支へなからう。要は、原因的結果の働きを意味する作用であつて、所謂、單なる相關關係(Wechselbeziehung)、相互關聯ではない。可見の世界に働き合ふ力の作用それ自體で、原因的或は、因果的相互關係(kausale Wechselbeziehung)を指摘するものである。左記参照。

佐藤弘 交替作用の法則 地理學評論 昭和四年八月 五四―六四頁

佐藤弘 ミリウの世界 經濟往來 昭和五年二月 二〇三―二二頁

註二 R. Sieger: a. a. O., S. 96.

註三 現經濟人(Wirtschaftender Mensch)とは、經濟行爲をすることによつて、個人生活或は、國家生活を現に行つてある人々を云ふので、經濟人(Wirtschaftsmensch)とは、その内容を多少、異にしてあるやうである。經濟人は、經濟行爲を思考して居れば、それで充分で、實行が伴ふと否とは別問題である。従つて、自然民族或は野蠻人も、瞬間的に經濟人たり得ることがある。故に、前者は、意志と行爲とをもつてある人を云ひ、後者は、意志のみをもつてある人を稱する様である。

人間と自然との對立に於て、何れが優秀なる力を示してゐるか云ふに、それは大きくみれば、云ふまでもなく自然であつて、自然が人間に附與する影響がより大きい。それは、無機の自然に於て、地震、火山、旋風、氣候などから受ける影響を擧げることが出来る。この場合では、人間は純然たる客體である。而して、第二の影響は、ヘルバツハ及びリユール(Hellpach und Rühl)などによつて代表される地心理學に於て論究せらるゝ様な自然的作用の系列で、この場合に於ても、人間は、依然として客體である。更に、最後の影響は、自然が、大小の事象に於て、人間の能動的行爲を惹起する様な種類のもので、自然によつて與へられた動機に働きかける人間の意志の反作用である。こゝに於て始めて、人間が、主體となる。即ち、人間は、自然との對立に於て、その働き合ふ作用の程度によつて、或る場合には、客體となり、或る場合には、主體となる。

然らば、敘述の自然的事象とは如何。それは、人間に對しては、既に所與のもので、ウィット  
 フォーゲルの「動物と同様に、人間に生活發展の形式を規定する契機そのものより他に何物で  
 もない」ところの廣義の自然それ自體である。それは、曰はゞ、空間であつて、人間は、この  
 空間の中に定置され、これに生活し、分布し、密着してゐる。

「人間は、Fleisch, Blut, Hirn とを以て自然に屬してゐる——ところの自然の一部である。そ  
 して、人間それ自體は、自然力であり、自然物であり、就中、活力ある自覺物 (lebendiges,  
 selbstbewusstes Ding) であつて、生物界に於ては、能動的力を發展させる動物界にぞくしてゐ  
 る。それ故に、人間は、自由に自然から解放されることは出来ぬ」。

従つて、それは二個の異つてゐる本質、即ち自然と人間とはなく、また二個の分離され  
 た存在形式でもなく、それは數千の絲縷によつて、或は強く、或は弱く、結合された有機的合  
 體である。曰はゞ、それは、本來的環境であり、また自然と人間とを意味する「地球」(„Erde“) <sup>(三)</sup>  
 それ自體である。そして自然と人間とは次の如く分ち得る様な、分ち得ない様な關係を示して  
 ゐる合體である。

あらゆる素材富源の父母——Vater und Mutter alles stofflichen Reichthums

物的富源の兩源泉——die beiden Quellen des sachlichen Reichthums

富源の兩創造者——die beiden „Urbildner des Reichthums“

兩本源的生産物創造者——die beiden ursprünglichen Produktbildner

あらゆる富源の源泉——die „Springquellen alles Reichthums“

眞の勞働過程の一般的二要素——die zwei allgemeinen „Elemente des reale Arbeitsprozesses“

二つの絶對的な始原的生産手段——die beiden einzig originellen Produktionsmittel

註一 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 487.

註二 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 505.

註三 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 507.

註四 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 507.

而して、自然空間に於て、或は環境に於て、自然と人間との對立的な結合と影響とのアートの  
 は、對立的な力の結果であつて、環境から環境力を出し、現經濟人から文化力を出し、以て、  
 その交替作用に於て、両者は互に影響し合ひ、自らを變化せしめてゐる。

Milieu Wirtschaftsförder Mensch

Milieukraft ↔ Kulturkraft

即ち、「環境力は、所與の力で、絶對的のものであつて、普段は、無爲のヴェールをかぶつて恬然としてゐるが、一度、理知に近づかれると、環境力は、自ら沸騰し、自ら煙をあげ、以て全體系の調和へといそぐ<sup>(一)</sup>」ところのものである。換言すれば、「自然はたゞ、發展に對する前提条件のみを提供するにすぎず、それが如何なる具合に適用され、且つそれから如何なる結果が齎されるかは、人間の勞働活動に依存してゐるもので、土地の屬性自體は、決して何等の作用をも果さない<sup>(二)</sup>」ところの睡眠状態にあるものである。その作用は、社會的環境と比較してみると、「緩漫にして、左程、明瞭ではないが、極めて根強い<sup>(三)</sup>」ところの自然的外圍である。即ち環境或は原空間の自然力は、土地形態、土地構造、氣候、動植物などの自然的覆掩そのものの中に存するもので、人間の助力を受けぬ所與の力の領域にあるものである。従つて「自然環境の重要性は、それが人間を強制するのではなく、その制限内に於て自由な選擇をなさしめ、文化が形成されるための材料を供給するものである<sup>(四)</sup>」。

然るに一方、これに對して、人間の文化力は、人間の内體的な、精神的な機構から生れ、同時にその要求によつて條件づけられてくる個々の力の總和であることを見ることが出来る。又、バ

ンゼの如く「人間の文化は景觀と民族との共同的結合作用の總和である<sup>(五)</sup>」とみることが出来る。簡単に云へば、文化は衣食住に對する人間の慾求の具體化である。然し、如何なる程度に、如何なる形式と分量とに於て、自然が人間に、その要求を附與するかと云ふことは、自然それ自體が保藏する内容と、一方、人間そのものが提出する慾求との大小強弱によつて、相違するものである。が、この相違はともかくとして、「文化の活動分野としてのみならず、自然的力の分野として作用し、また、かくのごときものとして、文化の養育地であり、發展空間であるところの自然的空間<sup>(六)</sup>」に人間が働き掛け様とするとともに、人間の文化的・經濟的働が、挿入してくるので、衣食住に對する勞働能力が起つてくるのである。こゝに人間と自然的環境との間に和解協定がみられ、自然は、人間の要求に感じて、附與する形式をとる。即ち人間の意慾し、勞働するところに於てのみ、自然の附與がある。かくして、一方に、人間及びその勞働と、他方に、自然及びその素材とが、對立してゐるのであつて、これが人間生活の基本關係<sup>(七)</sup>をなしてゐるものである。

„Der Mensch und seine Arbeit auf der einen, die Natur und ihre Stoffe auf der anderen Seite“, das ist das Grundverhältnis, die „ewige Naturbedingung des menschlichen Lebens

und daher unabhängig von jeder Form dieses Lebens, vielmehr allen seinen Gesellschaftsformen gleich gemeinsam.“

- 註一 佐藤弘 ミリウの世界 前掲 二〇三頁
- 註二 佐々木清治 農業地理研究法 地理教育 昭和五年九月 三一頁
- 註三 伏見義夫 自然的環境と國民性 地理教育 昭和三年六月 一〇頁
- 註四 綿貫勇彦 人文地理學の特性 山崎直方博士記念論文集 地理學評論 昭和五年七月 二一六—二一七頁
- 註五 E. Raase: Die Seele der Geographie. Hamburg 1924 S. 76.
- 註六 O. Maull: Zur Geographie der Kulturlandschaft. Freie Wege vergleichender Erdkunde. München 1925, S. 29.
- 註七 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 507.

更に、環境と文化力との交渉について論述することにする。

環境或は自然は、「労働する人間に、先づ、彼の活動の一般的對照的條件を與へ、彼に場スタンド所オルト(Locus standi)を供給し、更に總ての生産の要素として、又、あらゆる人間の働きの要素として、空間を與へる。故に、自然は、人間に、充分な生活財、穀類などを獲得することの出来る本源的食料庫を附與する。かくして、自然は、労働手段の本源的武庫であり、また第一次労働對照の自然貯藏所である。」<sup>(1)</sup>かくてこそ、人間の労働能力は、自然の上に、また、自然の中に依

倚してゐることが知られるのである。

云ふまでもなく、第一次的行使の動機は、欲望動機であつて、労働自體は、環境の變化の中に存在し、その効果は、經濟的のもので、慾求の満足に對する生産物の創造の中にある。

然しながら、經濟效果(Wirtschaftseffekt)は、人間の環境に及ぼす作用の簡單なる最終生産物以上のものである。もし、本源的に經濟的意欲(wirtschaftliches Wollen)が一方に存在し、環境の自然力が他方に存立してゐるならば、經濟效果は經濟的能力(wirtschaftliches Können)の函數であつて、その總體に於ては、經濟效果は、經濟的能力によつて條件づけられ、同時に文化的機構、即ち文化水準に従屬してゐる。その兩側に於ける組織因子は

Natur Mensch

Milieu ↔ K

(Funktion des Kulturniveaus)

のごとくである。

而して、空間に於ける人間の經濟效果の發展は、たゞ、高度化の慾求に於てのみ、即ち、より高い文化水準に於てのみ可能である。換言すればより高度化の經濟水準(Wirtschaftsniveau)

は、單に、より高度化の文化水準の基礎に於てのみ可能であると云へる。然らば、その限界は何處にあるだらうか。もし、文化的意慾或は文化的渴望が、同じ大きさの能力によつて満足されるならば、即ち

Wirtschaftl. Wollen = Wirtschaftl. Können

WW = WK

であるならば、經濟的均衡の状態は達せられて、確たる文化階梯——それは同時に、經濟階梯である——がつくられる。しかし、自然と人間とは、各平等に、同種に、全地球に分布しなかつたために、經濟階梯の自然的發達は、空間的相互に強い變化をもち來したのである。即ち、自然と人間との二つの成員は、空間的に差異があつた爲めに、茲に經濟效果の空間的差異が惹起されたのである。而かもその差異は、理論的には零から無限大まで展開されてゐるし、また實際、地球上に於ては、空間の不平等的分割のために、多様性の文化階梯と、多面的な經濟階梯とが生じてゐる。そして、人間は、低位から高位への經濟階梯の實現に力をつくし、環境の支配化に努力してゐる。然し、環境或は自然の完全な支配は、決して到達せられないであらう。否、エンゲルスの云ふごとく、「征服は基本關係そのものを決して破壊しない。一征服者が、他

民族を支配したごとく、我々は決して、自然を支配することは出来ない」<sup>(1)</sup> ごとく、環境に對する完全支配化の理念は、環境の要素が、地方的に人間から馴化される様なところに於てのみ實現されるのであつて、全地球表面に對しては、それは困難であり、全地球面に對する環境支配化の理念こそは、實に一の Utopie である。

註 I K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 507.

註 II K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 732.

註 III 我々の爰に所謂「環境は、自然的環境を意味するものであつて、社會的環境を指示するものではない。伏見氏によれば「地理的環境には、社會的環境と自然的環境との二種があつて、前者は、人種、言語、政治、宗教、職業などの差異、文化の程度、貧富の差、人口密度などの點に於て、國民性を支配するもので、その影響は、顯著であるが、後者の作用は緩慢で根強いものである」と説明してゐる。これによつて明かなごとく、地理的環境は二つに分けらるゝのであつて、何れも地理學の研究對照としては重要なもので、綿貫氏は「環境論は、地理學の一指導原理であり、當然の權利であり、或はこの關係を確めないならば、その精神を失ふであらう」と云つてゐる。かくのごとく、環境論の研究は必要なものである。

伏見義夫 自然的環境と國民性 前掲 一〇頁

綿貫勇彦 人文地理學の特性 前掲 二一五頁

尙、人間の自然界に與へる影響についての左記文獻參照



R. L. Sherlock: The Influence of Man as an Agent in Geographic Change. The Geogr. Journ. Vol. LXI, No. 4, 1923, pp. 258—268.

G. P. Marsh: The Earth as Modified by Human Action. 1877.

J. Ritchie: The Influence of Man on Animal Life in Scotland. 8 Vol. Camb., 1920.

R. L. Sherlock: Man as a Geological Agent.

かくのごとくして、現經濟人は、時間的にも、空間的にも、非常に變化的要素のものであつて、それは、文化水準の本質の中に深く基礎づけられてゐる。内的な文化向上によるか、或は外的な文化同化(Akkulturation)によるか、その何れかによつての文化水準内のあらゆる變化は文化的意慾及び文化的能力の要素を變化せしめる。而かも、それは終末のない系列で、新しい經濟効果は、文化水準の高調に對して刺戟となり、永久の交替作用に於て、作用と反作用とは、文化水準を高め、自然景を變化せしめ、更に經濟効果の種類、分量、分布を増加せしむる。とくに、自然と人間との關係に於ける純粹な交替作用は、あらゆる文化及び經濟表現の初期に存在してゐるものである。環境の變化が、挿入されるときには、本源的環境の自然力の代りに現經濟人の勞働表示で負はされた新しい環境が生ずるのである。かくして、原始景と人間との交替作用は、原始景と文化景とを加へたるものと、現經濟人と文化水準の函數とを掛けたる

ものとの間の交替作用に變化する。即ち

Urlandschaft  $\longleftrightarrow$  Mensch

は次の如くなる。

Urlandschaft plus } wirtschaftsförder  
Kulturlandschaft } Mensch mal fk  
UL+KL  $\longleftrightarrow$  WIM×FK

右の交替作用の關係の左項に於ては、たゞ二個の空間景、ULとKLとが存在し、右項には、人間が、その分布に於て空間に結合されたものとして、即ちそれ自體空間形像として存立してゐる。即ち人間は、可變的大さの生活要素FKを負はされてゐる。

而して、敘述の考察に對して、決定的斷定を投ずるものは、交替作用の發展關係が、單に空間に於ける確たる時間切斷に對して妥當であるかどうか。また、その關係があらゆる場合に於て有効性をもつて居るかどうか。換言すれば、UL+KLの結合の確たる環境が、WIM×FKの人間に對して、常に同じ重要性をもつてゐるかどうかと云ふことである。

こゝに於て重要になつてくるのは、時の問題である。時の状態は、FKによつて表示さるゝ、

人間の働きに對して、常に地理的要素のみから追従されてゐるとは限らぬ。これに對する原因は——確たる時期に對して現經濟人の確たる計劃が挿入されるから——その原因は、他の領域、例へば、政治的或は社會的結構に於けるが如き領域の上に横たはる要素によつて條件づけらるゝ。文藝復興の末期まで盛んであつた伊太利の文明と、ハンザ同盟時代のリュベックの隆盛とは、一は内海文明の中心に位し、他はバルト海の中心的重要位置を占めて居つたことに原因してゐるのであつて、兩者が、現代、衰頽したのは、文明の中心位置移動といふ地理的原因によつてゐるのである。而かも、この二現象は、近世の初期に於て許されたと云ふ時代相を必要とする。また、世界のゴム生産の三分の二以上を消費してゐる米國の盛な自動車工業が、南洋一帯に於けるゴムの栽培景に變化を促し、また、米國に於ける盛な生絲の消費が、我國に於ける桑園の擴大、製絲工業の發展を促し、以て我國の栽培景と都市景とに地理的現象變化を與へてゐる。而かも、この兩變化は、現代といふ二十世紀の初期に行はれたと云ふ時代相の考察を必要とする。それはゴムと生絲との消費が、過去になかつた如く、將來、永遠につゞくものとは限らぬ。即ち、南洋ゴム化の經濟景と日本生絲化の經濟景とは、その發展過程に於て、時代相の考察を要する。故に、交替作用には、時代相の挿入を必要とする。そこで、廣義の時間性、

變化性、或は時代相 (Temporität) の事實が貴重な要素になつてくる。かくして時の狀態の總體を、+のもとに包含せしむると交替作用の式は次のごとくなる。

$$UL + KL = WIM \times FK \times t$$

プレハノフ (Plechanow) 曰く「英國の歴史に於て、地理的環境は未だ嘗つて、その影響を何等かの方法で、土地の經濟的發展に行使することを停止したことはない。それはクロムエルの時代とケーザーの時代とに於ては、異つたる方法で、土地の住民と財生産の形成とに影響を與へてゐる」と。即ち時代によつて環境の威力が人間に提供する形式は異つてゐるものである。

中世に於ける歐羅巴の民族移動や、十九世紀に於ける歐羅巴人の新大陸への移住は、自然の環境力が、只中世と十九世紀とに於てのみ、人間の意志力と融和して許した移動現象であつて今日、新大陸の一角に、よし従前に數倍する金礦が発見されたとしても、そこに必然的な民族移動が展開さるゝとは限らぬ。政治的・社會的な地理的以外の他の原因が、これを妨げるにちがひない。即ち、こゝに於ても時代相の考察を必要とするのである。

註一 景觀とは如何、原始景と文化景とは如何、の問題は、屢々論述せらるゝところのものであるが、その概念を判然と把握することは困難である。モツセルスに従へば、「人間が如何に環境に結合してゐるか」と云ふ方法と人間それ自體と

が、景觀(Landschaft)の主要要素である」と。そしてバツサルダの意味に於ける景觀學は、人間活動の實際的、或は可能的現場の學であるところの環境學(Milieukunde)であるとなしてある(モツセルス、一六三—一六四頁)。かりに景觀は、かくのごときものとするならば、自然景と文化景(Urlandschaft od. Naturlandschaft u. Kulturlandschaft)とは如何なるものであらうか。

「クレングス(N. Krebs)は、自然景と文化景とを對立させ、自然景は、人間活動が、未だ何處に於ても景觀を變化させないもので、植物も主として原生のまゝであり、人間の住居もその中に蔽ひ隠されてあることを以て特徴とするに對して一方、文化景は、狹隘なる地域から解放せられ、外部から來る要素に慣れる力も、はるかに増加したことを以て、特長とするとなして、前者の自然景の例として、シベリヤの Taiga オーストラリヤの Scrub 中央サハラの Tibus の様な狩獵をこととする極く幼稚な文化程度の地域をあげてある。(保柳、五六—五七頁)これが自然景と文化景との相違であつて、兩者は人間の文化力、經濟力との結合如何によつて、その内容程度の變化を示すものである。

かくしてクロイツブルグ(N. Creutzburg)は次の如く云つてゐる。人間から居住及び經濟空間として占領さるゝ景觀は人間の影響の強いが、弱いが、或はその方法の如何によつて、自らの景觀の觀相(Physiognomie)と特長との變化を経験するものである。かくして自然景は文化景に變化する。この文化景への發展は、單に、總體に於ける景觀の變化を意味するのではなく、確たる景觀要素(Landschaftselement)の變化、即ち、確たる觀相學的に重要な現象群の變化を意味するのである。かかる發展は、土地形態及び水系の景觀要素の不變的存在のもとに、或は他の景觀要素、例へば、植物などの變化の中に、または、新景觀要素、例へば人間の居住場所、營利生産場所、交通路の變化の中に行はれるものである。文化的景觀要素は、可變的要素として、確たる不變要素と對立することが出来る。そして、文化景への發展は、可變的景觀要素の Komplex の發展より以外の何物でもない」と。(クロイツブルグ、四六頁)

J. Moscheles : Das logische System der Geographie des Menschen. Mitt. d. G. Ges. in Wien. Nr. 5-6, 1926, S. 163

保柳陸美 文化景觀の理論的研究 地理學評論 昭和四年十一月 五六—五七頁

N. Creutzburg : Die Entwicklung des nordwestlichen Thüringer Waldes zur Kulturlandschaft. Freie Wege vergleichender Erdkunde. München 1925, S. 46.

辻村太郎 文化景觀の形態學 山崎直方博士記念論文集 地理學評論 昭和五年七月 六五七—六八九頁

註二 政治的原因によつて、交替作用に變化を附與するものはアメリカ合衆國の移民法案である。米國の栽培景と日本人の意志との間には強い交替作用の絲條が、引かれてゐるにも拘はらず、アメリカは法案を以て、日本人の流入を防いでゐる。我國の人口過剰と豊かならざる經濟景との關係を考察するときに、大正十三年以來の現代といふ時代の考察を挿入しなければならぬ。これが政治的分野から起つた原因である。

註三 K. A. Wittfogel : a. a. O., S. 729.

第五章 方法論<sup>(一)</sup>

交替作用の理論は、その結果に於ては、從來の素材處置を改容し、且つ擴大するところにある。自然と人間との對立的關係の相互把握は、自然的要素と現經濟人との記述に結合させなければならぬ。茲に於て一般的考察は次のごとく分割される。

## 一、自然的基礎

## 二、現經濟人

## 三、兩者に於ける交替作用

この三領域が、經濟現象を解くに當つて相互に混流してゐる。事實に於て、この三要素が環境の描寫に結合してゐる。従つて、これらのものは、環境論 (Milieulehre) といふ表象のもとに要約することが出来る。

而して所謂、生産地理學、即ち、財貨の空間的分布とその原因との學問は、全地球に對しても亦、地球の個々切斷——大陸或は地方——に對しても、同一な記載に於て與へられた。その

際、動・植・礦物の三自然界に従つての實際的區分が屢々行はれた。これがために、地球の大部分に起る一般的現象は、かくのごとき特別な、地方的な自然と合同するのである。かかる根據に基いて、「一般」は「特別」から解かれなければならぬ。

而して、環境論は地球上に於て空間的に把握され、而かも、生産と消費とによつて極印される經濟現象の中に、その應用性を見出し、常に經濟現象に對して、自然の事象と現經濟人とが如何に、相互的に働いてゐるかを検討するものである。そして自然條件や地形及び位置の上から、本源的大自然地域を地帶的に整理することが、經濟効果を、その空間的整理に従つて地球上に表示することを暗示するものである。これが、即ち、從前の分布論 (Verbreitungstheorie)

で、これを、我々は、經濟地理的地帶論 (Zonenlehre) にまで擴大するのである。故に、地帶論は、經濟生産物とその消費との大分布地域を検し、また、現經濟人とその經濟階梯とを究め、これらのものが、如何に空間的條件のもとにあるかを検討するものである。と、同時に時代相に對する問題即ち、空間と時間とに於ける經濟地帶の變化性に對する問題も、またこれに屬してゐる。故に、地帶論は、その本質に従つて「一般比較經濟地理學」 (allgemeine vergleichende Wirtschaftsgeographie) と表示することが出来る。

要するに、環境論と地帯論とは、原因と結果との關係に於て存在してゐるか、或は動的考察と靜的考察との關係に於て存立してゐる。この動的靜的のものが即ちフリードリッヒの動態經濟地理學(dynamische Wirtschaftsgeographie)と靜態經濟地理學(statische Wirtschaftsgeographie)とに相當して居るもので、「前者は經濟の要素を確立規定するに對して、後者は經濟要素及び事實の場所的分布を全地球に決定するものである」となしてゐる。フリードリッヒと同じ理由を述べてゐるものは、ラインハルトで、彼は、「經濟現象の因果關係、即ち、現象の大小分布の原因、自然的所與、その他の科學的現象形態及び經過に對する關係などを究むるのが動態經濟地理學であつて、一方、經濟現象の空間的分布を、言葉、地圖……などで地球表面に確立するのが、靜態經濟地理學であるとなしてゐる。」

以上は、一般經濟地理學に、就いてであるが、尙こゝに、特別經濟地理學(spezielle Wirtschaftsgeographie)なるものがある。これは、地球表面の大小何れかの地域に於て、環境論或は地帯論から得られたる成果の應用性を究めるものである。これに對して、サッパは次の如く云つてゐる。即ち經濟地理學は、「一般經濟地理學と特別經濟地理學とに分けられ、前者は、全地球に於ける經濟現象を追究して、その分布に、法則的なものを確立するにあり、後者は、明

確に界さるゝ領域の經濟地理的現象の全體を、空間的特徴的作用、その個性、その住民などから記述し、説明するにある」となしてゐる。

それは曰はゞ、地理學に於ける地誌學に相當するもので、一名、經濟地誌學(regionale Wirtschaftsgeographie)とも稱せられてゐる。現に、經濟地誌學教室<sup>(五)</sup>(Institut für regionale Wirtschaftsgeographie)なるものが、オプスト(Obst)の指導のもとに、ハノーバーにあつて、多くの文獻を出してゐる。

註一 研究方法に關しては、左記シーガー及びドローを參照

R. Sieger : Forschungs-Methoden in der Wirtschaftsgeographie. Verhandlungen des Vierzehnten Deutschen Geographentages zu Köln. Berlin 1913, S. 91 ff.

K. Dove : Methodische Einführung in die allgemeine Wirtschaftsgeographie. Jena 1914.

註二 E. Friedrich : a. a. O., S. 2.

註三 R. Reinhard : a. a. O., S. 36 f.

註四 K. Sapper : a. a. O., S. 2.

註五 B. Dietrich : Neue Strömungen in der Geographie, insbesondere in den Vereinigten Staaten von Nordamerika. Geogr. Anzeiger, Heft 3/4, Gotha : Justus Perthes 1924, S. 55.

而して、一般に、經濟地理學は、地理學の一分科として、綜合地理學と同様に、記述と説明と比較考察をもつてゐるものである。が、その經濟地理學的方法論の特殊性は、經濟科學的隣接領域から得らるる素材を補助科學として利用しつゝ、地理學の見地から、これを整理し作業するところにある。それは、シーガーの所謂「經濟地理學とは、地理學的觀點に従つて完成すべく、實際物質から經濟的補助科學を引出し……」と云ふところに一致してゐる。即ち、世界に於ける經濟景を地理的に説明すること、換言すれば、全地球表面を、經濟と現經濟人との視野に於て、單位的、統一的に考察するところにあるのである。かかる方法論に従つて、素材を調査考究することは、全く經濟地理學にのみ固有であるところの獨立的な結論と成果とを導くものである。

かくのごとくして、我々は經濟地理學のシステムを次の如く定むることが出来る。

經濟地理學

一般經濟地理學

環境論(動態經濟地理學)

即ち、經濟の自然的・人間的・基礎と自然及び現經濟人との間の交替作用論との學

地帶論(靜態經濟地理學或は一般比較經濟地理學)

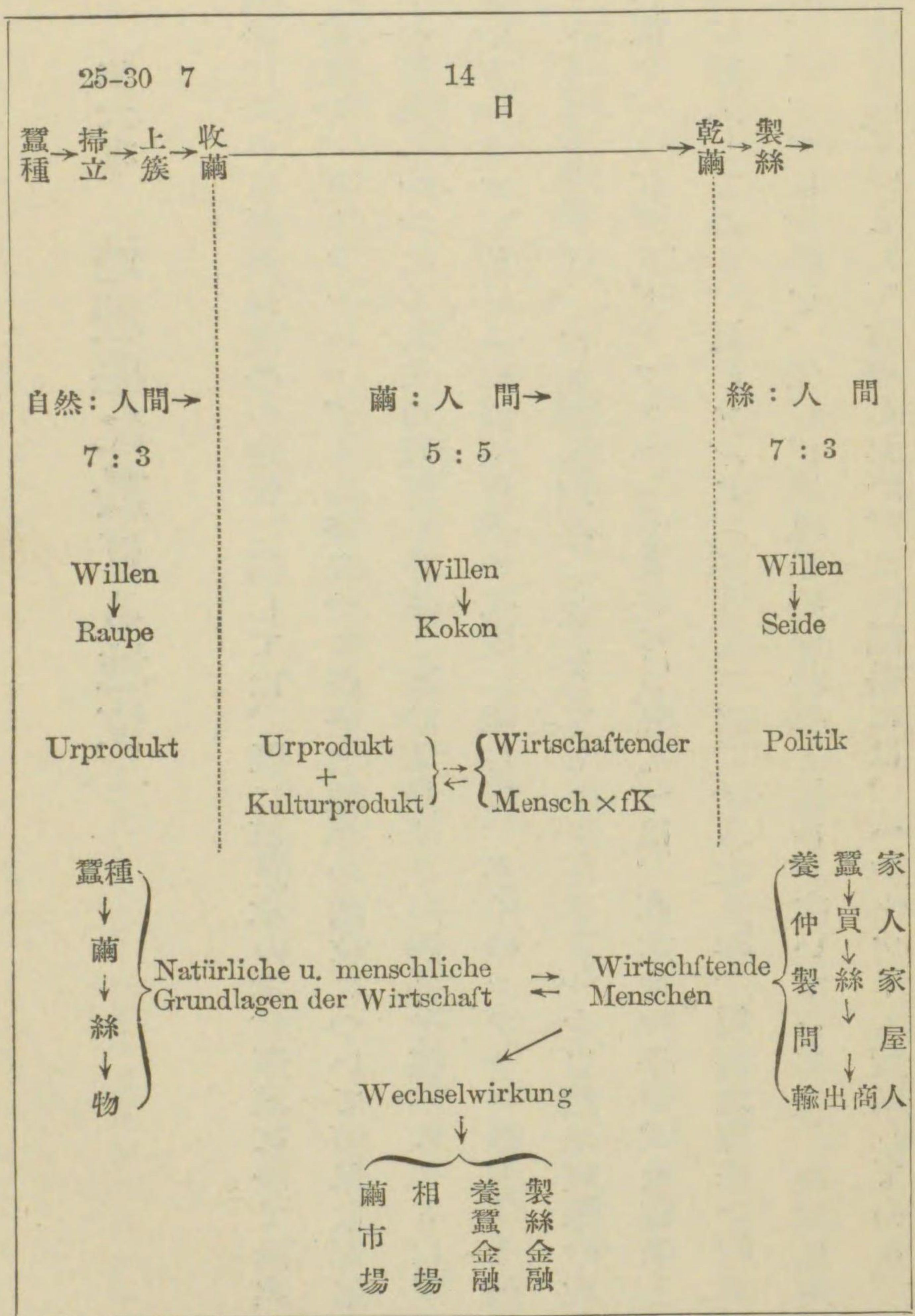
即ち、生産、取引、消費の形態に於ける經濟效果と現經濟人との分布論

特別經濟地理學(經濟地誌學)

即ち、地方的經濟空間の構成準備とその原因との學

註一 R. Sieger in den Verhandlungen des 14 Deutschen Geographentages in Köln 1913.

註二 經濟の人的基礎と現經濟人との關係を我國に於ける蠶絲業一般について表圖すれば左の如くなる。



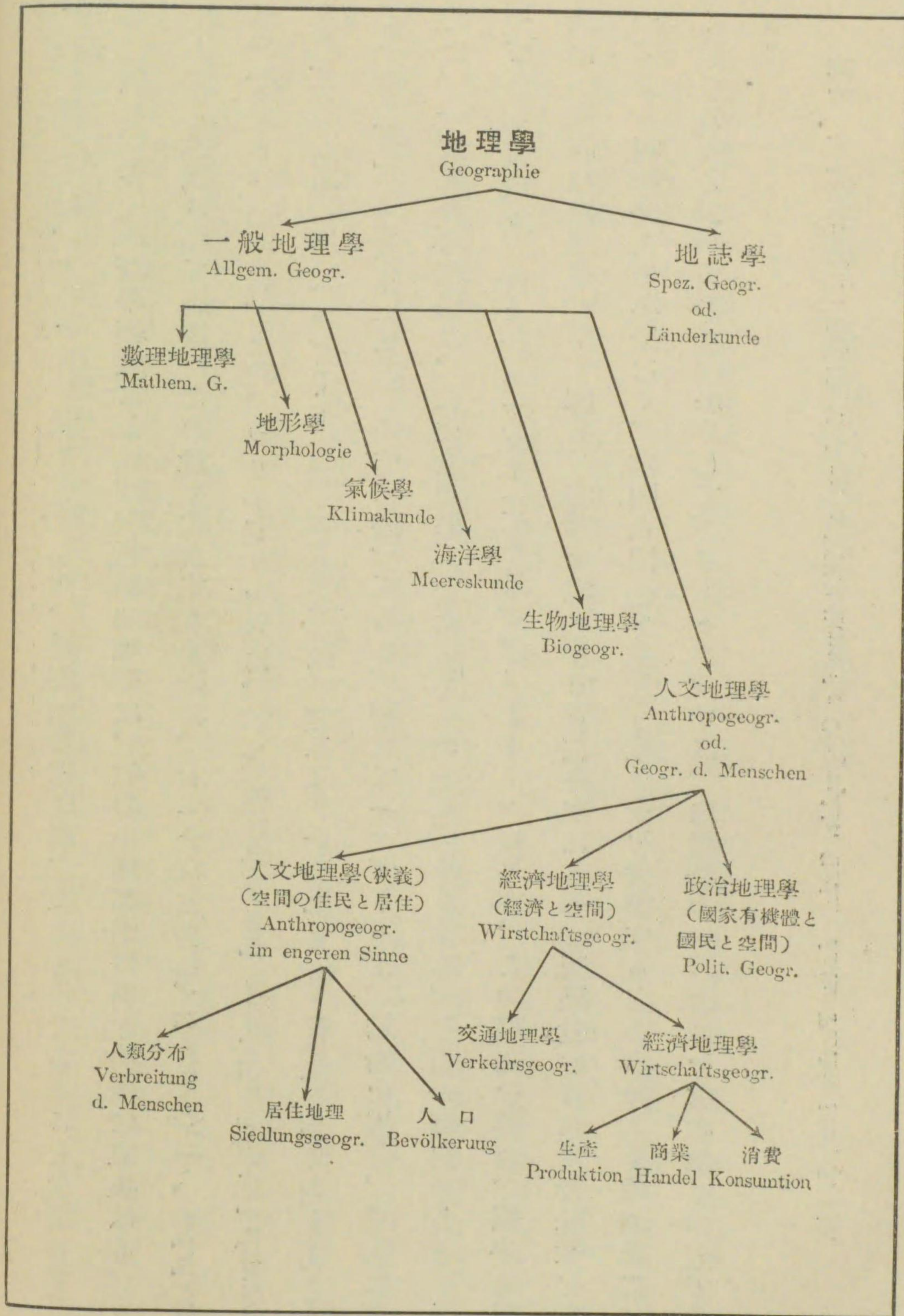
## 第六章 地理學に於ける地位

全地理學に於ける經濟地理學の地位に關しては、既に第三章の素材領域に於て論述したのであるが、尙茲で、ラウテンエッガーの發表せる經濟地理學の地位について簡単な記述を試み、更に若干の權威にかかはる人文地理學の分類と經濟地理學との關係を述べることとする。

地理學のシェーマに於ける經濟地理學の位置に關して、多くのフランス學者——例へばレバヌール (Levasseur) ——は經濟地理學 (Géographie économique) を自然地理學や政治地理學と同列に置き、またザイドリッツ (Grossen Seydlitz) は、商業地理學を、地誌學と一般地理學との間に挿入してゐる。更にマルテ (Marthe) は、一八七九年、經濟地理學を特別科學として表象し、ゲッツは斯學を、先づ、地理學特別科學と認め、次いでその後、應用地理學 (angewandte Geographie) として考察したが、この觀察には、ヘットナーも賛成してゐる。更に、エツカート (M. Eckert) は全經濟地理學に獨立性を與んとし、斯學は、自然科學と精神科學との中間に位して居り、人文地理學に比較すると、より自然科學の方に移動して居ると云つてゐる。

これに關しては、クラウス (Kraus) も亦、經濟地理學は獨立性のものであることを認めて居る。然し、多くの斯學權威によれば、經濟地理學は、他の地理部門科學と同様に取扱はるべきであると主張されて居る。この説を代表するものは、シュナス (B. F. Schuss) の „Lehren und Lernen“ の中に、また、フリードリッヒは „Allgemeine und spezielle Wirtschaftsgeographie“ の中に、ハッサート (H. Hassert) の „Einigen Aufgaben geographischer Forschung und Methode“ (Wien 1919) の中に述べてゐる。而してハッサートは、結論を出し、現代に於ては、一般經濟地理學は、人文地理學 (Anthropo- od. Kulturgeographie) の一部門であると云つてゐる。(以上ラウテンエッガーによる)。ディートリッヒも亦、この理論を認め、經濟地理學は「人間の地理學」——即ち、空間環境 (Raummilieu) によつて制限付けられた特殊性をもつてゐる現經濟人のみでなく、空間人間 (Raummenschen) を考察するところの——地理學にぞくしてゐると云つてゐる。かくしてディートリッヒは、地理學のシステムを次の如く示してゐる。

註一 A. Leutenegger: Begriff, Stellung und Einteilung der Geographie, Gotha: Justus Perthes 1929, S. 149.



更に、人文地理學（或は人類地理學<sup>(一)</sup>、人間地理學<sup>(二)</sup>、文化地理學<sup>(三)</sup>）の内容分類と經濟地理學との關係について、斯學専門家の表をあげて置きたい。一覽すればテウテンエツガーの云つてゐる如く、如何に「人文地理學の内容が、確定してゐない」<sup>(四)</sup>かが、了解せらるゝだらうし、また「ラツチエルでさえも、この點——内容の點に關しては多く公言してゐない」<sup>(五)</sup>ところのものも察知せらるゝであらう。

エフ・ラツチエル 人文地理學

- 一、人類とその事業との地理的分布の要因に關する學（人文地理學の動態部門）
- 二、地理的分布・形態・民族・國家の大さの學（人文地理學の靜態部門）

F. Ratzel: Anthropogeographie. Stuttgart 1882.

エツチ・ワグナー 人文地理學 或は地球と人間

- 一、人類
- 二、人類の自然的肢節
- 三、人類の文化的肢節
- 四、國家（政治地理）
- 五、宗教團體とその分布
- 四、居住と人口密度
- 五、交通路と交通機關
- 六、世界交通と世界貿易

H. Wagner: Lehrbuch der Geographie. 8 Aufl. Hannover 1908.



オー・シュリユーター 人文地理

經濟地理、居住地理、交通地理の三部門に分ち、各部門は、住民地理的 (bevölkerungsgeographische)、文化地理的 (kulturgeographische) 各章をもつてゐる。

住民地理

一 文化地理

人口密度

一 文化高度

二、經濟地理

住民の土地に關する經濟關係 一 地球表面の經濟的利用化及び改容化の地方

三、居住地理

居住地域の人類群 一 居住

四、交通地理

交通 一 交通路

O. Schlüter: Ziele der Geographie des Menschen. München 1906, S. 61.

エ・フライツプソン

一、人類の分布論

(一) 總體論

(二) 人種、宗教、文化群、國家 (一般文化地理と政治地理)

二、人類活動の分布論

(一) 經濟地理

(二) 交通地理

(三) 居住地理

A. Philippon: Mitt. Preuss. Hauptst. f. d. naturwiss. Unterr., H. 2, Leipzig 1919.

エッチ・ハツシンガー

一、有機體としての人類、人種・民族、空間分布に於ける生活現象

二、空間に於ける次の關係

(一) 衣服、居住、經濟、交通に關する物質文化と自然との關係

(二) 宗教、藝術、科學に關する精神文化と自然との關係

(三) 社會、國家に關する物質及び精神文化と自然との關係

三、地理的基礎に於ける歴史哲學の試み

H. Haslinger: Einige Aufgaben geographischer Forschung und Lehre. Wien 1919.

註一 人文地理學 (Anthropogeographie) の建設者は、有名なるギリシヤの醫者である所のヒポクラテスで、紀元前四〇〇年に生れ、當時既に、氣候、水、土地構造が、地方の住民に影響を與へるものであることを、物質及び精神的觀點から考察して、小冊子を著述してゐる。然し、多くの人は、一八八二年に於けるラツチェルによつて、始めて Anthropogeographie のタイトルが使用されたことを認めるであらう。然し、ヴィソツキイ (Wisotzki) によれば、Zeitström-

ungen in der Geographie, Leipzig 1897 には、この承認を與へて居らず、一八〇五年シュムメル(Schummel)の Kleiner Weltatlas には、それまでの地理學は、既に人文地理學に努力して居たのであり、又、哲學者クラウゼ(Krause) から、一八一一年、既に anthropologische Geographie の表示は使用されて居た。又 Anthropogeographie の形は、ラッチェル以前からあつたもの、例へば、Physikalische Handatlas von Berghaus, Gotha 1851 の中にもみられる。

A. Leutenegger: a. a. O., S. 138.

註二 人間地理學は Menschengeographie の譯、人文地理學と同じ意味である。獨逸語では Anthropogeographie は人間の地理學(Geographie des Menschen)と云ふ名稱で再興され、それから徐々に、人間地理學(Menschengeographie)が出現して來たのである。

A. Leutenegger: a. a. O., S. 139.

註三 文化地理學(Kulturgeographie)の名前は、多分、最初カンプ(Kamp)から使用されたもので、彼は、彼の「比較一般地理學」を、自然・政治・文化地理(physische, politisch u. Kulturgeographie)に分ち、空間の文化地理學について述べてゐる。また、リッターは、Kulturgeographie の代りに、嘗て ökonomische Geographie を用ひて、自然地理學と對立させたことがある(Guths Mithis' Zschr. f. Pädagog. 1806)。然し、今日では、Kulturgeographie の名前は、屢々採用されてゐるのである。

A. Leutenegger: a. a. O., S. 140.

註四 A. Leutenegger: a. a. O., S. 139.

註五 A. Leutenegger: a. a. O., S. 139.

## 第七章 領域論

經濟地理學が、最も強い接觸を示してゐるのは、國民經濟學に對してである。經濟地理學と國民經濟學とは限界領域に於て、方法的に、相互に接觸し、掩蔽してゐる。即ち、兩者は、現經濟人とその勞働能力とに於て同一なる素材領域をもつてゐる。然し、それは、兩者の相違する觀點から考察されることは云ふまでもない。即ち、國民經濟學は、「自然と人間との結合を對照とせず、<sup>(1)</sup>交替關係に没頭せず、また、地球上の經濟景を成因的に追究しないだらう。これと同じく、一方、經濟地理學は商業政策、社會政策、貨幣、關稅の本質、勞働問題などに對して發言しようとはしないだらう。その各々の分野は定つてゐる。即ち、經濟地理學は、經濟と自然的空間及びその中に包含されてゐる自然的・人間的力の二要素を結合して、そこに經濟的空間景を創出するものであるが、一方、國民經濟學は、經濟の體制に對して、社會的要求から規定さるゝ法則的原理及び制度を究むるものである。もし、我々が、經濟効果を評價の標準として採用するならば、經濟地理學は、その經濟效果の空間的統一、整理、その變化、その交替

關係などを示現するものであり、これに對して、國民經濟は、經濟効果を勞働者と生産とに於ける勞働の總和として、社會的位置及びその關聯から研究するものである。それは、シュリユーターの所謂「經濟の過程と生産物の構成分布の過程を研究する」<sup>(2)</sup>ものであり、また、財貨の價值とその變化、需要と供給、資本、企業……を取扱ふものである。

更にまた、經濟地理學と國民經濟學との他の本質的相違は、國民經濟學の法則が、アダム・スミスの信じた如く、確立規則 (Feste Normen) そのものではなくして、地理的考察によつて知る如く、文化的能力性に依存する民族の機能それ自體であると云ふ所に存在してゐる。従つて、國民經濟學が、世界經濟に關する一般的法則を、單に個々の民族或は國民の特別なる個性から作出しようとすることは、史的に建設された誤謬であるとみられてゐる。それは、須らく、地理的立脚點からの全民族の共通なる個性から創造すべきである。これからみれば、國民經濟學はリュットゲンスの所謂「人間の意志、人間の努力、人間の創造と經濟との結合して居るものであり、意識化と非意識化とを問はず、人間から作出されて經濟に必要なすべての力と體制とは、その原因と結果とを以て、國民經濟學の固有な研究領域を形成してゐる」<sup>(3)</sup>ものである。而かも、國民經濟學の法則が、上述の民族或は、國民の文化的能力に依倚する函數自體である

ところからみれば、國民經濟學は、機能を惹起せしむる動機としての自然的基礎の考察を、等閑に附するわけにはゆかない。こゝに、國民經濟學と地理學との包括的領域(第三章本質論参照)があり、こゝに、兩者の掩被接觸がある。即ち、經濟地理學は、地理學と經濟研究との間に於ける中間領域 (Zwischengebiet) である。故に、兩科學は、その對立的援助に於て、他の一方を決して缺さない。然し共同作業の困難は、一方に於ては、地理學的方法を、他方に於ては、經濟的概念を相互に、充分に解しないところにあるのである。また、第二の困難な原因はこゝにある。即ち、經濟地理學は、自然から出發してゐる、換言すれば、總體としての地球の經濟空間から出發し、國家的個性のごときは、單にかかる經濟空間の斷片として、その特殊性に於て表示するにすぎない。然るに、國民經濟は、これに對して「特別化」から「一般化」への逆過程をとつて、一國民の經濟から出發して、これを總てのもの標準として表象してゐる。従つて世界經濟の上位概念 (Oberbegriff) は、地理學者にとつては、全經濟空間に對する地球の個々地方の役割の學であり、一方、國民經濟學者にとつては、世界經濟は、國民經濟の總和を意味してゐるのである。この相違概念が兩者の共同作業を困難にしてゐるのである。

註 I E. Friedrich: a. a. O., S. 2.

註II O. Schlüter: a. a. O., S. 31.

註III R. Ittigens: Allgemeine Wirtschaftsgeographie. Breslau 1928, S. 2 f.

而して、既に、第三章に於て敘述したごとく、ヘットナーは、「地理經濟學」を經濟地理學と區別してゐる。「植物地理學と地理植物學(Geobotanik)」との間に、また、動物地理學と地理動物學との間に、各區別がある如く、固有な經濟地理學と地理經濟學との間には、同じく差別をしなければならぬ。勿論、地理經濟學には、地理的生產學と商品學とが包括されてゐることは、云ふまでもないが、この學は、經濟現象と生産物とを、興味の中心となし、その地理的分布を問題にしてゐるが、一方、經濟地理學は、地方と場所及び全地球の經濟的特長を對照とし、生産のみならず、土地性質の現象としての全經濟生活を問題にしてゐる」となし、以て兩科學を對立させてゐる。この分類の是非曲直は、別として、とにかく、經濟地理學と國民經濟學とは、最も密接な關聯のある親縁科學であることは明かである。

かくの如く、經濟地理學は、國民經濟學と強い接觸にあるが、また、素材的接觸は、他の經濟科學に對しても持つてゐる。然し、他の經濟科學は、經濟地理學とは、摩擦面をもつて居らず、常に經濟地理學に必要な補助科學として役立つてゐるのである。而して、經濟地理學の領

經濟地理學の領域科學 (Grenzwissenschaften)

國民經濟學 National- ökonomie	統計學 Statistik	世界貿易論 Welt- handels- lehre	商品學 Waren- kunde	經濟史 Wirt- schafts- Gesch.	社會學 Sozio- logie	人種經濟學 ethnolo- gi che Wirtscha- ftsk.	農業地理學 Agrange- ographie
--------------------------------	------------------	-------------------------------------	------------------------	------------------------------------	------------------------	---	-------------------------------

第七章 領域論

域科學としての主なるものは次のごときである。國民經濟學、統計學、世界貿易論、商品學、經濟史、社會學、人種經濟學、農業地理學などである。

國民經濟學は、經濟と人間の意志とを結合するもの、換言すれば、經濟と、經濟的に働く人間の收得に向けられた努力及び創造とを結合するものである。曰はば、労働組織と經濟とを取扱ふものである。然し、國民經濟學の基礎となつてゐる經濟上の信條は、人間が、自己の生活要求に對して、最小の犠牲を拂つて、最大の満足を、常に、到るところ、自然に向つて得ようとするところにある。(尙、經濟地理學との區別に關しては、ドーヴェの<sup>(二)</sup>研究があり、又兩科學の方法論の具體的例としてリユットゲンスは、ハイチ島について述べてゐる。)

統計學は、その本質に従つて、數と現經濟人とを取扱ひ、經濟地理學に對して、經濟現象の空間的把握に必要な素材を

常に提供してゐる。これが、經濟地理學と密接な關係にあることは、シュレツァ (Schlözer) によつても明かである。彼は、統計學を靜的歴史として表示し、また歴史を動的統計學として表示し、統計學から、特に經濟地理學——即ちフンボルトやリッターによつて、素材の自然的制限、精製場所、居住可能地域などを究むるところの經濟地理學が發達したのであるとなしてゐる。<sup>(四)</sup> また、ツァーン (Zahn) は、「經濟地理學と經濟統計とは、地理學と統計學と同じく、本源的に、科學的單位を形成してゐる」と述べて、獨立の科學性を認めてゐる。また、サッバーは、「統計學は、經濟地理學と國民經濟學とに對して、國家生活と個人經濟活動との領域から確立性の數を提供してゐる。これによつて、經濟地理學者は、數字を空間の關係に於て取扱ひ、國民經濟學者は、勞働體制に對して取扱ふ。かくして、數は、充足せる空間との關係に於て、經濟地理的勞働の成果を、質の領域から、量の領域へ持ち込み、且つ、かくすることによつて始めて、多様性の地球空間の經濟的能率のするとき比較を、相互に許すのである」<sup>(五)</sup> となして、數と經濟地理學との關係を明かにしてゐる。こゝに於て、フリードリッヒ<sup>(七)</sup>が、經濟地理學に對する補助科學として、經濟科學のうち<sup>(六)</sup>に於て、特に國民經濟學と統計學とを指示した所以も上述のことから肯定されるのである。

註一 A. Hethner: a. a. O., 149.

註二 K. Dore: Unterschied zwischen der Wirtschaftsgeographie und der Nationalökonomie. Methodische Einführung in die allgemeine Wirtschaftsgeographie. Jena 1914. S. 1 ff.

註三 西北ハイチ (N-W-Haiti) のテラヌーヅ (Terreneuve) に銅鑛と鐵鑛とが發見されたので、これが、探掘開發にあつて、經濟地理學と國民地理學とが如何に各々の任務を遂行すべきであるかと云ふことを詳細に記述してゐる。

R. Littgens: a. a. O., S. 2 f.

註四 H. Sieveking: Grundzüge der Wirtschaftslehre. Leipzig 1925, S. 20.

註五 F. Zahn: Die raumwirtschaftliche Verflechtung der deutschen Volkswirtschaft. Erde und Wirtschaft, H. 1, 1927, S. 3.

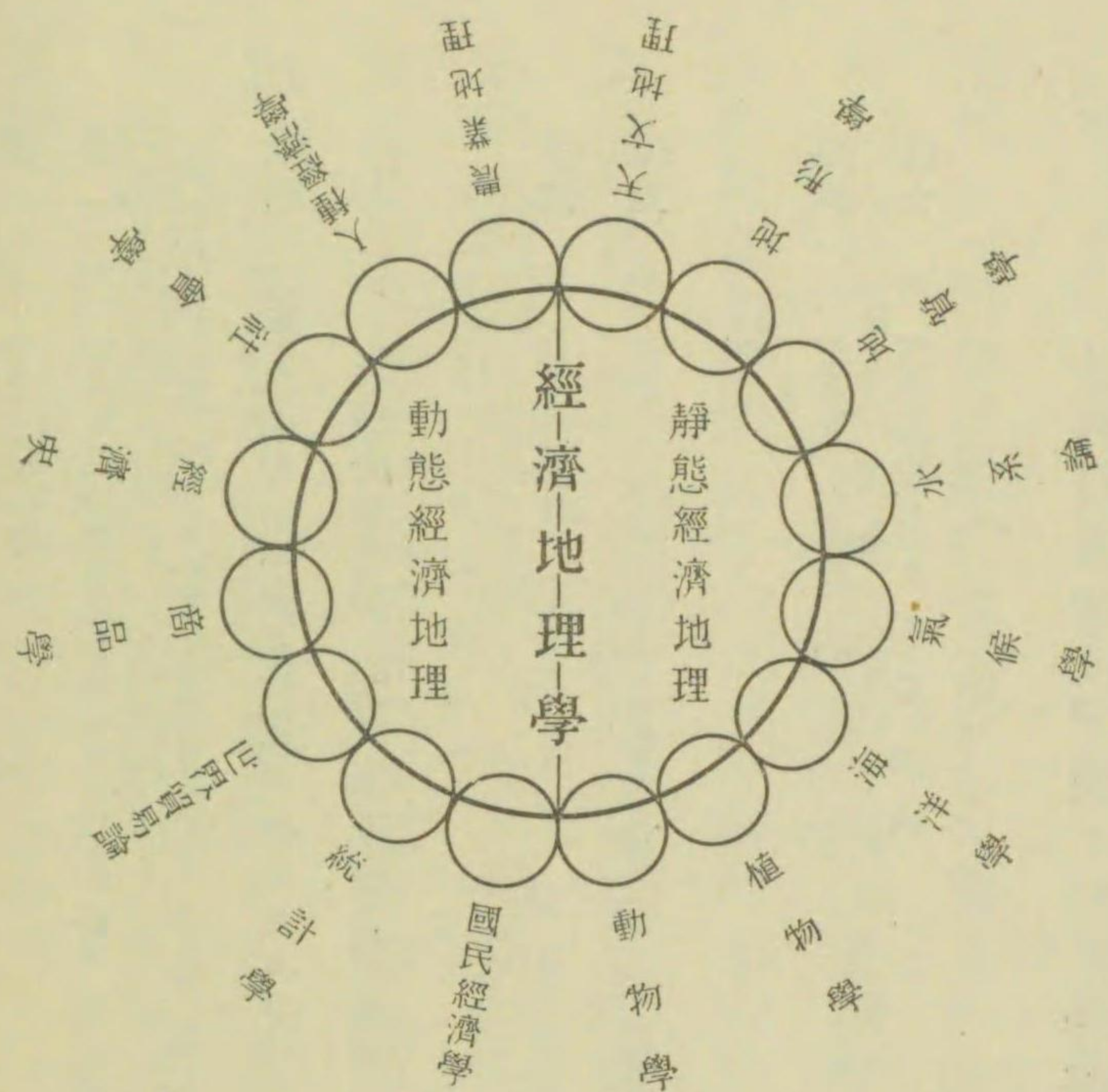
註六 K. Sapper: a. a. O., S. 1—3.

註七 E. Friedrich: a. a. O., S. 2.

而して、世界貿易論は、個々の經濟地域及び地方の輸出入に關し、又、商品交換の考察に於て、經濟地理學に材料を提供するものである。また商品學は、商品の個性を究むるもので、物理化學的性質、製造工程、利用に關するものであるが、經濟地理的生產學は、商品の分布と消費とを空間的に把握すること、即ち、サッバーの所謂「場所性との關係に於ける商品の發生存在を究むる」<sup>(一)</sup>ものである。而して經濟地理學の歴史的發展の時代に於ては、經濟地理學は屢

商品學的方法論の軌道上を走つたのである。然し、現在では、兩科學は判然と分割されて、斯學は、商品學を補助科學として利用してゐる。

最後に、農業地理學は、自然的要素の基礎に於て、土地生産物の能率を問題としてゐる。従つて、それは強く地理的土地に依存してゐるが、然し、自然地理學的原因調査の一方的側面をのみ考量してゐる傾向がある。農業地理學の目的は、經營經濟的であるがために、地理學を補助科學としつゝ、寧ろ、農業經營學として理解されてゐる。而して、一方、ベンクによれば、經濟地理學に對してはその中央に於て、永久に飢える人間に對する食料供給の限界的可能性が立つてゐる。故に、農業地理學が、經濟地理學の本質的核心であつて、經濟地理學は大規模に地球上の合理的經濟化を論究すべき任務があるだらう。幸に、經濟地理學は、益々土地栽培地帯の



第 2 圖

評價を始め、最早、單に、取引生産の統計的表を義解してゐない」と云つて、農業地理學と經濟地理學との強い接觸度を證明してゐる。

以上、すべての經濟科學は、經濟地理學と接觸して居り、地理學の區劃内に於て、經濟地理學に對し、外圍的地位 (periphere Stellung) を與へてゐる。即ち、その理論に於ても、亦一部素材的掩蔽に關しても、經濟地理學ほど、敘述の經濟科學と密接な關聯を示現してゐるものは、他の個々の地理學部門には見られないのである。

註一 K. Sapper: a. a. O., S. 2.

註二 佐々木清治 農業地理研究法 前掲

註三 H. Bernhard: Die Agrargeographie als wissenschaftliche Disziplin. Pet. Mitt. 61 Jahrg. 1915, S. 12-18, S. 99-103, S. 179-183, S. 212-214.

註四 A. Panck: Das Hauptproblem der physischen Anthropogeographie. Ztschr. f. Geopolitik. H. 5, 1925, S. 342.

## 第二編 環境論（一般經濟地理學）

### 第一章 地表面と現經濟人

地球表面の形態と現經濟人との關係を論ずるに當つて、先づ、第一に必要な概念は、現經濟人の居住する空間が、決して、單一的創造物でないことである。即ち、大陸と海洋とは、不平等に分割され、而かも、海洋の占むる面積が大きく、地球の表面を海洋化ならしめてゐるといふことである。かく、海洋化の世界なるにも拘はらず、實際の經濟は、主として地球上の土地と結合してゐる。勿論、最近に於て、海洋を生産空間とする海洋經濟 (Seewirtschaft) が、地球上の各地に優秀なる力を以て擡頭して來たことは云ふまでもないのである。が、とにかく、「乾燥空間」と「濕潤空間」との排列は地球上極めて不平等で、その對立的な限界と形態とは、地球發達史の最終生産物で、現在の境界は、曰はゞ地球發達の運命的生産物である。即ち、大陸の分割は、現經濟人には所與のもので、その不平等なる分割とその分割の方法とが、現經濟人の經濟現象に宿命的成果を與へてゐるのである。而して、こゝに於ては、大さ、肢節、位置、

平野などと現經濟人との關係について述べることにする。

地球發達の過程から、軀幹(Rumpf)、大陸、半島、島などの形成事實は、現經濟人に對して、大小、廣狹、何れかの封鎖空間(Geschlossene Räume)と肢節空間(gegliederte Räume)とを生せしめたのである。即ち、前者は、封鎖經濟空間を、後者は、肢節經濟空間を作出せしめたのである。而して、一般に、空間は、これが大きくなればなる程、經濟の可能性は、大規模に展開さるゝもので、狹隘なる空間は、常に、集約經濟(Intensive Wirtschaft)への過程を示して居り、これに對して、一方、廣大な空間は、粗放經濟(extensive Wirtschaft)の根柢を持つてゐる。のみならず、廣大な空間は同時に現經濟人の自由移住權の地球空間となつてゐる。

かくのごとく、空間が、分量的に、多様性に分割されてゐるところに、經濟現象の運命的本源が存在してゐる。然し、この本質的に附與せられた空間は、人口増加によつて、その重要性を變化せしむることは云ふまでもなく、今日、ラブラタ地方は廣大な地表を占めてゐるにも拘はらず、人口稀疎のために、粗放經濟が、點狀的に演ぜられてゐる。然るに、印度のヒンドスタンに於ては、ガンジスの平野に人口が溢れ、到るところに集約經濟が展開されてゐる。こゝに於て、空間の大きさの概念は、人口狀態の考察によつて、絶體的領域から比較的領域へと移

動する性質のものである。即ち、大地積でも、大人口を充滿すれば、所謂、人口飽和點に到達すれば、そこに、經濟的に狹隘化された土地が展開されることになる。人口増加に對して、本來的に廣大な北歐羅巴の大低地は、現在、經濟的には狹小な土地となつてゐる。然し、それでも尙、かかる空間に、今日僅少な人口を支持してゐる地表が存在して居り、また、粗放經濟を行つてゐる島が包含されてゐるのである。とにかく、我々は、こゝに於ては、空間の大きさもつ重要性は、人口の考察に依倚することを知るのである。

更に經濟表面の大きさに次いで、重大なるものは、個々の經濟表面の肢節である。封鎖空間と肢節空間とは、經濟化の可能性と勞働の問題とが、經濟表面群の土地に依存してゐる限りに於て、經濟的に對立してゐるものであつて、前者の封鎖經濟空間(Geschlossene Wirtschaftsraum)が、後者の離散的に強い肢節を示してゐる經濟空間よりは、常に容易な勞働を要求してゐることは明白である。然し、その際に於ける發展は、生産の種類方法によつてゐるのみならず、生産負擔の可能性にも依存してゐることは勿論である。而して敘述の經濟空間が、その封鎖性を消失すればする程、空間克服に對する問題が重要になつてくる。茲に於て、經濟問題は、交通問題——即ち、交通収益性(Verkehrrentabilität)に對する問題の解決と共に決定されることに



なる。即ち、チレー、伊太利、日本、スカンジナヴィアなどは、長條經濟空間 (Langgestreckte Wirtschaftsräume) の好例で、かかる國家に於ては、空間克服が、經濟的収益性を決定する。特に、茶、魚類、蔬菜、その他變質的生産物の輸送に於ては、狹小で長い空間の克服が、交通収益性の問題と常に結合してゐる。ひとり、空間克服は經濟問題に關するばかりでなく、「空間距離の長延は、移民運動に對する決定的一要因ともなつてゐる」。また、日本や伊太利と同じ意味の空間は、河川が示現する長い狹小谿谷帯に展開せられてゐる。即ち、沙漠に包圍された理想的長條經濟空間としてのナイル河の谿谷は、この好例で、地球上のこれに類似する多くの空間は、何れも前者の長條空間よりは、狹小であるが、その總和に於ては、齊しく、地球上の全經濟空間の本質的割前をもつて、世界經濟に影響を與へてゐる。また、シヨイは、空間が貨物販賣に及ぼす影響を理論と實際とから解き、經濟的法則として、生産領域の貨物販賣は、距離の三乗に逆比例して減少するものであることを主張してゐる。

註一 「大體に於て、空間的距離が、移民運動に對する決定的一要素をなしてゐる。それは樺太、朝鮮、臺灣に於ける内地人の本籍地、又は出生地の分布を検すれば判然する。朝鮮、關東州、臺灣には、距離の關係から、九州、中國、四國からの入移民が、とくに多く、樺太に於ては、北海道、東北、北陸からの入移民が多い。又、植民地内に於ける内地

人の分布を調査しても、この事實は明かで、比較的内地に近く、交通便利な地域に最も密度が大きい」。空間克服は、その大きさ、その距離に反比例して、人事現象に作用するものである。

武見芳二 我が植民地に於ける内地人入移民 地理學評論 昭和四年二月 二三—三四頁

註二 「ナイル流域は、自然の障壁によつて世界から隔離された肥沃な細長い「島」で、氣候風土の自然的保護を受けて、文明の「搖籃」地となつたのである。然し、交通が発達して、外部の世界が開られてからは、ナイルの空間を包含する自然的障壁たる沙漠は、不利益な地理的要因となつてゐる」。かくして埃及は、南北の長さ殆ど千キロ米に亘る細長き經濟空間を、如何に克服すべきかに留意してゐる。

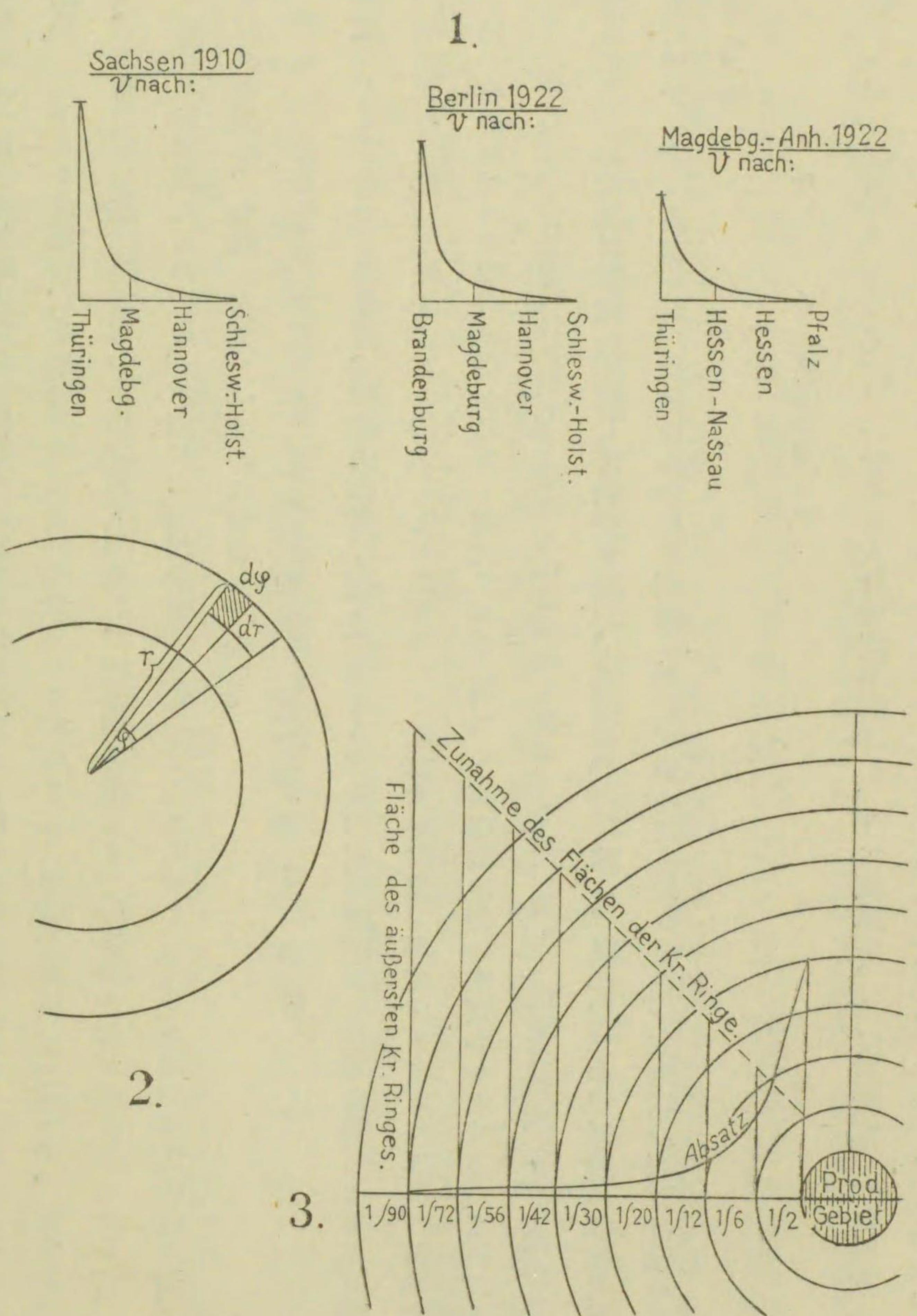
J. F. Horabin: Grundriss der Wirtschaftsgeographie. Berlin 1926, S. 23.

註三 シヨイの所謂、經濟的法則(?)を抄譯する。貨物運輸統計から得た曲線によれば、貨物の總販賣は、距離の増加するに従つて減少すると云ふことが出来る。この減少を計算で測定することにする。其のために圓形の生産地域と同一中心を有する環狀地帯があると假定する(2圖)。この環狀地帯の販賣を「とする。これは人口密度と共に増加するものであり、人口密度に比例して居るものと假定し得る。これに對して販賣は距離と共に減少するものである。然し、同時に、この減少が距離に比例して減少するか、或は距離の自乗に、更に、三乗、四乗に比例して減少するかは分明的でない。かく考へるならば、生産中心からの距離に對して極めて小なる或る一定地域の販賣は次のごとく方程式で現はし得る。即ち、

$$k \frac{b}{r^a} \times (\text{地域の廣さ})$$

但し、 $k$ は既知で、 $r$ では、一定せる人口密度を表はし、 $b$ は距離を、 $a$ は指數を、 $n$ は任意の常数を表はす。

それ故に、環狀地帯の無限に小なる矩形を總計して、局部販賣を計算し得る。若し、無限に小さいこの矩形の境とな



る二半徑間の中心角を $\alpha$ で示せば、其弧は $\alpha r$ であり、無限に小さい他の邊は $dr$ である。それ故に、局部販賣は前者の方程式から次のことくなる。

$$dJ = k \frac{b}{r^{\alpha-1}} dr d\alpha$$

$$J = kb \int_0^{\alpha} \int_0^{2r} \frac{1}{r^{\alpha-1}} dr d\alpha$$

即ち、 $\alpha$ より $\alpha$ まで、及び $0$ より $2r$ までの總計、即ち積分によつて環狀地帯全部の販賣を算出し得る（ $b$ は生産領域の半徑、 $\alpha$ は中心圓の半徑）。この方程式を解いて（中略）次の結果が得らる。

$$J = A \left( 1 - \frac{c^{\alpha-2}}{a^{\alpha-2}} \right)$$

即ち、環狀地帯内の販賣を總販賣 $A$ の一部分として示し得る。今、ここでは、生産領域の半徑たる $a$ 及び環狀地帯の外側半徑たる $c$ は、 $A$ と同様に既知であり、指數 $\alpha$ が知られるならば、 $J$ は直ちに算出し得る。然し、逆に環狀地帯内の販賣 $J$ が決せらるるならば、最後の方程式は未知數 $\alpha$ のみ残り、従つて指數 $\alpha$ は容易に決定し得る。この指數を得るために、シヨイは二、三の假定條件（運輸區域が單純な地形なること、運輸機關が集中して中心から總ての方面に通じてあること、關稅障壁も海洋もその進路を妨害せぬことなどの必要條件）のもとに於て、運輸區域マゲデブルグ・アンハルトの周りに、該當の同心圓を畫き、その貨物販賣の總計を、出來得る限り正確に見積り、その數値を上の方程式に代入して次の結果を得てゐる。

$$2\alpha = 8 \quad \therefore \alpha = 3$$

即ち、求めんとする指數は、 $3$ である。故に、生産領域の貨物販賣は距離の三乗に逆比例して減少すると云ひ得る。然しこの法則は、シヨイの云つてゐることく、差當り、獨逸に於てのみ妥當するもので、他の各國に對しては、貨物運輸統計の助力によつて、指數は新に決定されねばならぬ。尙、部分的にも大に異なる鐵道密度を有する國に於て、その價

が多少違ふ事は當然である。然し、何れにしても叙述の計算に示された如く、指數は常に心より大でなければならぬ。即ち貨物販賣は、距離の自乗よりも尙、強く減じなければならぬ。他の土地で適當な指數は、心を中心として動き、或地では僅かに少しく、他地では、亦幾分か大きいと云ふ事は充分豫想し得ることである。

E. Schen: Der Einfluss des Raumes auf die Güterverteilung. Ein wirtschaftsgeographisches Gesetz I Mitt. d. Vereins d. Geogr. a. d. Universität Leipzig, VII, 1927, S. 31—33.

更に、經濟空間に對して重要な要素となるものは、位置である。位置は、これを氣候帶に對する位置と海洋に對する位置とに分つことが出来る。

一般に、寒帯や熱帯の極端に乾燥する氣候帶の位置には、顯著な經濟空間は、存在せず、從つて住民の居住も、國家の形成も稀れである。又、純粹な熱帯の位置に於ても、その原始林や沙漠は、文化への反抗者であり、國家形成への破壊者である。然し、熱帯の位置に於ても、經濟空間が、特異な國家形成を許したところがないでもない。即ち、十六世紀の時代に於けるペルーのインカ帝國 (Inca-Reich) とメキシコのアツテック帝國 (Aztek-Reich) とは、この例で、今日、かかる空間を熱帯地方に求むれば、エクアドール、ペルー、アビシニアの國々を指摘することが出来る。これらの國家形成は、何れも、熱帯氣候から離れた高距の溫帶的氣候が、許した經濟空間の成果であつて、これらの特殊經濟空間は、沙漠、荒地の沃地 (Oase) と共に、

とくに、經濟的卓越空間 (wirtschaftliche Vorzugsräume) を形成してゐる。熱帯に於ては、かくのごとく、經濟空間は國家形成には餘り關與しないが、生産物、特に植民地生産物、鑛産物をはじめとして世界經濟を構成してゐるあらゆる生産物が出されてゐるが故に、この地帯の空間は經濟價値にとんだ空間である。これに對して、季節風の濕潤亞熱帯と溫帯との位置に於ける經濟空間は、正に、機能行使、能率發揮の頂上にあるもので、多くの様々な國家形成と富源の生産とを以て、他の一切の空間の尖端に立つてゐるのである。更に、海岸の位置に對する空間は、これを三群に分ける。

- 一、諸島經濟空間——Inselwirtschaftsräume
- 二、内陸經濟空間——Binnenlandwirtschaftsräume
- 三、周縁經濟空間——Randwirtschaftsräume

諸島經濟空間は、その名前の示すごとく、諸島に分布するもので、もし、これが一つの國家形成を許すならば、その經濟空間は、政治的空間と一致するもので、經濟空間の發達の最終形態を示すものである。かかる例は、今日、僅少で、從前の日本と現在の英國とが、あるにすぎぬ。かかる空間の特徴は、空間の克服が困難で統制を得る點に於て不利が多い。この例は、多

くの島を伴ふ半島國に占住するデンマークの經濟空間に於てみることが出来る。これに對して、内陸空間は、云ふまでもなく、大陸内に封鎖された絶海性のもので、歐羅巴のボヘミア、チェーリングゲン、シレジア低地などの地方或はスイス、墺地利、洪牙利、チェコ・スロヴァキアなどの國家に於て見ることが出来る。而して、敘述の空間の中間形式として、第二の周縁空間が、大陸の周縁に存在してゐる。この空間は、その占居する土地の境界と、海洋の境界との長さの大小によつて、或は大陸的となり、或は海洋的となる。周縁經濟空間としての希臘及び諾威は海洋性のものであり、獨逸及びルーマニアは大陸性のものである。この海洋性か、大陸性かの問題は、該當空間に重大な生命を附與するもので、諾威の國家的存立は海洋性の點に辜負してゐるところが大である。また獨逸が、今日、僅かに北海の海岸線を有してゐるがため、即ち、大西洋に臨んでゐるがために、獨逸の經濟空間は、その他の東歐羅巴諸國の空間よりは、より活氣のある生命力から充滿されてゐる。また、中央歐羅巴の眞中心に蟠居してゐる獨逸の周縁空間が、該國に如何に鐵道網を發達せしめ、如何に多くの收益をあげしめてゐるか。また、和蘭及び白耳義の占めてゐる空間が、如何に交通上重要であるか。これ皆、地理的位置の現經濟人に運命づける所産であるとする事が出来る。

敘述の經濟空間と位置との關係は、交通機關の發達<sup>(四)</sup>によつて多大な影響を蒙ることは、ここに喋々を要しないところである。

註一 アイマラ族 (Aimara) との雜種のクルチュア族 (Kitchwa) が、インカ帝國の建設者で、十四、十五世紀に於て中部チレーよりキトーに至るまで分布し、專制政治、共產主義的制度を採用して、當時に於ては、高級な文化を支持してゐたものである。佐藤弘 政治經濟地理學 前掲 一六一—一七頁。

R. Reinhard: Weltwirtschaftliche u. politische Erdkunde. Breslau 1925, S. 165.

H. G. Wells: The Outline of History. London 1923, p. 326.

註二 R. Reinhard: a. a. O., S. 166.

註三 獨逸が中歐の中心地域を占領してゐることは、鐵道網の發達を促し、多大の收得をあげしめてゐる。巴里の平和會議に於て聯合國側は、とくに佛國は、獨逸を迂回する國際列車の計畫をたて、以て獨逸をその鐵道の利益から排除しようとしたが、それは、獨逸の占むる位置のために失敗に歸した。二五、六の國際列車のうち、その半数は、獨逸を通過してゐるのであつて、國際急行列車の貫通と隣國の鐵道線との關係に於て、獨逸は權力的鍵を把握してゐる。現に、毎年聯合國側に支拂ふ十數億の賠償金は、大部分、この鐵道の收入から得られてゐるのである。獨逸ほど恵まれた國家的位置を占めてゐる國は他に多くはないのである。

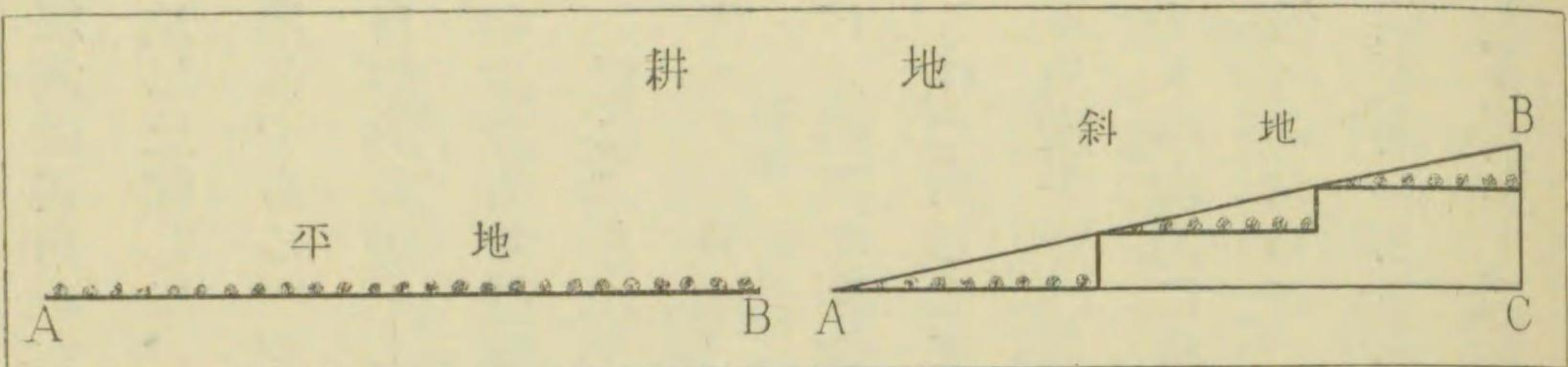
註四 交通機關の發達が、經濟空間に變化を與へた顯著なものは印度であつて、スエズ運河の開通は、印度を交通上の幹線に引き入れ、一躍以て、印度の產業界を發達せしめ、從來まで僅少であつた小麥栽培は、この時以來、發展また高調して世界有数の小麥産地となつたのである。また、交通の發達と物資輸送法の改善とは、南米の經濟空間をハック耕

より農耕、大牧畜、栽植耕へと變化せしめたのである。

更に、地表面が現經濟人に重要な役目を演出せしむるものは、平野 (Ebene) である。即ち、平野の本質的にもつてゐる機能それ自體である。平野と非平野との對立關係は、封鎖空間と肢節空間との對立に類似するもので、この關係は、土地の利用價值に重大な影響を與へるものである。廣く、土地に關しては、

- 一、負擔力——Tragfähigkeit
- 二、栽培力——Anbauhäufigkeit
- 三、養殖力——Nahrungsfähigkeit

を以て考察することが出来る。そして、平野は、この三能力を發揮するに充分な地形を現經濟人に附與してゐるので、平野が斜地に比して、多くの生産力を有し、多くの住民を支持して、その負擔力の大きなることは言を俟たぬ。それは、平野が面積、傾斜、自然的條件に關して常に有利であるからである。第四圖に於て角  $BAO$  が、大なれば大なる程、土地の負擔力は減少するので、とくに、この角度は山間地域の經濟に影響を與へるものである。この角度は、交通に關し、通常許された運搬限度5%以上なるときは、その發達を阻害する。それ故にこの角度は、



第4圖 平地と斜地

これを經濟的斜角 (wirtschaftliche Böschungswinkel) と稱してゐる。西水氏によれば、「角度が二〇度以上なるときは、その傾斜地は、林學的にみて林地としてのみ成立し、それ以下の傾斜地では、農耕、牧畜を行ふことが出来る。前者を絶対林地と云ひ、後者を關係林地と云ふが、他の自然地理的條件とその土地經濟段階とが許すならば、二〇度以下の關係林地の範圍迄は、農耕地の開發がなされてもいゝのである。静岡地方では三〇度位の傾斜地に茶園の發達がみられてゐる」と。恒藤博士によれば「傾斜度一五度迄を平地の内に計算し、これを可耕區域と認めてゐる。然し、所によつては三〇度位までは耕地として利用し得るところも尠くないが、牛馬を耕耘に使用するには、先づ一〇度の傾斜地を以て限度とするやうである」<sup>(一)</sup>。また、地理的條件が許した特異な空間は、ジャバで、田中館氏によれば、「ジャバは、雨よりも、人工灌漑によつて耕作が行はれ、かかる田は、一、二〇〇米の高度の山地にも存在する。即ち、ジャバ人は四五度の勾配地方をも、米の耕作のために段丘となすことが出来る」<sup>(二)</sup>とある如く、實際ジャバでは、

經濟的斜角の大なる土地に、集約經濟が展開されてゐる。これは、例外であるが、とにかく、斜地に比較して、平野が、靜的及び動的狀態に於て現經濟人に有利な能力を提供してゐることは明白である。交通運搬、耕作栽培、その他の諸施設に關して、平野は、平等な勞働力を要求し、自然的基礎——太陽の光線、降雨量、流水などに對して均一的割前を要求し、これらが、土地の生産力を豊富にして現經濟人に活動力を惹起する動機を與へてゐる。

更に、また、平野は、平野自體の占めてゐる位置が、重要なもので、ミシシッピー低地平野、ラブラタ平野、印度の河川平野、ポー及びナイルのデルタ平野などは、何れも經濟的意味に於ける特異な開放位置を占めてゐる。即ち、世界交通或は經濟の主要幹線に向つて開けてゐる。

これに對して支那の漢口平野、洪牙利平野は、河川を媒介として、大陸の周縁と結合されてゐる内陸平野 (Binnenebene) で、經濟的には、多大の抑壓を保障してゐる。又、亞細亞及びアメリカの山間に横たはる「山間平野」は、經濟中心からの遠隔性と封鎖性とのために、又、「隔海性」<sup>(四)</sup>のために、一層、強烈な抑壓を個性化してゐる。かくのごとき抑壓は、これを、經濟的除外要素 (wirtschaftlicher Entbehnungsfaktor) と稱するもので、この要素は、經濟的抑壓 (wirtschaftliche Hemmungen) の形態で、地球上のあらゆる平野に、いづれかの形で強く根ざしてゐる。

特に、經濟表面としての平野が、世界の大經濟空間から遠隔な地方に展開されてゐるならば、該平野に對する經濟的抑壓は、益々強大となる。ダニューブの平野、ヴォルガの平野、經濟的意味に於て極端に外邊に横たはるシベリアの河川平野などは、何れも經濟的除外要素を、重く負擔せしめられてゐるのである。

註一 西水孜郎 經濟生活の發達 地理學評論 昭和五年七月 三二八—三二九頁

註二 富田芳郎 經濟地理學原論 昭和四年 三九頁

註三 田中館秀三 シヤバの經濟地理 地理教育 昭和四年六月 一七頁

註四 長野縣の松本平は、山間平野の適例で、經濟的除外要素を多分にもつてゐる。田中氏は、隔海性に伴ふ現象として長野縣の經濟空間が、特異な産業を營んでゐることをあげてゐる。即ち、養鯉の隆盛をその一例としてゐる。佐久平の櫻井村、野澤町に於ける佐久鯉の飼養、伊那谷の養鯉、善光寺平の松代扇狀地上の養鯉、上州鯉の隆盛などを以て隔海性に伴ふ一現象としてゐる。

田中啓爾 中央日本に於ける高地の人文地誌學的研究概報 地理學評論 昭和五年八月 八三頁

## 第二章 土壤と現經濟人

地球上に於ける土壤の種類とその分布とは、現經濟人に對して多面的な經濟空間を生せしめ氣候、土地形態と相俟つて、特異な經濟効果を展開せしめてゐる。本壤の本質に働き掛ける現經濟人との交替作用を見る前に、先づ、土壤の種類に付いて述べる。

土壤の種類は、理學的成分に基いて、砂土、埴土、壤土、礫土に分ち、また別に、石灰質土、灰土、腐植土などの名稱の下に區別されてゐる<sup>(1)</sup>。然し、生成の上からは、風化土 (Verwitterungsböden) と、堆積土 (Aufschüttungsböden) とに分けられる。

風化土は云ふまでもなく、あらゆる風化力の結合作用によつて生じたもので、これを氣候的觀點から次のごとく分類してゐる。

### 一、寒帯、温帯地域の土壤

- (一) 漂土——Bleichböden
  - (二) 褐土——Braunböden
- 二、濕潤熱帯地域の土壤

- (一) 紅土——Laterit
  - (二) 熱帯黒土——tropische Schwarzerdeböden
- ### 三、熱帯乾燥地域の土壤
- (一) 黒土——Schwarzerdeböden
  - (二) 鹽ステップ土——Salzsteppenböden
  - (三) 沙漠土——Wüstenböden

漂土は、粘土と共に酸性の埴土分解が有色の鐵を分離するので、夏の比較的寒冷な、冬の長い地方に分布してゐるもので、その代表は、北ロシアにみられてゐる。これに對して、中央歐羅巴の典型的土壤である褐土は、鐵の結合によつて色づけられた粘土 (Tonerdeboden) であつて、多少、強く埴土を挿入されてゐる。然し、より強烈な太陽の作用下にあるときは、酸性の埴土素材は包含されてゐない。而して、濕潤熱帯地方に於て、植物の著しき繁茂に於ては、その腐敗が速かで、完全であるために、埴土の形成は、一般に僅少である。強い赤色から煉瓦色、或は含水の鐵結合に於て黄色を呈する粘土が、非常に多い。赤土 (Roterde) として水酸化鐵を除去した粘土は、所謂、紅土 (Laterite)<sup>(2)</sup> で、あらゆる岩石からつくられ、廣く熱帯地域に分布してゐる。これと共に、熱帯には黒土が分布してゐる。その黒土の成因は、廣大地域が沼澤化

する様な強烈な雨期に於ける埴土の大堆積によるのであると云はれてゐる。更に、乾燥地域の土壤は、鹽、石灰、硫酸石灰の蒐集によつて表示されてゐる。

敘述の風化土に對して、更に重要なものは、堆積土であつて、これが成因には、種々な力―

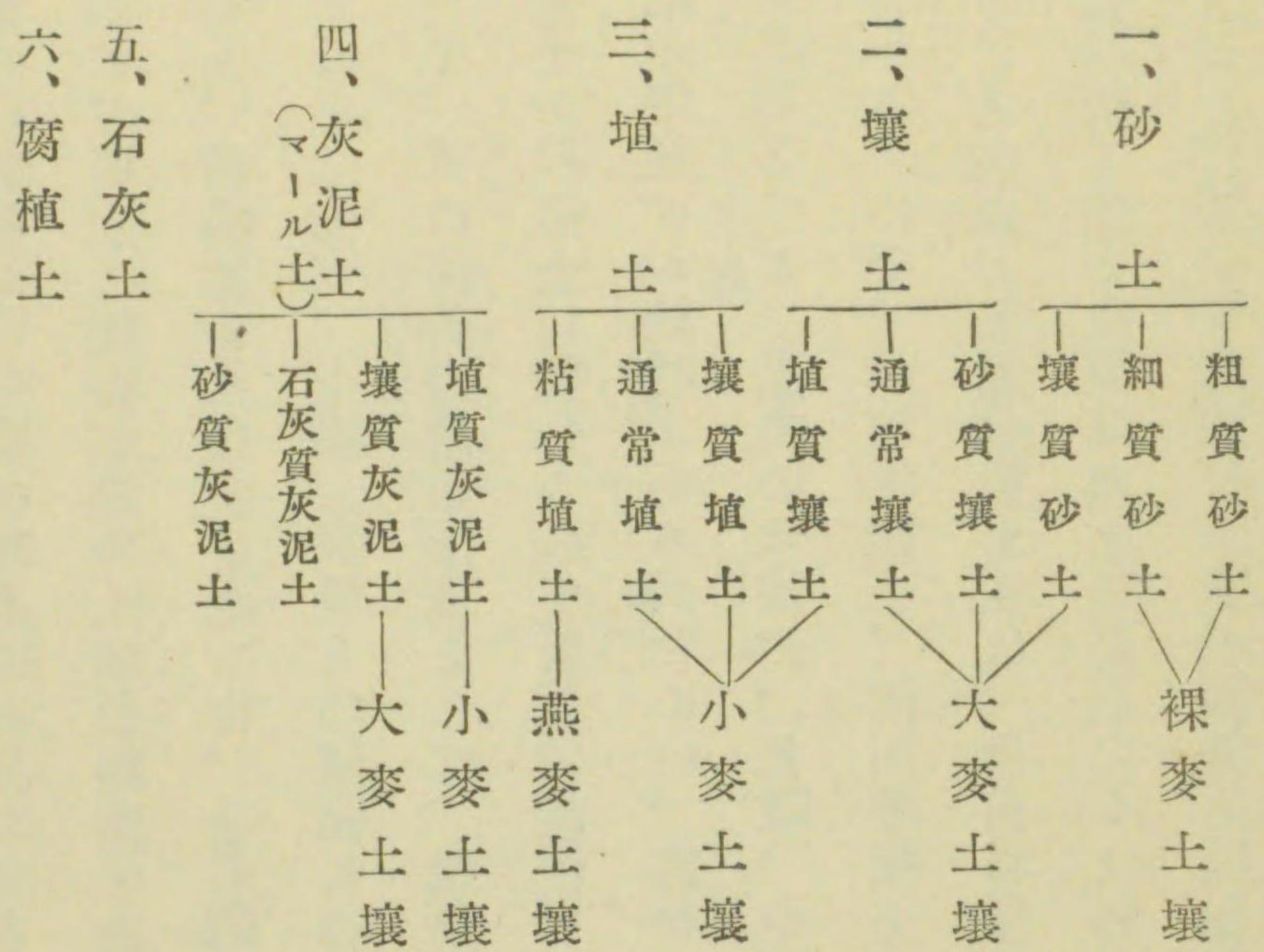
- 一、河川堆積土
  - (一) 礫土と砂土
  - (二) 河川沼澤土
- 二、海洋堆積土
- 三、風堆積土
  - (一) 飛砂土
  - (二) 細質土
  - (三) 黄土
- 四、氷河碎屑土
  - (一) 底堆石土
  - (二) 終堆石土
- 五、火山堆積土
  - (一) 熔岩土と凝灰岩土
  - (二) 灰土
- 六、有機物堆積土
  - (一) 灰泥土
  - (二) 珊瑚石灰土

註一 横井時敬 比較農業 大正十五年 二五頁

註二 R. Lütgens: a. a. O., S. 99.

註三 H. Strenne: Grundzüge der praktischen Bodenkunde. Berlin, 1926, S. 144—148.

更に埴地利の農業經濟學者クラフト (Krafft) は、次の如く土壤を分類してゐる。



以上のごとく、種々な分類が行はれてゐるが、要するに土壤の分類は、今日、未だ完璧を得

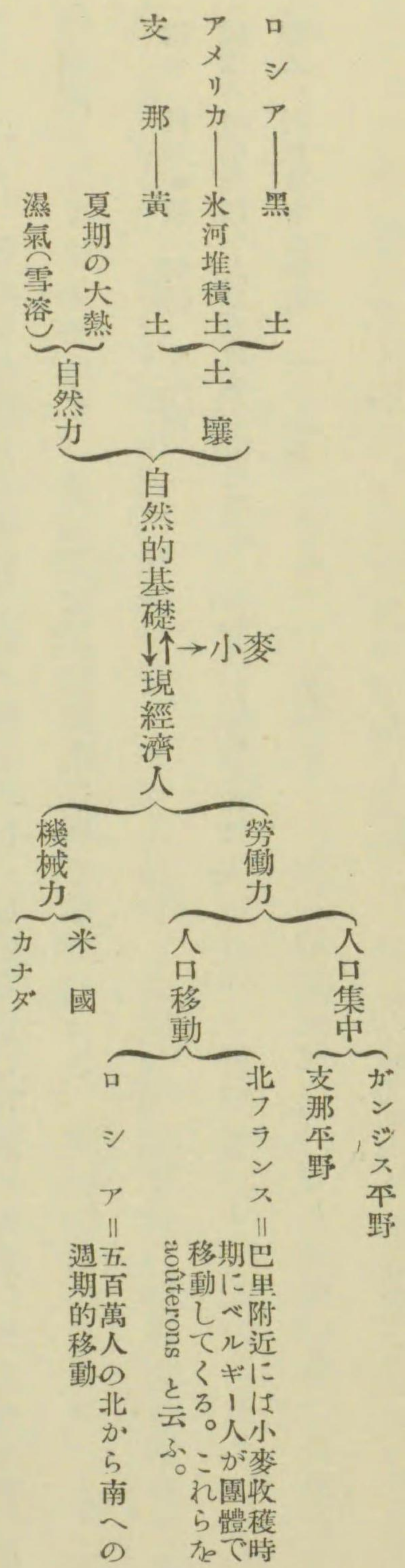


てあるものはない様で、その成因構造、成分、組織、理化學的性質、生産力、經濟的標徴などの種々の方面から分類をなすことが出来るのである。

然し、廣く、經濟空間の土地を觀察するとき、植物栽培の支持者としては、土壤は、農業的であり、建築材の支持者としては、その個性に於て、工藝的であると見ることが出来る。

そこで、先づ、土壤と農業との關係について見るに、黄土と黒土とは、一般に穀類の栽培地として、或は園耕農耕の土地として、現經濟人に役立つてゐる。世界に於ける穀倉は、悉くこの黄土か、黒土に結合されて居り、就中、小麥の栽培を多夥ならしめてゐる。元來、小麥は、土壤を消耗する植物であるがために、蒔かれる土地は、特に、露西亞の黒土地帯のごとく、豊饒を必要とする。過去の氷河が、北歐、中歐、北米の北部に分布せしめた堆積土が、最も適當してゐるもので、氷河堆積土、河川堆積土、黄土、黒土はとくに顯著なものである。即ち、中歐、アメリカ、支那の黄土或は、氷河堆積土からは、多量の小麥を生産してゐる。又、小麥の生産には、多くの勞働力を必要とするため、ガンジス平原の如く、人口集中と集約經濟とを展開せしめ、又、規則的な人間の移動を引き起してゐる。北フランス、南ロシア、中部合衆國、アルゼンチンはこれである。尙、勞働力の不足なところでは、人力に代ふるに高價な機械――

刈禾機を以て、小麥を刈るばかりでなく、穀粒を扱き落し、袋填までやつてゐる。要するに黒土、黄土、氷河堆積土、即ち埴質壤土、壤質埴土、通常埴土は、所謂、小麥土壤で、現經濟人に食料の本源を與へてゐると同時に、人口の集中、移動、機械力の使用などを促進せしめてゐるところの極めて重要な經濟的基礎である。



更に、粗質砂土及び細質砂土が、裸麥の栽培を可能ならしめ、裸麥をして緯度、高度に對して、小麥の限界線を超えて、熱の不足、濕氣の過大、瘠地によく成育せしめてゐる。ロシアが、裸麥の主産地で、該國全耕地面積の二八・九%は、裸麥の土壤で、これについては、獨逸、奧地利、洪牙利で、獨逸では、全耕地面積の二二%を占め、北獨逸に弘く分布する粗質砂土の低地

は、裸麥に大いに貢獻してゐる。

また、砂質壤土には、大麥の栽培が行はれ、この土壤の廣い面積を有する米國及びロシアが、多くの生産を出し、従つて該地に於ては、麥酒の製造がさかんである。而して、大麥には、醸造用大麥と動物用大麥との二種があつて、前者は、「集約的に、中歐、西歐に耕作されてゐるに對して、一方、後者の動物用大麥は、より粗放的に、施肥なしに、南ロシア、ルーマニア、地中海諸國、カリフォルニア、チレーなどに生産されてゐる」<sup>(三)</sup>。

註一 横井時敬 前掲 二九頁

註二 松尾俊郎 人文地理學 昭和四年 二五三—二五五頁。

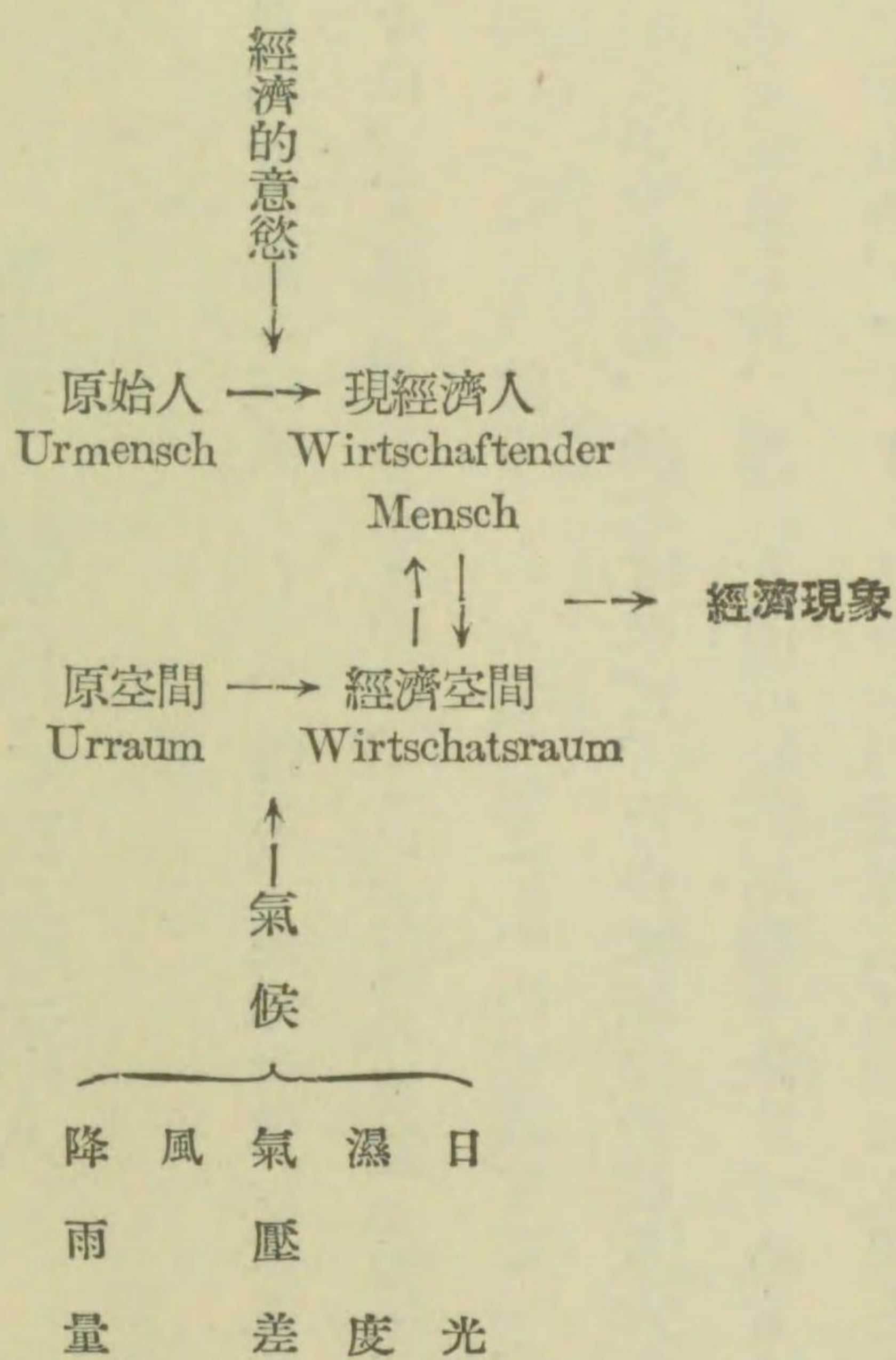
註三 松尾俊郎 前掲 二六三頁

### 第三章 氣候と現經濟人

自然界に起る現象として、即ち、地球を包む大氣中に起る現象として、短時間に起る状態を我々は、天氣(Wetter)と呼び、この天氣の連鎖を観察し、氣象的要素の平均状態を氣候(Klima)と稱してゐる。即ち、ハン(J. Hann)の定義する「或る特定地域に於ける氣象變化の長年間に於ける平均状態、換言すれば、その地域に於ける大氣現象の平常状態」<sup>(一)</sup>を云ふのである。この天氣と氣候とが、實に人間の經濟活動を決定するもので、人間の經濟現象に特異性を附與するものである。フリードリッヒの所謂、「氣候は人間との關係に於て、經濟の仲介をなす」<sup>(二)</sup>と云ふのものであり、従つて、「總ての自然要因の中で、土地形態を含む廣義の氣候、或は風土は、人間の存在に影響を與へるものの中で、最重要なものである」<sup>(三)</sup>。即ち、ハンチントンの觀察——「日本の死亡率の高い原因は、食糧の平衡を得ないこと、人口密度の大なること、夏期の氣候の不適當なること」<sup>(四)</sup>などにあると云ふ極端な主張も、氣候への過重評價にあるのである。

氣候は、總體として、現經濟人に、影響を與へるものであるが、これが個々の要素をみれば、

日光、溫度、氣壓差、風、降雨量などであつて、これらは、個體要素よりは、寧ろ複雑なる結合となつて、土地と現經濟人との生命力を與へてゐる。即ち、前者には、廣く植物の生育を關與せしめ、後者には、精神的肉體的影響を與へしめ、以て、經濟的能力に關係せしめてゐる。それ故に、原地球空間は、適當なる大氣包被 (Tuffatille) によつて、始めて、生活空間或は、經濟空間となるものである。



然らば、その氣候は如何にして生ずるか云ふに、地球上の氣候は、一に以て Insolation の

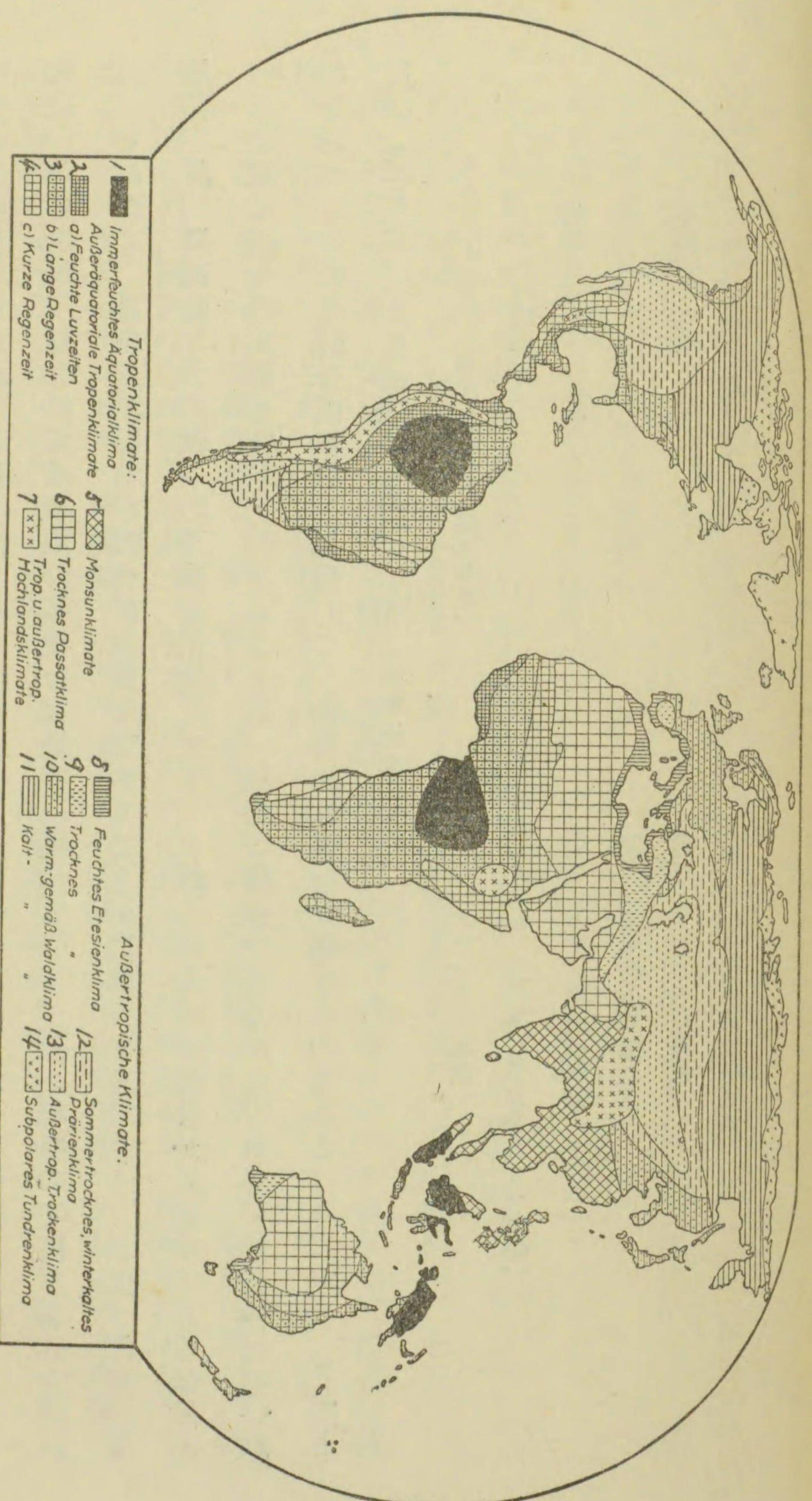
結果であると云ふことが出来る。即ち、地球表面の位置により、又、水陸分布の異同によつて生ずる照光量の結果である。この結果が現經濟人の立場からみれば、重大なもので、土地構成の可能性を支配し、その土地構成が、富源獲得に關する限りに於て、繼續的か、一時的かの收得能力に關係を附與するものである。即ち、人間とその經濟とに對して必要な収益性の相違を促すものであり、また同時に、「移動と適應性(經濟的附屬性)とを條件とする限りに於て、人類の定着性を左右する」<sup>(五)</sup>ものである。これに關して、フリードリッヒは次のごとく云つてゐる。「本質的に氣候的區別によつて條件づけられてゐるチレーの異なる自然景觀には、これに相當して相異なる民族群が存在してゐる。即ち、これは、氣候が、人間の身體に及ぼす影響を意味してゐるのである。勿論、それは、あらゆる自然景觀が、確たる人種陰影を創出することを意味するのではなく、それは、先行適應性と移動現象性とを結合したものを意味してゐるのである」<sup>(六)</sup>と。

かくのごとくして、氣候は、經濟の仲介者であり、經濟效果の支配者であると見ることが出来る。

註一 福井英一郎 我邦に於ける氣候分類に就きて 地理學評論 昭和三年九月 二頁

- 註二 E. Friedrich: Der Einfluss des Klimas auf die anthropogeographischen Verhältnisse Chiles. Mitt. d. Ges. f. Erdk. zu Leipzig, 1917, S. 102.
- 註三 E. Friedrich: a. a. O., S. 92.
- 註四 山崎直方 ハンチントン著「太平洋の西方」地理學評論 大正十五年第二卷 二四一—二四二頁
- 註五 E. Friedrich: a. a. O., S. 96.
- 註六 E. Friedrich: a. a. O., S. 95.

更に氣候分類の種類をみるに、「植物學的分類法、水理學的分類法、氣象學的分類法の三つがある。第一は、植物の分布状態から、氣候區を決定するもので、植物の外界の氣候に對する鋭敏性を基礎とするもので、カンダレ(Candolle)・グリーゼバッハ(Griesbach)・ヅリュエデ(O. Drude)・ケッペン(W. Köppen)などは、この試みに參與してゐる。而して、第二は、フイコン(A. Woiakof)及びペンク(A. Penck)などの流水状態に基く氣候分類で、一年中の流水を標準として氣候型を決定してゐる。最後は、氣温と降水量とを標準とする分類で、ズーパン(A. Supan)・ハーバーマン(A. T. Herbertson)・フリードリッヒ(E. Friedrich)・シーカー(R. Sieger)・パーキン(A. E. Parkin)・ハットナー(A. Hattner)(五圖)などは、この方法によつて世界の氣候を分ち、更にマルトンスとケッペンとは、理論的に大氣の循環作用の



- 1. 永久的濕潤熱帶氣候
- 2. 濕潤風期
- 3. 長雨期
- 4. 短雨期

- 5. モンソン風氣候
- 6. 乾燥貿易風氣候
- 7. 熱帶外高山氣候

- 8. 濕潤定季風氣候
- 9. 乾燥
- 10. 暖溫帶森林氣候
- 11. 寒溫帶

- 12. 夏乾燥・冬寒冷の本原氣候
- 13. 熱帶外の乾燥氣候
- 14. 亞寒帶ツンドラ氣候

原理から出發して氣温と降水量とを巧みに結合して、精緻な分類を行つてゐる。<sup>(一)</sup>

先づ、植物學的分類法をみるに、植物を以て、その地方に於ける氣候の代表者と見做し、かくてこの代表者を地域的に區分するのである。蓋し、それは、ある地域の植物帯を構成する植物は、その地域の綜合的氣候現象の表現を記録する様なもので、その植物の正確な選定を得れば、それから、該当地域特有の綜合的氣候を求めることが出来るからである。日光、溫度、氣壓差、風、降雨量などの個々の要素を追究しても、これらのものの結合から出來てゐる氣候といふ複雑な綜合的本質を分析把握することは、極めて困難であるから、外界の鋭敏性に強い植物を以て、かかる綜合的本質と見做して、世界の氣候を分類するのである。今、左に Köppen 及び Ellhaute による地球の氣候を示す<sup>(二)</sup>（松尾氏による）。

- |                              |                            |
|------------------------------|----------------------------|
| 一、メガサーマル (Megathermal, 高温多濕) | (三) ステップの氣候                |
| (一) リアナの氣候                   | 三、メンサーマル (Mesothermal, 溫帶) |
| (二) 熱帶サバンナの氣候                | (一) オリーブ樹の氣候               |
| 二、ゼロフィラス (Xerophilous, 乾燥)   | (二) 玉蜀黍の氣候                 |
| (一) 棗椰子の氣候                   | (三) カメリヤの氣候                |
| (二) サクザウルの氣候                 | (四) サバンナ高地の氣候              |

四、ミクロサーマル (Microthermal, 亞溫帶)

- |                                 |                       |
|---------------------------------|-----------------------|
| (一) 落葉樹の氣候                      | (一) 白狐の氣候 (北極ツンドラ)    |
| (二) 樺の氣候                        | (二) マングインの氣候 (南極ツンドラ) |
|                                 | (三) 犂牛の氣候 (西藏)        |
| 五、ヘキストサーマル (Hekistothermal, 寒帶) | (四) シャモアの氣候 (アルプス)    |

メガサーマルの氣候は、赤道地方の如く高温多濕なところと多雨な季節風地方とを云ふので、これを二つに分けてゐる。一は *Lianas* と稱する典型的赤道氣候で、一年の降雨が、七五インチ以上を呈し、高く繁茂する森林と椰子の地域である。二は、熱帶サバンナ氣候で、赤道に隣接する地方を稱し、スダンが理想的なところである。

ゼロフィラスは、乾燥氣候で、草に掩れた荒地やステップ地域である。この氣候地帯は、いたるところ、經濟生活に障害を與へて居り、只、水の得らるゝ沃地のみが、經濟空間となつてゐる。サハラ及びアラビアの乾燥地、トルキスタンの沙漠、蒙古から中歐へかけての大草原、北米西部の草原などは、何れもこれにぞくし、放牧の地である。

メンサーマルは、四つの氣候帯に分ける。(一)は Olive の氣候で主として歐羅巴の地中海氣候を稱し、多雨溫和な冬と乾燥する夏とを特徴とし、果實を産する。(二)は玉蜀黍の氣候で *Prairie* の Olive 地方間の漸移地帯を云ひ、玉蜀黍の栽培に適してゐるところである。北伊太

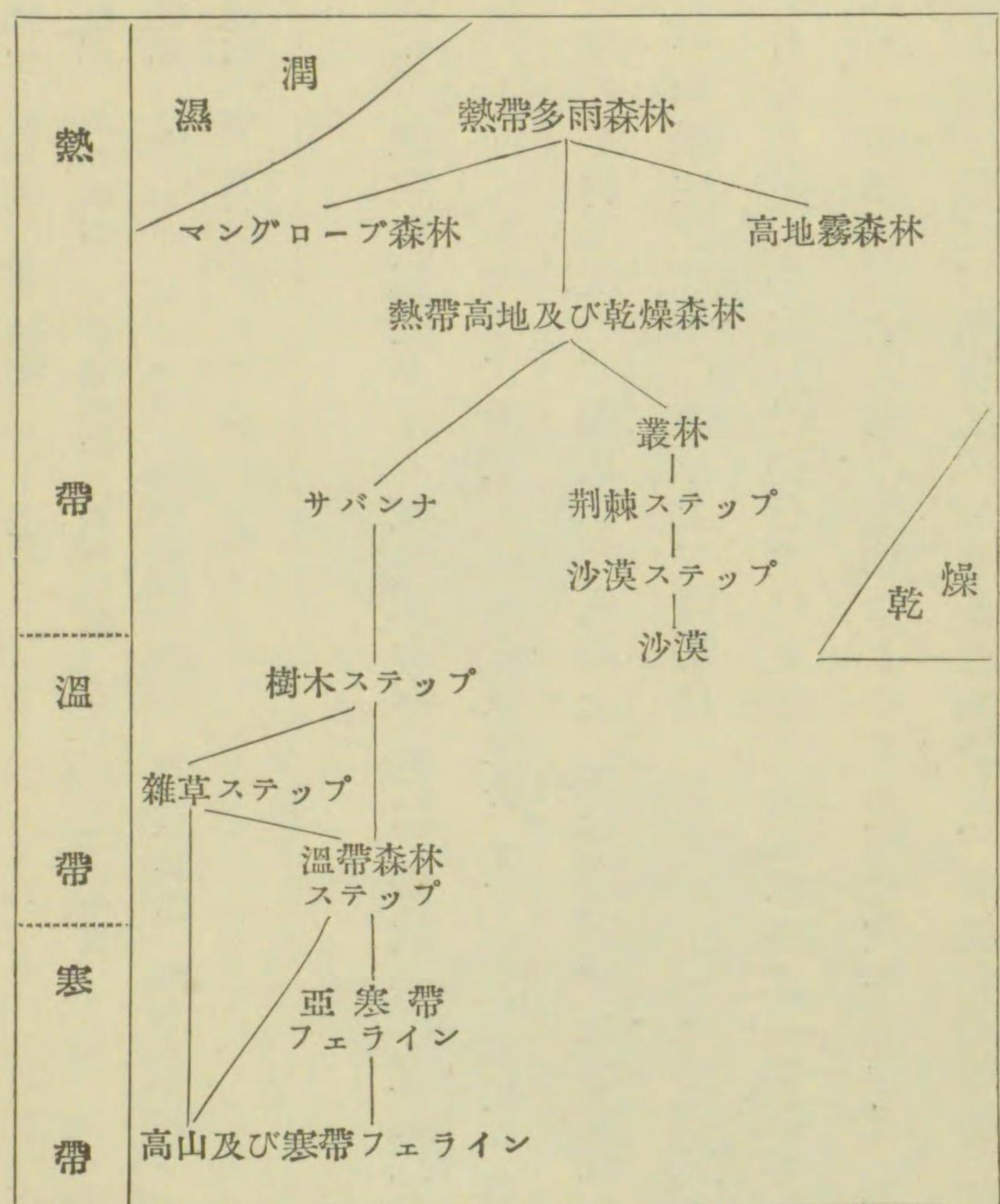
利、ルーマニア、米國がこれである。(二)はCameliaの氣候で、多雨な夏をもつ地方で、南支那、黒海の東部、北伊太利の湖水地域、ウルグエイ、バラグエイで、アジアでは茶の生産を以て代表されてゐる。(四)は高地のサバンナ氣候で、メキシコ、アビシニアに展開されてゐる。ミクロサールは、北方森林地帯に存し、冬雪、夏雨を特長とし、南が落葉櫟の氣候で、北が樺の氣候である。これらの氣候區は、温帯に於ける主要なる穀物の生産地で、小麦、裸麥、大麥、燕麥、馬鈴薯の生産空間である。

ヘキストサールは、樹木の貧弱なところで、この地帯に入るにつれて樹木は段々消失し、遂に植物は、僅かに地方的に限界さるゝに至る。ケツペンは、この酷寒地帯を示す標準として動物をとり、北極のツンドラ地域を白狐の氣候とし、南極ツンドラ地域をペンギンの氣候とし、バミールや西藏地方をTaltの氣候と稱してゐるのである。

更に、またヨナツソン (Jonasson) は、氣候を主眼として生産帯を區別し、「極地の寒冷沙漠と同歸線附近の乾燥沙漠との二種を、生産死滅帯となしてゐる。これに對して、右の生産死滅帯の間には、生活帯或は生産帯がある。即ち、(一)熱帯生産帯、(二)涼温帯生産帯、(三)温暖或は地中海生産帯があつて、(一)は植民物貨地域であり、(二)は穀物地帯であり、(三)は南國

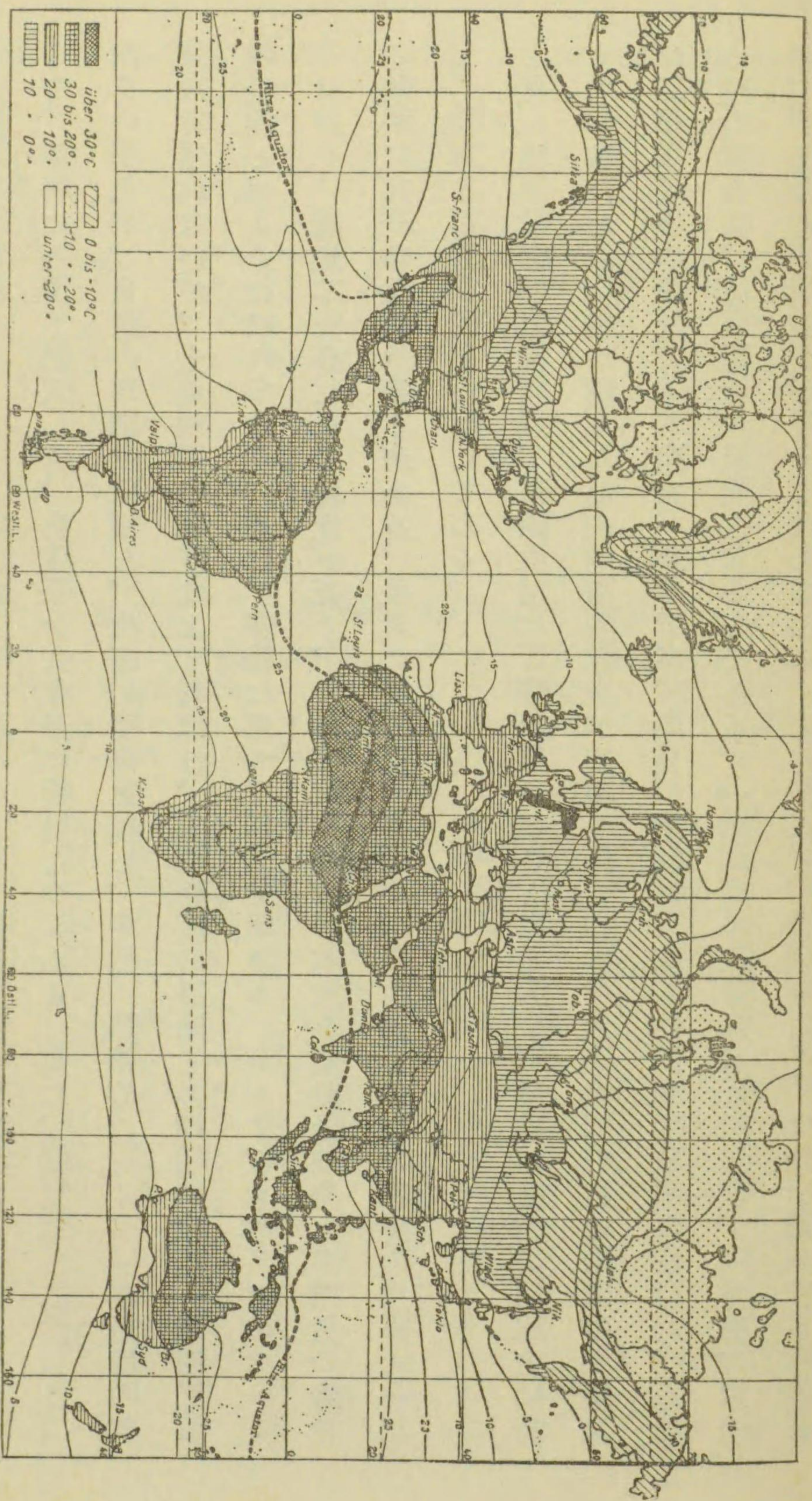
果實地域である。右の外に、アジアの季節風或は米穀地域を附加することが出来る<sup>(三)</sup>となして、總括的な分類を行つてゐる。

而して、更に、リュットゲンス<sup>(四)</sup>は、氣温帯と植物區との關係を次のごとく圖示してゐる。



- 註一 福井英一郎 前掲 三一五頁
- 註二 松尾俊郎 人文地理學 昭和四年 二二一―三三七頁
- 註三 辻村太郎 ヨナツソン著商品經濟地理 地理學評論 昭和五年六月 七〇頁
- 註四 R. Lütgens: a. a. O., S. 27.

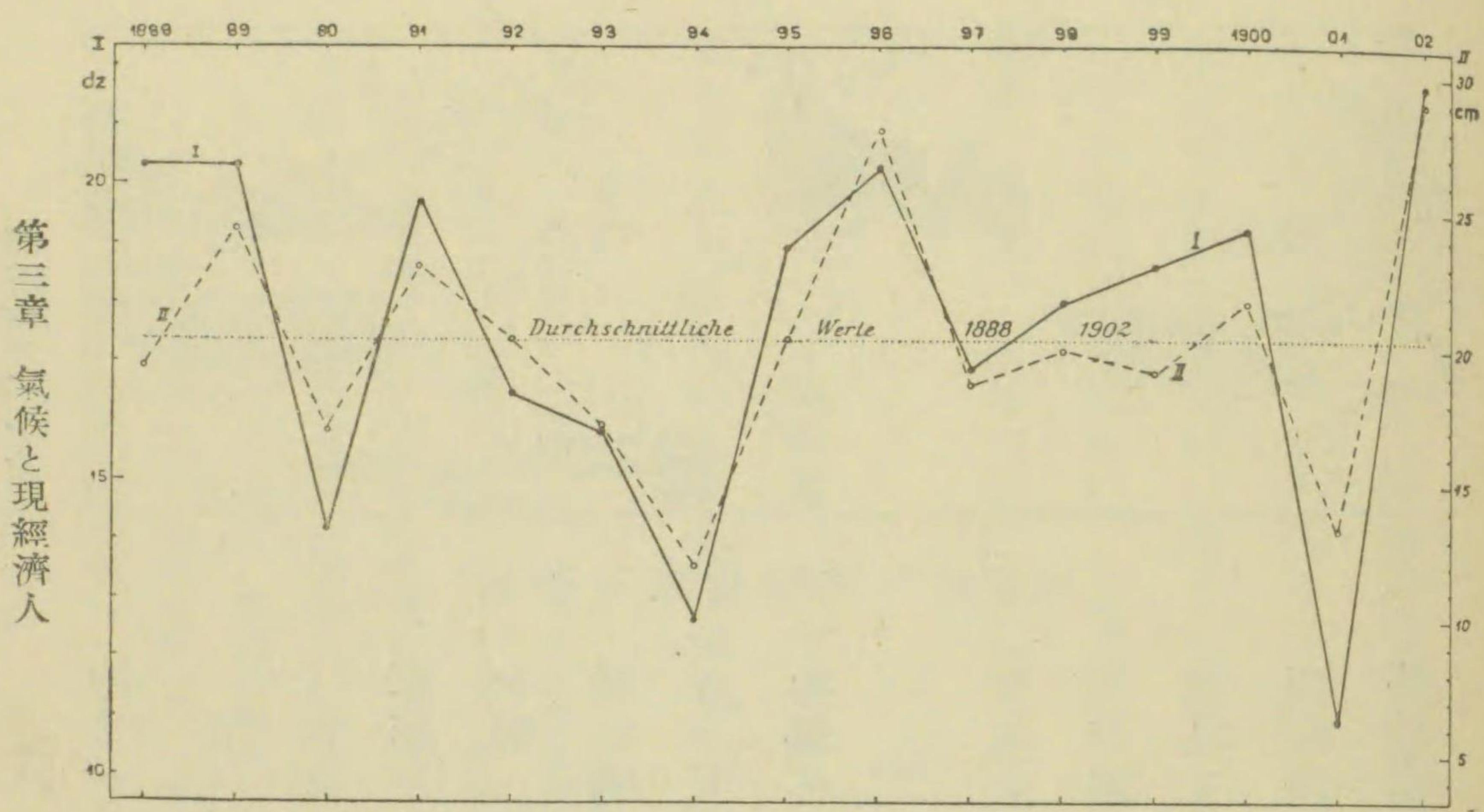
更に、溫度を基礎とする氣候區をみるに、攝氏一〇度と二〇度とを以て、特徴的平均溫度となし、これによつて、地球上に地上溫度帶 (Geothermische Zone) を分つてゐる。即ち、熱帶は一年の平均溫度が、攝氏二〇度以上 (華氏六八度) なる區域を稱し、亞熱帶は四月から十一月の平均溫度が、二〇度以上、溫帶は一月から三ヶ月の平均溫度が二〇度以上、亞寒帶は、一月から三ヶ月の平均が、一〇度以上 (五〇度)、寒帶は一年の平均が一〇度以下なる地域を云ふ。これ等の區域は、大陸面の形狀によつて複雑な境界線を有し、各は特異なる經濟空間を展開してゐる。一般に、熱帶は、高溫多濕地帶と、高溫乾燥地帶とに分けられてゐるが、この二帶の間には、現經濟人に對して重要な漸移地帶がある。これを熱帶に於ける經濟的漸移地帶 (Wirtschaftliches Übergangsgebiet) と稱し、この地帶から、世界經濟の機構を形成する主要生産物――ゴム、椰子油、砂糖、茶、カカオ、珈琲などが産出され、以て豊かな經濟區を形成してゐる。



第 6 圖 地球の年平均氣溫

然し、高熱のために労働能率を高めること難く、氣候適應性 (Anpassungsfähigkeit) は平等的に各民族に許され得ない。白人及び日本人に比較して、強い適應性にとむ支那人は、熱帯のみならず、寒帯にも深く侵入して、自然景を文化景に變換しつゝある。更に、温帯地方に至つては、四季の變化が、自然の單調を破壊し、生産の變化を促し、宛然、熱帯のごとく、一年數度の收穫は行はれないが、土地利用の程度はよく行はれ、集約經濟の展開と多種類の生産と製精工業の發達とがよく行はれてゐる。更に、寒帯に至つては、アラスカ、ロシア、シベリアのツンドラの如く、雨量不十分にして溫度が低く、ために植物生育の不十分な乾燥地帯と多雨量の森林の發達に充分な温潤地帯とがある。後者に於ては、各種用材の生産と多種な毛皮の生産とを出し、特異な經濟空間を作出してゐる。

更に降雨量が、直接間接、經濟生活に影響を與へることは甚大で、降雨の分布が地球上に於て不平等なために種々様々な地理的産業區域が出現されてゐる。大農業國である米國の小麥及び玉蜀黍の中心産地である南ダコタ州では、雨量の増減は、直ちに玉蜀黍收穫に關係し、雨量一時の減少は、數百萬圓の減收となるのである。一九三〇年八月八日の報道は、未曾有の大干魃で、とくに玉蜀黍の暴騰を惹起してゐる。之に對して、夏期アジア大陸を襲來する季節風



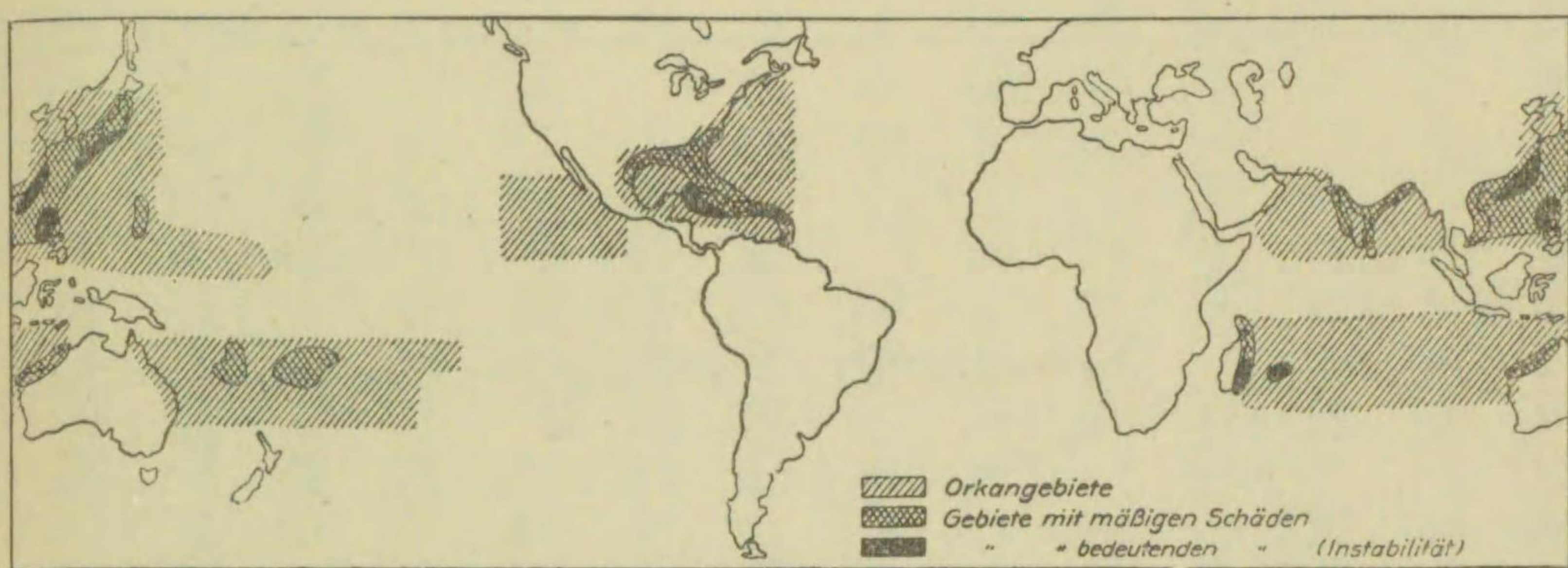
第7圖 米國の玉蜀黍生産と降雨量との關係

I. 一エーカーの玉蜀黍生産 (dz) II. 六月七月の降雨量 (cm)

茲に於ける玉蜀黍帯はオハヨ, インディアナ, イリノイス, アイオワ, ネブラスカ, カンサス, ミソウリ, ケンタッキーを包含するもので、數字は 1880-1902 の十五ヶ年間の平均である。

(Monsoon) がもたらす雨量は、米の生産を決定し、季節風の襲來時期の早晚遅延、或は無襲來は、アジア民族の經濟に重大な影響を與へるもので、印度の飢饉は、屢、この訪問の時期に關係してゐるのである。又、間接的には支那の銀相場に影響を與へてゐる。とにかく、季節風の地域は、米と茶と生絲との特殊經濟空間をつくり、この降雨量と降雨の時とは、經濟に關係を及ぼす生産要素となつてゐる。更に、歐羅巴の地中海をみるに、降雨は、夏よりも冬に多く、ために主要なる穀物の成長には適應しないが、果物の生育に適してゐる。これが、所謂、地中海沿岸氣候と稱するもので、果





第8圖 熱帯旋風の分布

物、オリブ、ブドウの經濟空間を形成してゐる。

かくのごとく、降雨が、經濟の量、質、種類に關係を與へるとは明白であるが、その雨期の長短は、また、經濟、勞働能率に影響を與へ、濕氣に鋭敏な紙、カカオ、粉、鹽、菓子などに關係を與へてゐる。従つて敘述の紙……などの製造工業は、各地の環境に適する製造工程を採用し、濕潤亞熱帯の日本に於ては、これらの工業には、とくに留意を要してゐる。又、織物工業にも影響を與へることは勿論で、棉花工業は、太平洋、大西洋の濕氣の多いところに限界され、歐洲大陸へゆくにつれて、該工業はさかんでないのである。

敘述のごとく、氣候或は氣候區が、複雑になればなる程、經濟現象も多面的態様をとり、而かも氣候の週期性(Periodizität)は、現經濟人の經濟生活を決定し、また、氣候に對する適應性は、經濟效果の収益性に影響を與へるものである。我國に於ける四季の

變化、季節風の週期的襲來は、直接には我國の農業に、間接には工業に關係を及ぼしてゐる。

一例をとれば、本邦の菓子工業が、氣候に關係する果物の生産と結合して居り、毎年百萬トンを出す本邦の果物は、菓子工業にある制限を與へてゐる。

右の季節風のほかに、貿易風、西風、旋風、地方風などが、種々な經濟地域を作り、特に、北歐、中歐、北米に於ては Drevinde が、氣候及び天氣を支配して、經濟地域に重大な影響を與へてゐる。

こゝに於て、氣候は、大地耕耘の可能性を條件づけ、一方、天氣は土地耕耘の生産を制限するものであると云ふことが出来る。

註一 未曾有の大干魃が、ロキイ山脈以東全體に互つて慘害を及ぼしつゝありとの報道によつて、ウォール街及び全米の思惑筋は、株をそつちのけにして、穀物市場に突入して來た。とくに、玉蜀黍は、干魃の被害が甚大なため、暴騰に暴騰を續け、遂に今期の最高値に達した。これにつれ小麦、燕麥も高値に奔騰した(一九三〇年八月八日、東京朝日新聞)

註二 旋風は低氣壓の中心移動し、風向刻々變化し、氣象状態の激變を見るものを云ひ、(一)熱帯旋風と(二)大陸旋風との二種に大別される。尙、熱帯旋風は、トルナド Tornado (アフリカの海岸に起るものもあるが、北米テキサス州ミシシッピ流域に起る強烈な風で、一種の漏斗狀の龍卷を生じ、大被害を及ぼす) b.ハリケン Hurricane (中央アメリカ及び西印度諸島に起る風)、c.オールケン Orkane (南印度洋南緯一〇度—一五度より起り回歸線内を西に向ふもの、

濠洲とその東のバウモツ島との間に起り南及東南に向ふもの、布哇とメキシコとの間に起るものなど) d. 颱風(秋季南洋諸島の海洋中に起つて日本列島を襲ふもので一種のオルケン)などがある。これに對して大陸旋風は、回歸線帯外の風で、颱風と呼ばれるものである。米國、カナダ、シベリアなどの中緯度高氣壓部に起る動源低氣壓で、これらは東に向ふ。バンマロス(Panpers)は、南米アルセンチンに起る颱風である。(富田芳郎 經濟地理學原論 昭和四年 七五—七六頁)

註三 地方風は、各地の地形的影響で、特殊な風を生じ、地方によつて種々に呼ばれてゐる。これも、(一)寒風と(二)熱風とに分ち、前者には、ミストラル Mistral(冬季、地中海のリヨン灣に生ずる低氣壓によつて起る風)、ボラ Bora(アドリア海の東北海岸を襲ふ北々東風)、クリベツツ Crivets(冬季カルパチア山脈の東南、ルーマニア平原に起るもの)、ブリツツザルド Brizald(北アメリカの中緯度地方に於ける氣温の急下を來たす寒風)などが屬し、後者には、シロッコ Sirocco(アルゼリア、チュニス、スペイン、シシリーで吹く乾燥熱風)、チヌーク Chinook(北米ミソウリ河の上流に起る西風の乾燥熱風)、威(空風、フェーンと同じく、山越しの風で、淺間風、榛名風 秩父風、比叡、筑波風)などが屬してゐる(富田芳郎 前掲 七六—七八頁)。

## 第四章 水と現經濟人

地球表面の大部分は水である。水の完全な缺乏は、總ての生物、從つて現經濟人をも、水の潤澤な地方へと移動を餘儀なくせしむる。

自然は二つの形態で水を人類に與へてゐる。一は海洋として地表を壓してゐる水であり、他は陸上の水として各大陸に與へられてゐる所のものである。前者の海洋は經濟空間であるが居住空間ではなく、これに對して後者は、同時に居住空間及び經濟空間の兩主要成員をなしてゐる。現經濟人を支持する土地との結合に於て、水は不可欠なるのみならず、自然が給與するものの重要部分であり、水あつてこそ始めて、人類は經濟的に活動することが出来るのである。而して、一方、海洋としての水は、海濱沿海に於てのみ親しみ易いが、確たる居住支持點からのみ、經濟的にアススウェルテンし得る曠大な濕潤な地球空間として殘存してゐる。

地塊及び大陸は經濟の主要支持者であり、假令、その地塊が絶海の一小孤島であつても、經濟構成の一員をなしてゐる。地球の經濟空間が、益々小さくなり、孤立的に島化されるればさる、

程、經濟空間としての海洋の意義は、益、重大となるもので、今日に於ても尙、民族のなかには漁業民族としての經濟特性を有し、本質的に海洋の位置に依存してゐるものがある。

また海洋の位置は、地球上の經濟地域を相互に容易に結合せしむるもので、事實、世界的價值を有するものは、地球上唯一の絶對的威力たる海洋と不斷に結合しなければならぬ。海洋の位置は、政治的及び經濟的發展過程に於ては屢、人口増加の本源となるに充分であつた。それは、歴史が既に海國民の人口増加を物語つてゐる。一國、一地方の經濟文化が發展すればする程、海洋に對する及び海洋に於ける位置は、益、缺ぐべからざるものとなるであらう。獨逸が西北に於て、僅かに北海、否、大西洋に面してゐる位置は、如何に獨逸の經濟空間に生氣を與へてゐるか。<sup>(二)</sup>

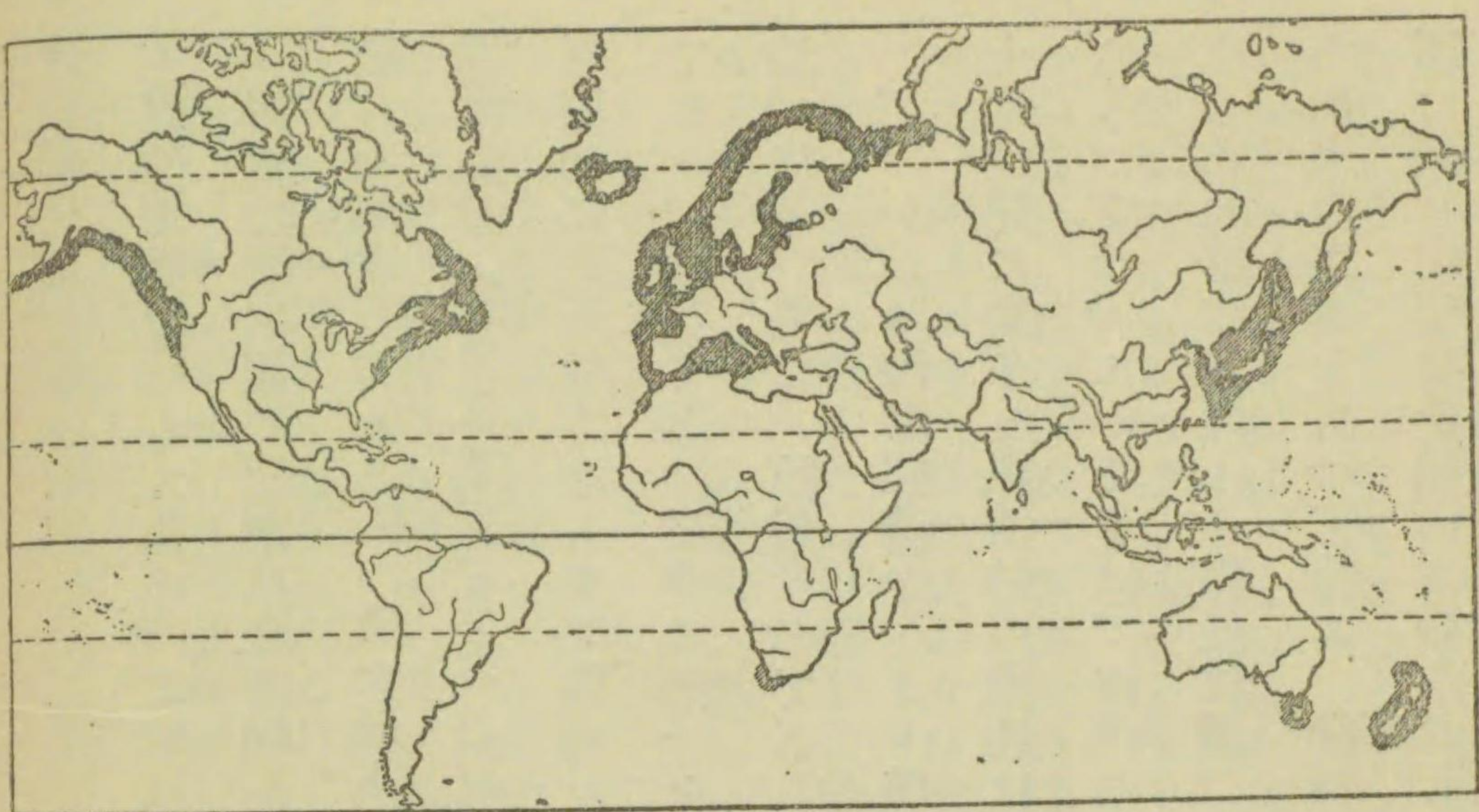
海洋は無機物を包藏し、また動・植物性有機體の支持者として、それ自體、既に經濟空間である。が、それにも拘はらず、海洋經濟 (Meerwirtschaft) に、多大の障壁が存するのは、經濟的補助手段の不充分なためか、或は大遠隔性の非克服性なためかである。

然し、ホッホゼーの沿岸地域は人類に對する漁業區を形成し、陸棚及び淺海は豊富な漁獲場を提供し、また、往々にして地方的・國家的經濟構成に影響を及ぼすか、或は之を支配する様

な牡蠣淺堆を我々に與へてゐる。即ち、北海及び東海の漁業區域は、兩海隣接國の經濟構成の本質的組成をなしてゐる。これは北日本及びニューフアウランド漁業にも妥當する。また、

「諾威の輸出額の三割は海産物から占められてゐる事をみても、大漁業は本質的に世界經濟の斷片を形成してゐる」<sup>(三)</sup>。また陸上を遠く離れては、海洋哺乳動物の捕獲及び利用を目的とする遠洋漁業 (Hochseefischerei) が展開され、また航行技術の長足な進歩によつて、海洋區域は、經濟的に遠隔地方をも支配圈内に加へ得たので、これがために、アイスランド漁業は益、發展してゐる。而して海洋經濟の第一次的或は第二次的生産物は、魚類、牡蠣、貝殻類、甲殻類、漁油、皮革、毛皮、鯨鬚などであることは云ふまでもない。

が、かかる海洋經濟を、より僅少に保持してゐる土地空間が、もしあるとしたならば、その土地空間に對する經濟的可能性は如何に單純な構成をとり、如何に同質的分布を示すことであらう。また、このことは、海洋の經濟空間にも應用されることである。即ち、人類は、いたるところに於て限界——深度位置、動物の垂直的分布、海洋の溫度——などに對して越えることの出來ぬ限界をもつてゐる。動物生産物の多寡に應じて、海洋の經濟的基礎の重要性は、隣海國に對して變化を與へるのみならず、また、他方に於ては、經濟的道具が人間に制限を與へる



第 9 圖 世界の主要な漁場

ものである。

明かに氣温の拘束性は、一定の海洋有機體の發生を制限する。この好例は經濟に對して多大な價値を有する珊瑚が示現してゐる。が、こゝで取扱ふのは、經濟地理學的立場から珊瑚が、地球上、如何に廣く分布してゐるか云ふ純動物學的問題ではなく、經濟的に利用され、精製される珊瑚の分布或は限界の問題に就いて云つてゐることは云ふまでもない。また海綿も一定の深度と温度とに結合されてゐる。海參漁業もアジア方面の地方的經濟形態であり、眞珠漁業も海洋の地方的に限定された經濟價値を決定してゐる。

更に、漁業が、海濱居住者の職業構成の上に影響を與へることは明かで、琥珀の地方的産出は、特に人間經濟の美術工藝的方面に作用を及ぼしてゐる。こゝに

於て、ある一定土地の經濟の直接比較をしてみれば、魚類の頻しき大群の存在は、僅少な場所に於て個々海産物の制限された存在と常に相對立してゐるので、こゝに、海洋經濟は粗放經濟と集約經濟とに分類することが出来る。

更に海洋植物に關しては、人間は古代から海藻を利用したので、海洋から採取した海藻及び一部蒐集したる海藻は、從來、灰とされ、ソーダ製造の原料に利用されたのであつて、海藻灰は、フランスでは *Yareg* その他の歐羅巴では *Kelp* と稱せられ、現在は、沃土製造に利用されてゐる。

尙、極に行くにつれ、深度が減少するにつれて、海水は無機物としての鹽類（通常含有、三五%）をもつと平等に準備する。鹽採取は非常に古いもので、今日でも尙、特に、熱帯及び亞熱帯に於て經營されてゐる。が、海水を蒸發せしめ食鹽の結晶を得る鹽田は、鹽類に乏しい地中海經濟に於て、また岩鹽の産出を有しない日本の瀬戸内海經濟に於ては、經濟生活の重要な役割を演じてゐる。

而して多くの海は、動・植物有機體の包藏に乏しく、従つて該當海の奥地に對しては、經濟的薄弱地域を意味する場合が多い。かかる場合の原因は、紅海に於けるが如く、含有鹽の過度

な保有の中にあるか、或は海洋有機體の生活を不能ならしむる化學的混合の中に存してゐる。黒海に於ける硫黄水材の含有は後者に對する好例である。

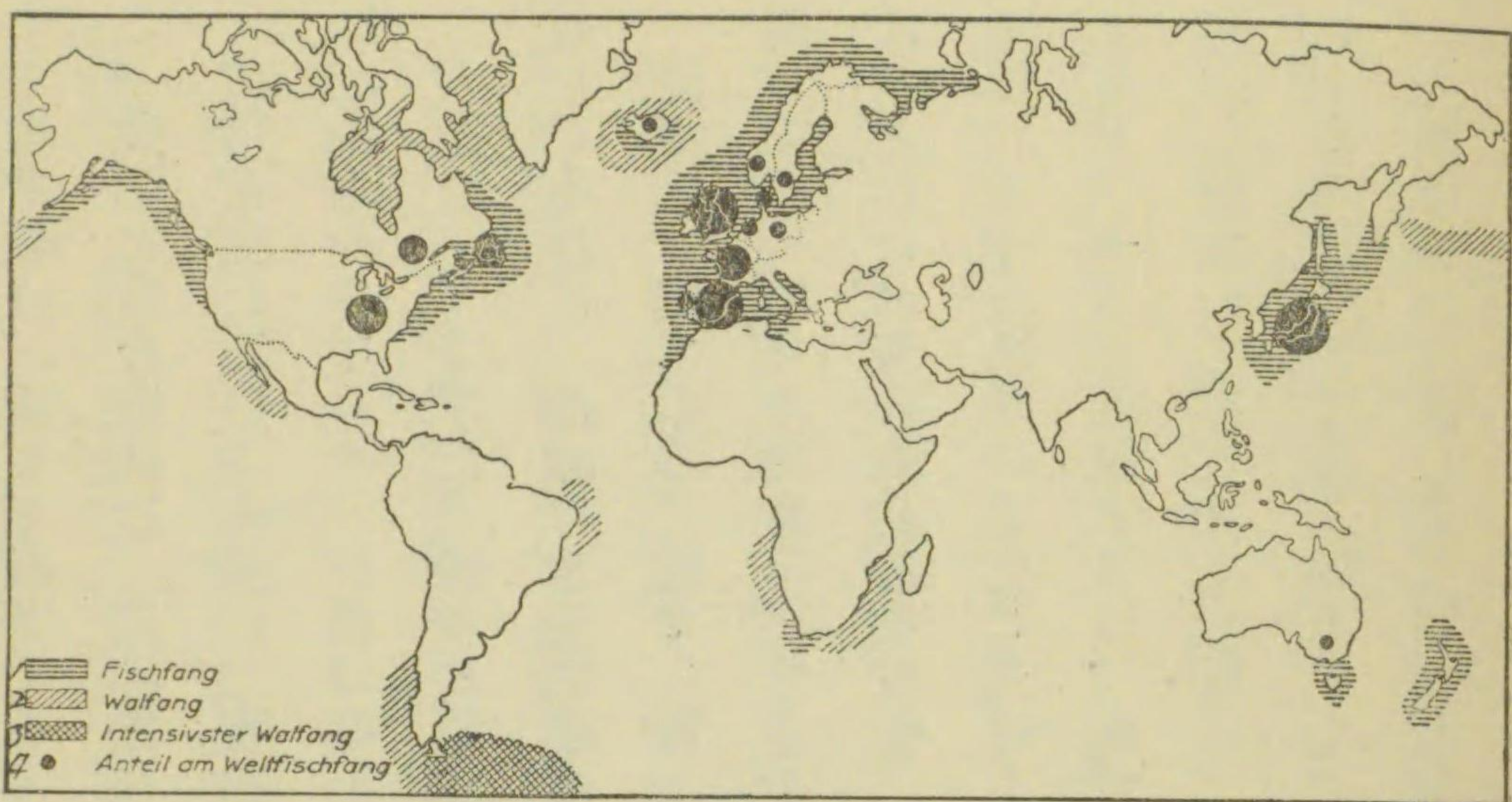
註一 市川誠一 ラッachel海洋論 昭和五年 一一六頁

註二 R. Reinhard: a. a. O., S. 256.

註三 M. Eckert: Meer und Weltwirtschaft, Weltpolitische Bucherei, Bd. 9, Berlin 1928, S. 21.

海洋は地球の總ての經濟空間のうちで、最大な表面を占めて居り、これが陸上の經濟空間との基本的差違は、現經濟人が、經濟の向上目的のために陸上に於て成し得る本質的勞働を、海に於てすることが出来ないといふところに存してゐる。海洋は處理し得べき幾多の産物を藏してゐる。これに對して海洋經濟に於ける人間の經濟能力は、生産物を採取すべき技術的方法の發見の中に存立してゐる。勿論、生産物の中には種々ある。經濟的意味に於て第一に立つものは、天然の精製品であるが、經濟過程は、原始形態から航行術及び漁業術の最高に達した形態に至るまでのあらゆる變化に於ける一集成である。これについては、食鹽及び海藻に於けるがごとき、技術的變化過程を受けた半製品及び粗製品がある。

現經濟人の陸上の水に對する地位は、本質的に海洋に對する地位とは異なる。勿論、水に於



第 10 圖 世界の漁場と各國の生産高  
1. 漁獵 2. 捕鯨 3. 大捕鯨 4. 世界漁獵の分割

ける位置、即ち、湖沼、河川に於ける位置は、海洋に於けると同じ方法で、自然的に作用してゐる。が、その相違は純粹に分量的にみれば、著しく大きい。經濟有機體が小さくなればなるほど、水の意義は益々大きくなる。河川及び湖沼は、原始の經濟形態に於ては經濟空間を相互に分離し得たが、今日では、最早、分離し得ない。動物、殊に魚類の包藏は場所的意味を有してゐるにすぎず、而かも、經濟階梯が低くなればなる程、人間は狩獵或は漁獵に依存してゐるものである。河川は、經濟生活の重要な支持者であり、個々の地域、とくに原始林や極地方に於て、經濟生活を支配する。然し、それだからと云つて、河川が常に親縁的氣候に於て、同じ様な經濟要求として作用すると云ふ一般的方法は、勿論、存在しない。漁類富源の種類及び量に對

する多様性は、極めて顯著であり、これはまた海洋に對する水系の位置及び水路に依存してゐる。魚類に富む海洋は、産卵期に、近傍河川の魚量に影響を與へてゐる。

河川系統に於ける水量は、現經濟人によつて處分し得る自然貯水量を限定する。ひとり、それは流水のみならず、位置の高低によつて河川の利用率に影響を與へる地下水にも關係してゐる。従つて、こゝに、森林に對する空間的關係、或は、森林經濟に對する關係が起つてくる。蓋し、それは、森林は水量調節者として存在の意義を輕視され得ないからである。

流水は、總ての時、總ての所を問はず、常に同様に處分し得らるゝものでなく、現經濟人に對して先づ第一の考察を要求するのは水の狀態ではなく、水量に關する問題である。換言すれば、それは水量の氣候的拘束性の問題である。即ち、北獨逸に於ける河川の水量は悉く、水源地域たる中央山地の自然に依存し、高位水量は、三月の雪解と夏期の降雨とによる直接の結果であり、一方、低位水量は、通常、九月に入つて始めて現はれてくる。然し、中央山地以外の高山に結合してゐるライン川は、この例外で、六・七月の候に水勢激しく、恐るべき水量を示し、冬季期に於て漸く渴水する。

人間の經濟生活に最も強烈な影響を與へる經濟地位は、簡単な形式で表はし得る。即ち、水

があるかないか、水の有無これである。即ち水の過大と過小 (Zuviel u. Zuwenig) との問題である。經濟の自然的基礎は、水を供給し得る地域に存するもので、若し、これに反すれば、その地域は、人間が水を供給するまで、非經濟的に或は經濟に乏しく殘存するであらう。實に、人間の飼育空間を擴大する問題は、乾燥地に水を供給し得るか否か、若し出來るとすれば、如何なる方法によつて行ひ得るかに存してゐる。實にこの問題の解決と方法とは、古くからあるもので、水の乏しい地域か、河川のない空間に於て、益々増大する人口増加が、飼育空間の擴大を要求する様なところに於ては、いたるところ、人工的大灌漑が存在してゐる。近東及び西トルキスタンの河川沃地は、人工的灌漑に對する運河の建設の好例である。淺溝的、深溝的、平面的灌漑は、要するに、水の過少問題を解決する量的相違の方法であるにすぎぬ。氣候的條件からみて、蒸發が降雨よりも大なる所では、一般に灌漑栽培が必要であることは、茲に多言を要せぬ。

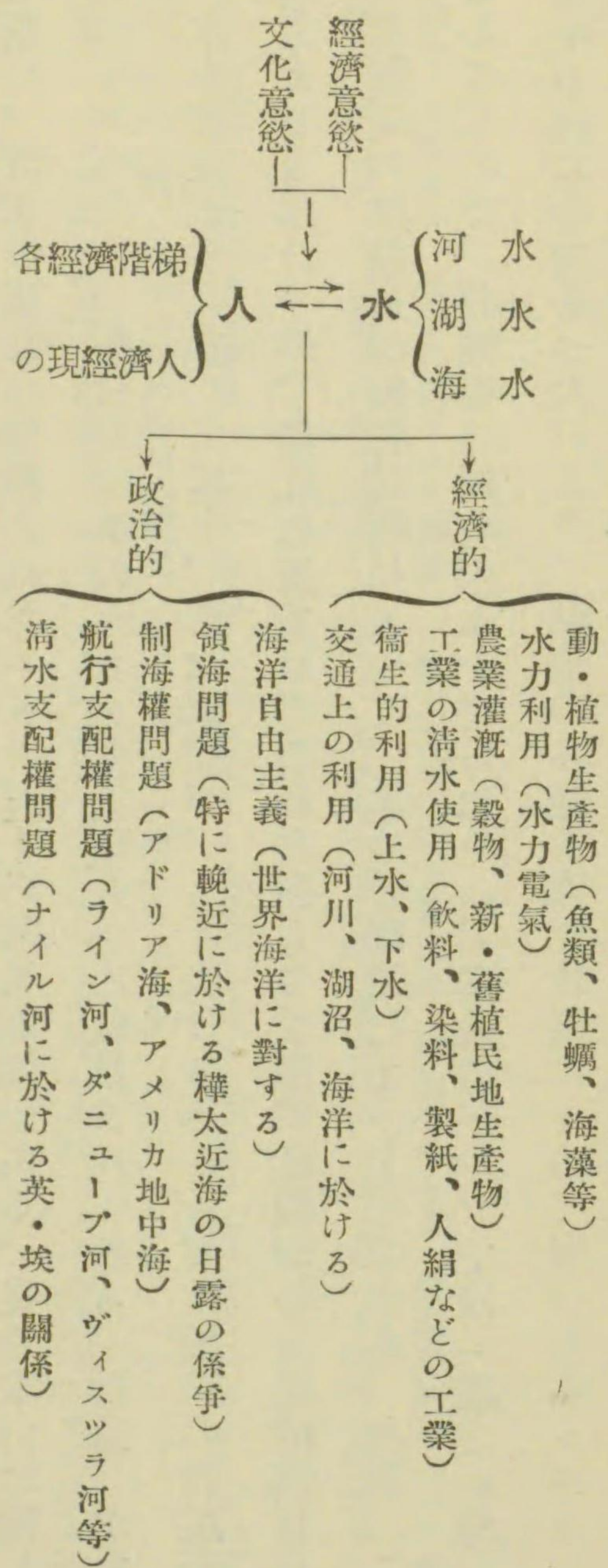
西トルキスタンの Merw 沃地は、乾燥地域に曠大な園藝栽培地を開拓した適例である。水の輸送は、運河、溝渠、或は導管によつて行はれ、或はまたナイル河に於けるが如く、水揚機械や釣瓶井戸によつて河流から乾燥地へ分散させるために、周縁の高所に送られる。また水田耕

作に於けるが如き平面灌漑 (Flächenbewässerung) は、いたるところ同一ではない。英領印度は九萬六千キロ以上の灌漑運河をもつて居り、また、濠洲のニュー・サウス・ウェールズは、千平方キロの新土地を開拓し得るスタウベッケン (Staubecken) を計畫した。労働操作は、敘述の田園栽培では、栽培表面の個々灌漑にまで進んだのであつて、個々灌漑の無限数の總和は、最終生産物として、決定的に大經濟表面を作つてゐる。日本に於ける無限な表面的個々の灌漑はこの好例である。而かも、技術の發達するにつれて、人工灌漑に基礎を置く栽培沃地の經濟表面は、益々増大するであらう。米國では沃地技術が最も有效に行はれ、今日既に八萬一千平方キロ(約、北海道の面積)の栽培が行はれてゐる。特にカリフォルニア及びアリゾナ乾燥地では、米國式技術によつて人工灌漑が行はれ、非經濟的自然景觀は、急速なテンポで、新しい生産空間及び營養空間となつてゐる。

水量問題の他面は、水の過大にある。勿論、それは、洪水氾濫、即ち、過剰な降雨と増大な地下水面との間に於ける量的差違によつてゐる。如何なる場合でも、人間が土地を利用せんと欲するならば、水の運送に留意すべく強制されることは論を俟たぬ。洪水の場合には、排水運河の建設以外に、護岸と提防とを要する。運河制度の形式に於ける排水或は放水は、土地經

濟に有害な過濕に對する流出をつくつてゐる。濕潤低地の土地改良計畫は、營養空間を擴大するために、とくに集約經濟の地域に行はれてゐる。

利用水或は使用水は、經濟、技術、衛生に多大の貢獻をなしてゐる。土地經濟に於ては、水は棉花栽培及び農業的灌漑に必要であり、工業に於ては、所謂工業用水、洗滌水として必要で



ある。特殊工業に於ては、硬水か軟水かを用水として使用し得るや否やの問題が、決定的重要性を有してゐる。北アメリカの羊毛工業の位置は、とくに、存在してゐる軟水に從屬して居り、また、一般に纖維工業は、軟水を要求し、場合によつては、化學的混合で、水を人工的軟水に

しなければならぬ。また、飲料工業、染料工業、人絹工業、皮革工業及び製紙工業などに對しても、水質の如何が、基本的意義をなしてゐる。その他、衛生的立場から見れば、水は所謂都市の排水に貢獻してゐる。

最後に、流水の運動に包藏されたエネルギーの利用問題がある。從來水力に關しては殆ど顧みられなかつたが、今日では水のエネルギーは大いに利用されてゐる。勿論、水力利用の嚆矢は、水車建設の中に存して居り、また瀑布が、より大なるエネルギー提供の發生所であることは云ふまでもない。が、最近に於ては、これに對して、河川急傾斜の自然的割目に於て、人工的な横斷堤の建設及び谿谷遮斷によつて、水力を獲得しようとしてゐる。勿論、これも、古くからあつたので、碎鑛場の經營用水を得るために、獨逸のハルツでは「堰どめ池」(Stautloch)がつくられたのであつた。また、湖沼の多様な高度位置によつて與へらるゝエネルギーは、湖沼相互を連絡して、位置のエネルギーを、運動のエネルギーに變化せしめて利用されて居る。如何なる場合に於ても、これが目的は、エネルギー發生を、力と光との形で利用するにある。が、一般に水力利用に對しては、水量の週期性の中に、著しい障害が存してゐる。特にそれは、凍結氣温をもつてゐる總ての地域に於て、流水の氷結によつて、尙一層の障害を増大する。然し、

近代的技術は、とくに、この問題に留意して、氷の下を流るゝ僅かの水量を以て、エネルギー發生操作を維持し、また有利な氣候的位置にある水力工場と聯絡をとつて、その經營を一樣ならしめてゐる。が、尙これより強い經濟的抑壓は、水車の經濟經營困難の中に存して居り、河川の凍結期間をもつてゐる總ての地方に於ては、水車によるエネルギー發生形態は完全なる損失を受けてゐるのである。

註一 山岸忠夫 米國の地下水と灌溉 山崎直方博士記念論文集 昭和五年七月 地理學評論 一二九—一三九頁

註二 棉花は、その産地の地理的分布に於て、英米を制約的對立關係にたゞせ、「水」と特殊な勞働力とに於て、米國に内紛を起させ……とあるごとく、水は乾燥地の棉花栽培には缺ぐべからざるもので、これがために、ナイル河の上流で、棉花栽培に多量の水を使用してゐる英國と、下流埃及との間には絶へず、水の獲得争ひが起つてゐる。

佐々木彦一郎 棉花の經濟地理的研究 地理學評論 昭和四年八月 一四頁

註三 水が農業的灌溉に必要なことは、左記の穀物(米國)が三ヶ月間に要求する必要水量をみてわかる。(山岸忠夫前掲 一三四頁)

Corn 300, Wheat 350, Oat 370, Grapes 370, Clover 400, Potatoes 400. (tons of water)

註四 水力は單位時間に流下する水の容積と、流下する高さとの積に比例する。従つて水力を利用するためには、(一)水の容積、即ち水量と(二)流下する高さ、即ち落差とを必要なものとするのである。尙、工業上に用ひらるゝ水力を馬力數で示せば次のこととなる(原田準平 地理的に考察した本邦水力發電所の分布 地理學評論 大正十五年 二九



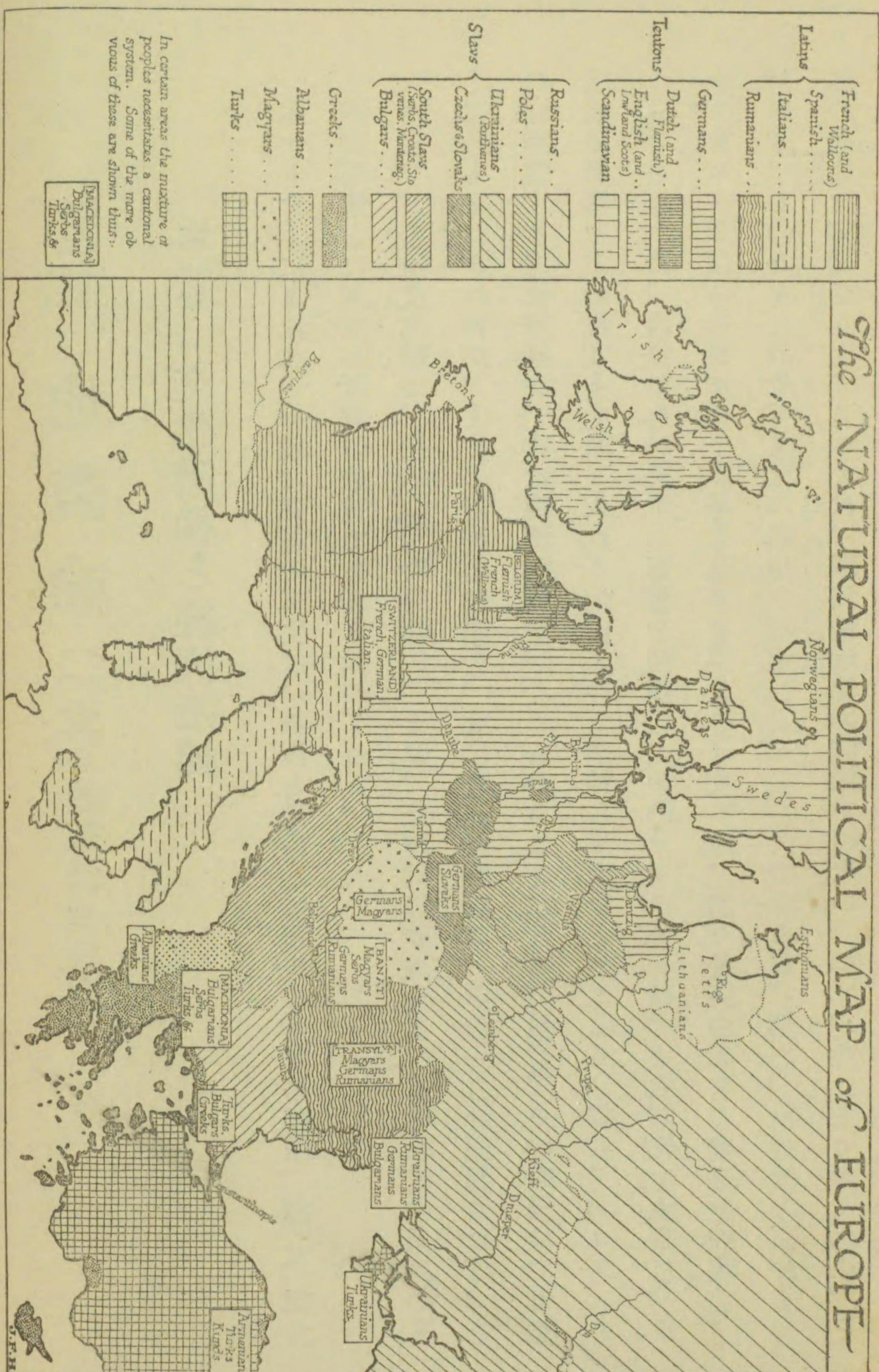
$$\begin{array}{l}
 \text{H. P.} = \frac{1000}{75} \text{ Q. H.} \\
 = 13.33 \text{ Q. H.}
 \end{array}
 \left. \begin{array}{l}
 \text{H. P.} = \text{馬力數} \\
 \text{Q.} = \text{水の容積 (立方米)} \\
 \text{H.} = \text{高さ (米)}
 \end{array} \right\}$$

### 第三編 地帯論 (一般比較經濟地理學)

#### 第一章 文化階梯と經濟階梯

ヘットナーによれば、一般に廣義の文化は、物質と精神とに對する所有の總體、即ち、能力と體制形態とに對する所有の總體であると云つてゐる。

而して、この文化群は、從來、屢、時間的に、また、空間的に分類せられ且つ一定の系列のもとに持ち來たされたが、文化の精神的側面か、或は物質的側面か、その一方を強調すれば、それに相當する文化階梯か、或は經濟階梯かがつくられることになる。然し、その階梯は、自然環境の影響をどの程度まで取り入れるかによつて多様な形式をとつてくる。即ち、バステイア (Bastian) は、直接的自然環境の影響を強調し、かのラツチエルは、文化同化を主張し、ランプレヒト及びスベンングラー (Spengler u. Lamprecht) は、個々民族の固有の發達を鼓吹し、何れも、その各々に於て、文化の階梯を規定しようとしたのである。然し、精神的方面から文化の成立を實證せんとすることは、經濟地理學の課業ではない。即ち、生れ上つた文化は、そ



第 11 圖 歐羅巴の民族分布

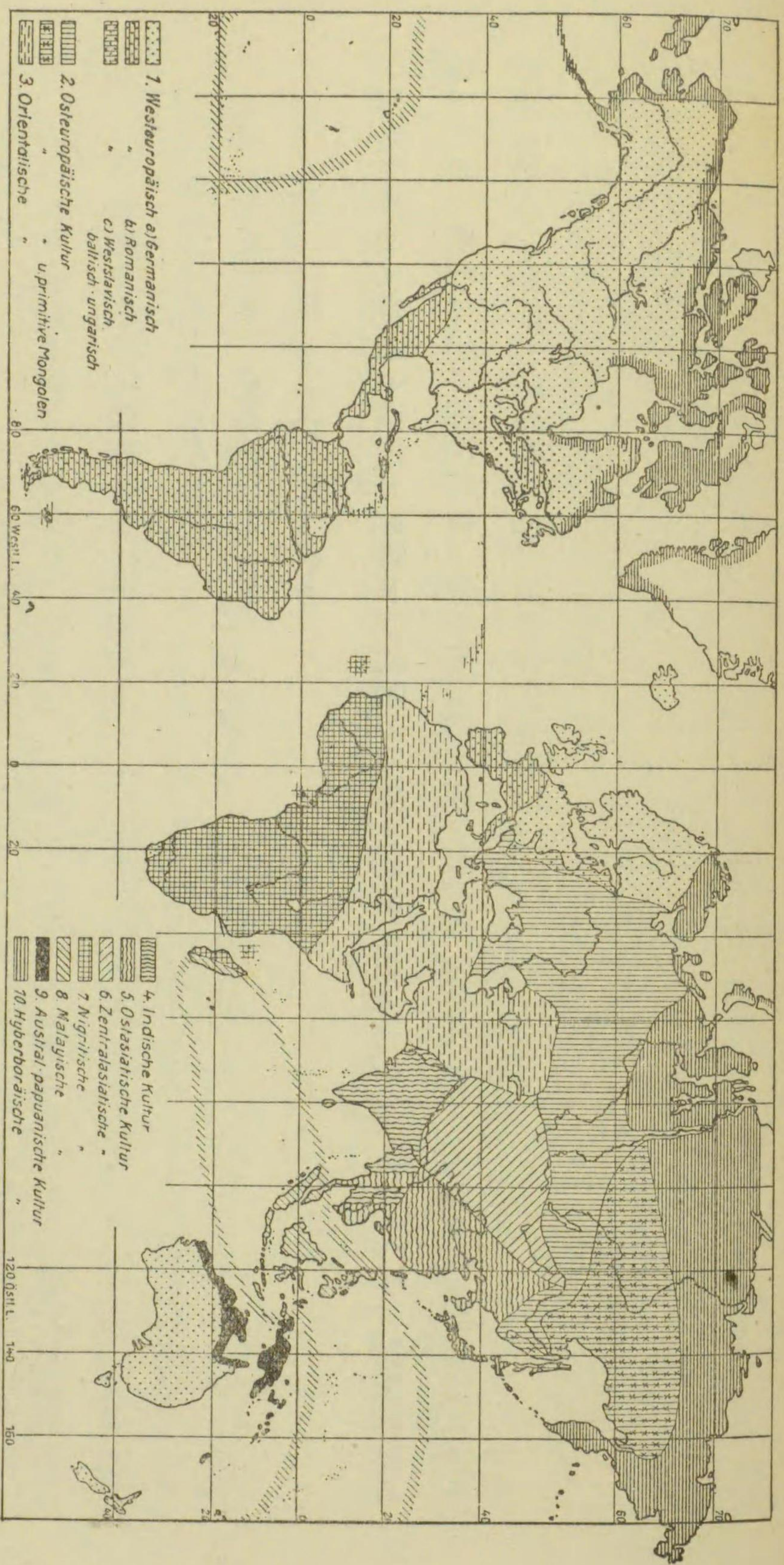
の發展の過程に於て、それ自體の成長力に育てらるゝ方面を有して居つて、その過程に於ける文化は地理學に屬せず、夫々の文化科學に於けるものである。然し、かかる文化も、明かに意志の自由を以て、空間を統一する作用を有する。かかる文化の統一力を自然空間に關與せしめて考察することは、實に地理學の任務である。民族の精神的傾向でも、結局は、從前の環境——尙、今日作用しつゝある惰性環境——の物質的外圍に歸屬せしむることが出来る。かくて、經濟地理學が、取扱ひ得るところのものは、特殊的物質的側面から考察する文化の研究であり、如何なる方法に於て、文化傾向か、或は文化力かが、自然空間に於て、經濟的に表現されてゐるかの検討である。即ち、經濟效果の形式に於けるこの表現は、その機能に於て、經濟表面として、或は、經濟機關として、空間的に把握することが出来る。故に、もし、文化階梯が、かくのごときものとして狹義に理解さるゝならば、文化階梯は、經濟階梯の基礎となるものである。

註一 綿貫勇彦 地理學に於ける文化の意味 地理學評論 昭和五年四月 六四頁

### 一 文化階梯

文化階梯は、精神的側面から、經濟階梯は物質的側面から考察さるゝのであるが、この兩者

の間には、明確なる限界は定め難い。然し、經濟地理學の見地に於て、かのブレンタノ (Brentano) の提唱——即ち、經濟的に可能であるところのもののみが、たゞ、可能であつて、現經濟人と自然とが調和するところに於てのみ、經濟的可能がある——と云つてゐることは、實に至言であつて、「文化が移動すれば、他の自然はこれを迎へる準備をなしてゐる」。即ち、經濟空間は、常に經濟意欲の統一性を期待して居り、兩者の一致するところに於て、その空間は、經濟力を出すのである。故に經濟意欲をもつ現經濟人と空間とが調和するところに於てのみ、確たる物質的文化をみることが出来る。而して、この文化は、あらゆる要素の結合したもので、單に、文化の個々の要素を檢したからと云つて、その地方の文化の本質を把握することは困難である。故に、地球上のあらゆる人間をその地方に於ける文化の所産として、或は支持者として、考察すれば、大凡、該當地域の文化を理解することが出来る。蓋し、それは、人間が、あらゆる經濟的意欲とあらゆる自然的經濟要素との結合した極めて複雑なる綜合的本質と見做されるからである。即ち、外界に極めて鋭敏な植物を以て、その地域の氣候を推定する如く、も環境の所産である人間を以て、その地の物質文化を判定するものである。かくのごとき考察のもとに於てこそ、あらゆる文化群——即ち、民族群の多方面への發展も理解さるるのであつて、



第 12 圖 地球上の文化の分布

- 1. 西歐文化
  - a. ゲルマン文化
  - b. ローマ文化
  - c. 西スラフ・バルト文化
- 2. 東歐文化
- 3. 近東文化
- 4. 印度文化
- 5. 東アジア文化
- 6. 中央アジア文化
- 7. ニグリト文化
- 8. マライ文化
- 9. 濠洲・パプア文化
- 10. 極北文化

今日、最低級から最高級に至る文化群の發展は、或は急激に、或は緩漫に、或は停滯の過程を辿つて來たのである。かくて現状の文化群が構成されたのである。而してかかる民族單位による文化群の分類以外に人種、宗教、教育、國家などによる種々な分類法のあることは勿論で、サッバーは文化的文化から分類してゐる(一二圖)。これらの分類は別として、茲には敘述の方法による分類を次の三階梯に於て考察する。

- 一、自然民族——Naturvölker
- 二、半文化民族——Halbkulturvölker
- 三、全文化民族——Vollkulturvölker

自然民族<sup>(一)</sup>は、意識の制約と個體及び總體の傳説・神話に對する依存とによつて、特徴づけられてゐる。而して、この民族は、尙不定自然民族(mustete Naturvölker)と固有自然民族(eigentliche Naturvölker)とに分けられ、前者の代表者は

- 一、フィリッピン<sup>(三)</sup>のエータ(Aëta)
- 二、スマトラのクブ(Kubu)
- 三、セイロンのウエッタ<sup>(四)</sup>(Wedda)
- 四、アングマネンのミンコピエ(Minkopie)
- 五、アフリカのブッシュマン(Bushmänner)
- 六、南米のフォイアレンダー(Fuefjänder)

南米のボトクード<sup>(五)</sup>(Botokuden)

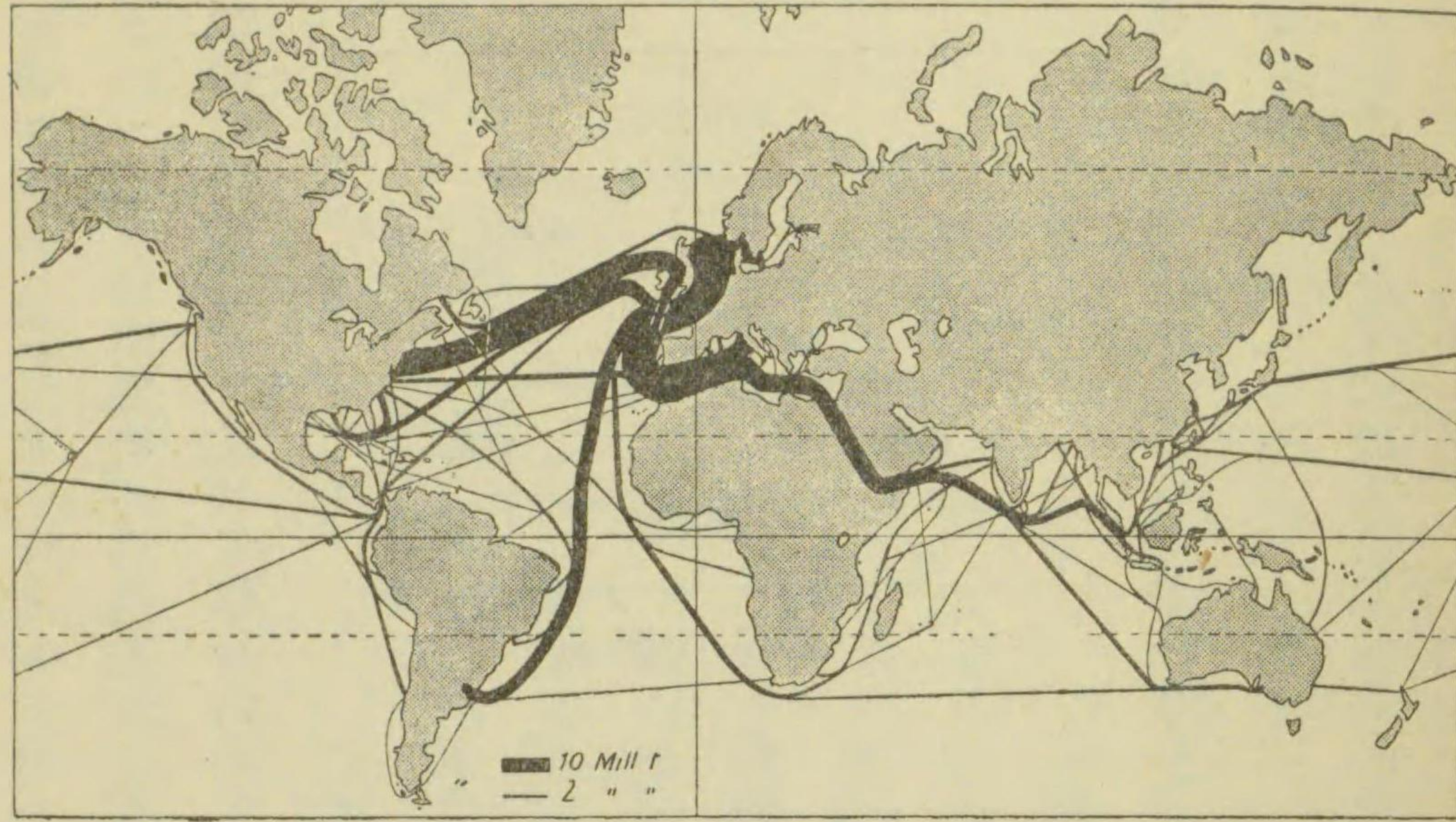
などの所謂、オーストラリヤ族(Australier)で、最低の文化を有し、その居住は、原始的小屋で、一切の經濟的道具や家畜などは所有してゐない。これに對して、後者の固有自然民族は、一部のオーストラリヤ族、寒帯民族、コーカサス民族、印度山間民族、南スダンの黒人、島嶼民族などで、彼等は、社會的には血族及び種屬によつて組織せられ、經濟的には狩獵、漁獵、牧畜及び原始的耕作形態の攪土(Bodenauflöckerung)などによつて結合されてゐる。

註一 綿貫勇彦、前掲、六四頁。

註二 デイートリツヒは、自然民族を、不定自然民族と固有自然民族とに分類したが、リユットゲンスなどは、自然民族の前提に原始民族を置いてゐる。故にデイートリツヒの不定自然民族は寧ろ、原始民族とし、固有自然民族は之を自然民族とする方が適當であるやうに思はれる。かくするときば原始民族、自然民族、半文化民族、全文化民族の四階梯に分けらるる。

註三 エータ(Aëta)は、フィリッピン群島に分布する黒色縮毛の小人であつて、それは、タガログの ita, itim ユンル語の yton から起る黒の意である。(松村瞭 地名と人種名 山崎直方博士記念論文集 地理學評論 昭和五年七月 三三八頁)

註四 ウエッタは、セイロンの東部森林に居住する最も古い住民で、狩獵を業として定住せず、膚色は黒く、身長は低い。これらもと印度の南部から、この地へ逐はれたものであらう。一九二一年の調査では、四五〇人である。(河田四



第14圖 大西洋文明時代

更に、半文化民族は、自然民族と全文化民族との中間形式のもので、經濟的領域に於ては、全文化民族に近づき、精神的・習慣的領域に於ては、自然民族と尙強い接觸を示してゐる。この民族も

一、遊牧的半文化民族——nomadische Halbkulturvölker  
 二、定住的半文化民族——sesshafte Halbkulturvölker

の二つに分けらるゝが、前者はその分布が舊世界に限られてゐる。この偏頗的空間分布は、コロンブス以前



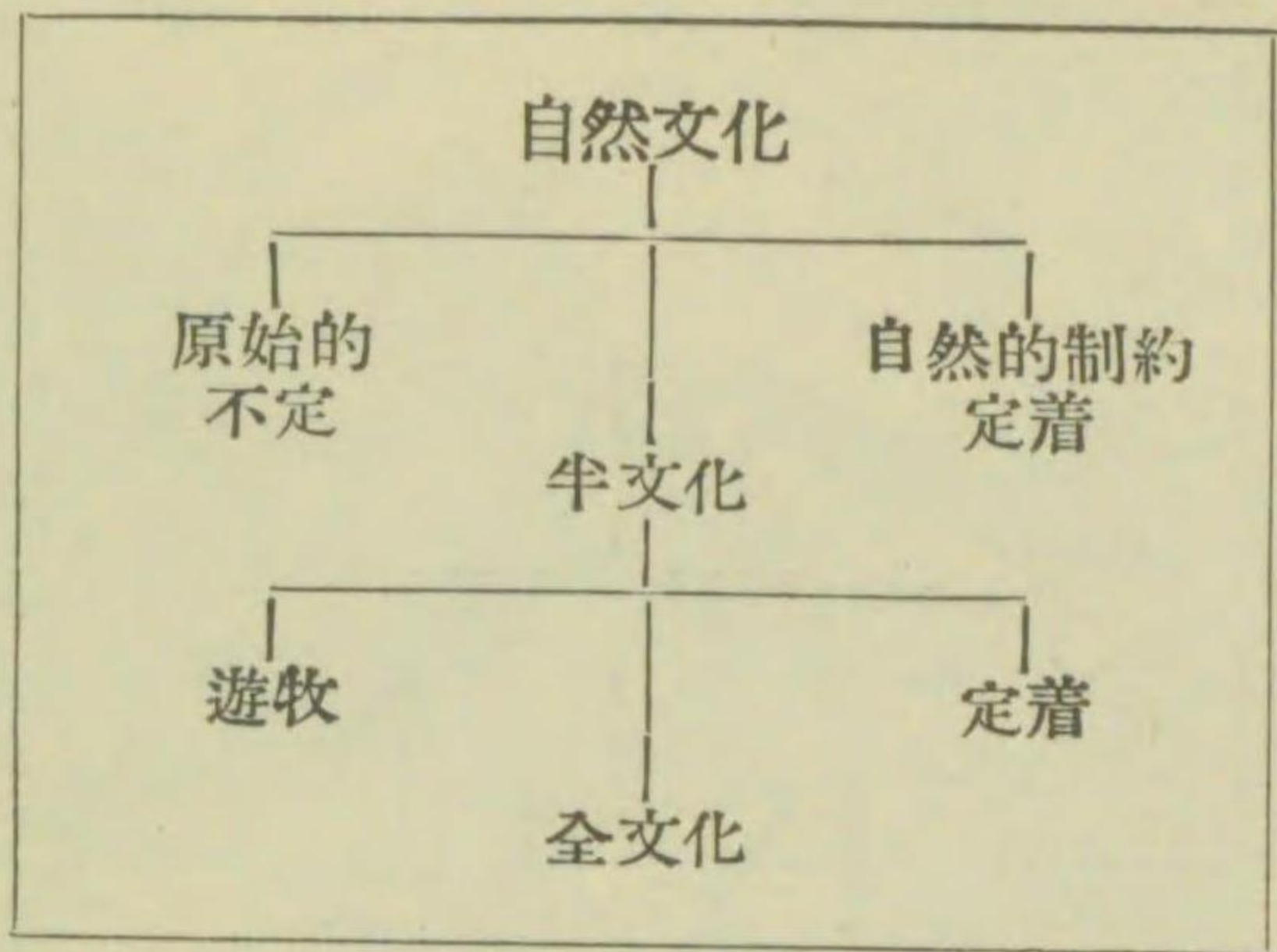
第13圖 アジアの民族分布

- I) 太古アジア人 II) エスキモ III) モンゴール IV) 印度支那族  
 V) オーストラリア族 VI) ドラヴィダ VII) 印度ゲルマン VIII) セム族  
 IX) コーカサス民族 X) 印度オーストラリア原始民族
- 1) エローテ (Eläuten) 2) タタル (Tataren) 3) ムンダ (Munda) コール (Khol) 4) ウエッダ (Wedda) 5) モン (Mon) 6) セマンダ (Semang)  
 7) クブ (Kubu) 8) エータ (Äëta)

郎 經濟地域としてのセイロン 地理學評論 昭和五年四月 七八頁。

註五 ボトクード (Botocudo、自稱は Nac-manik 土地の人の意) は、ブラジルの東部地方に住する原始的の一族で、ポルトガル語 botouque (栓) から起る。蓋し、彼等には、耳垂及び口唇に、一種の木製栓形態裝飾品を嵌入する風習があるからである。(松村瞭 前掲 三三八頁)

の新世界に、廣い放畜が行はれなかつたことに基因してゐるので、これがために、舊世界のステップ及び沙漠地帯の大空間が、遊牧民族の居住空間及び經濟空間となつたのである。彼等の精神的高度は、自然的氣候の苛酷に對する鬭争と、他民族に對する鬭争とのエネルギーのなかに

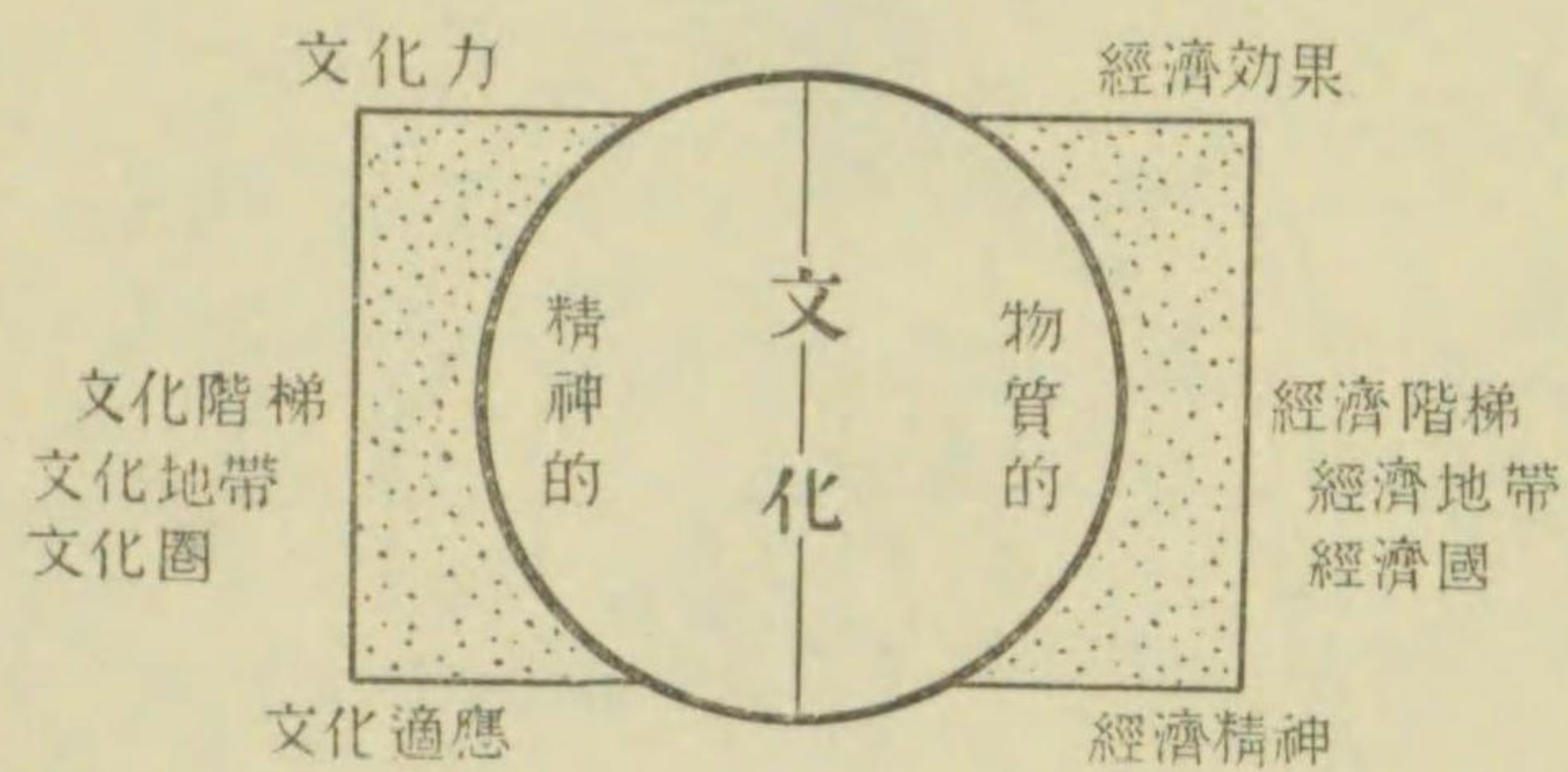


文化の圖式

に求むることが出来るし、又、彼等の經濟的能力は、駱駝や馬のごとき家獸の利用性の中に求むることが出来る。これに對して、後者の定住的半文化民族は、中央及び南アメリカのアンデスの山間、アフリカの沙漠の周縁、アナトリア、ペルシア、季節風亞細亞などに分布し、その民族の特徴とするところは、物質的文化の一方的征服に存して居り、徐々に文化民族に接近しつつある。然し、權力的精神の強烈なものと、慣習の領域に於て尙、非理想的主義によつてゐることなどの爲めに、全文化民族から區別されてゐる。のみならず、彼等の經濟取引の本質的動機は、生活を支配するエゴイズムから出發してゐるのである。

最後に、全文化民族は、北及び西歐羅巴のゲルマン民族、ローマ民族、北アフリカ及び南・

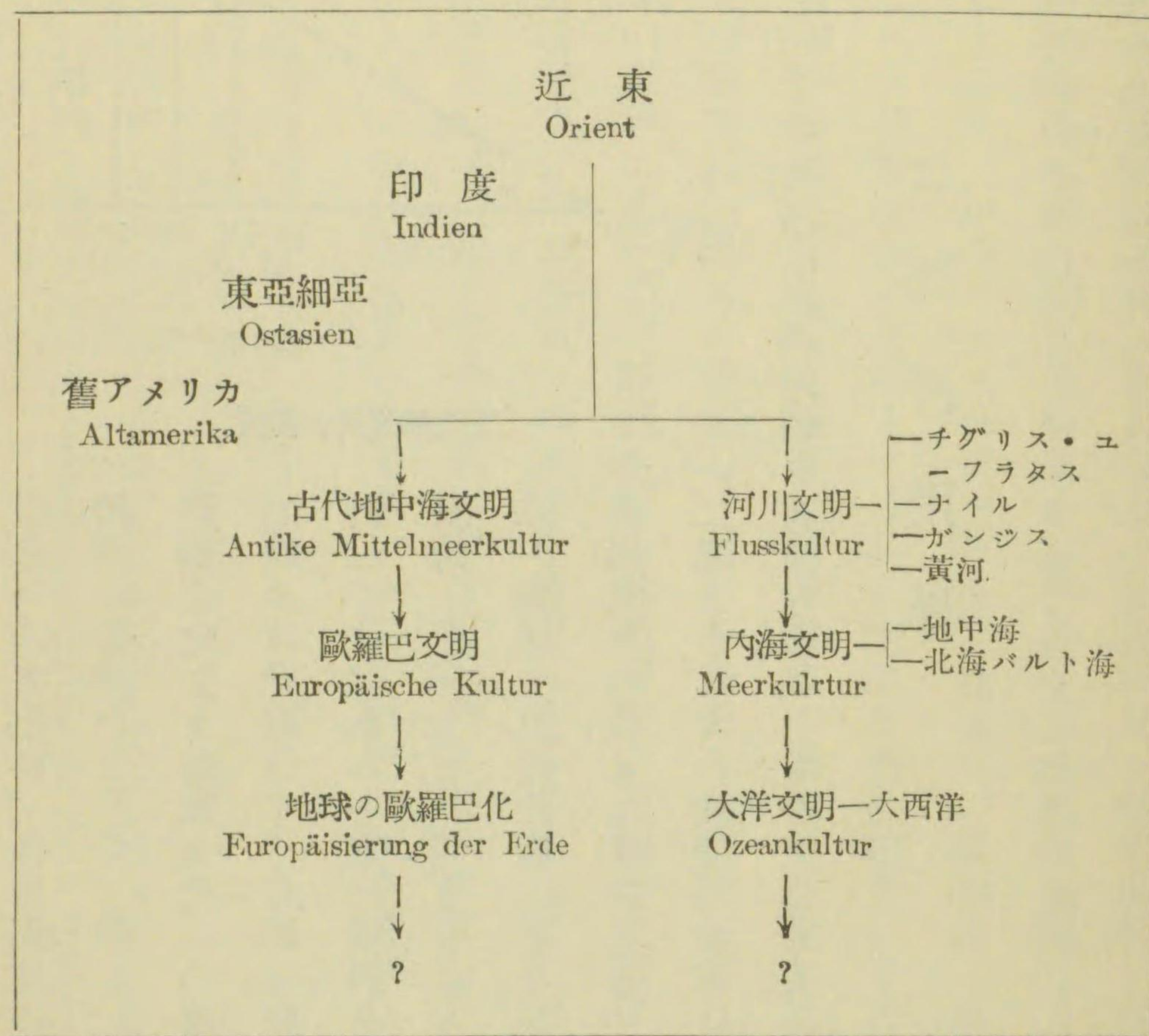
北アメリカの白人系、新日本人などで、その特徴とするところは、自由なる人格、創造力、批判力などをもつてゐることである。



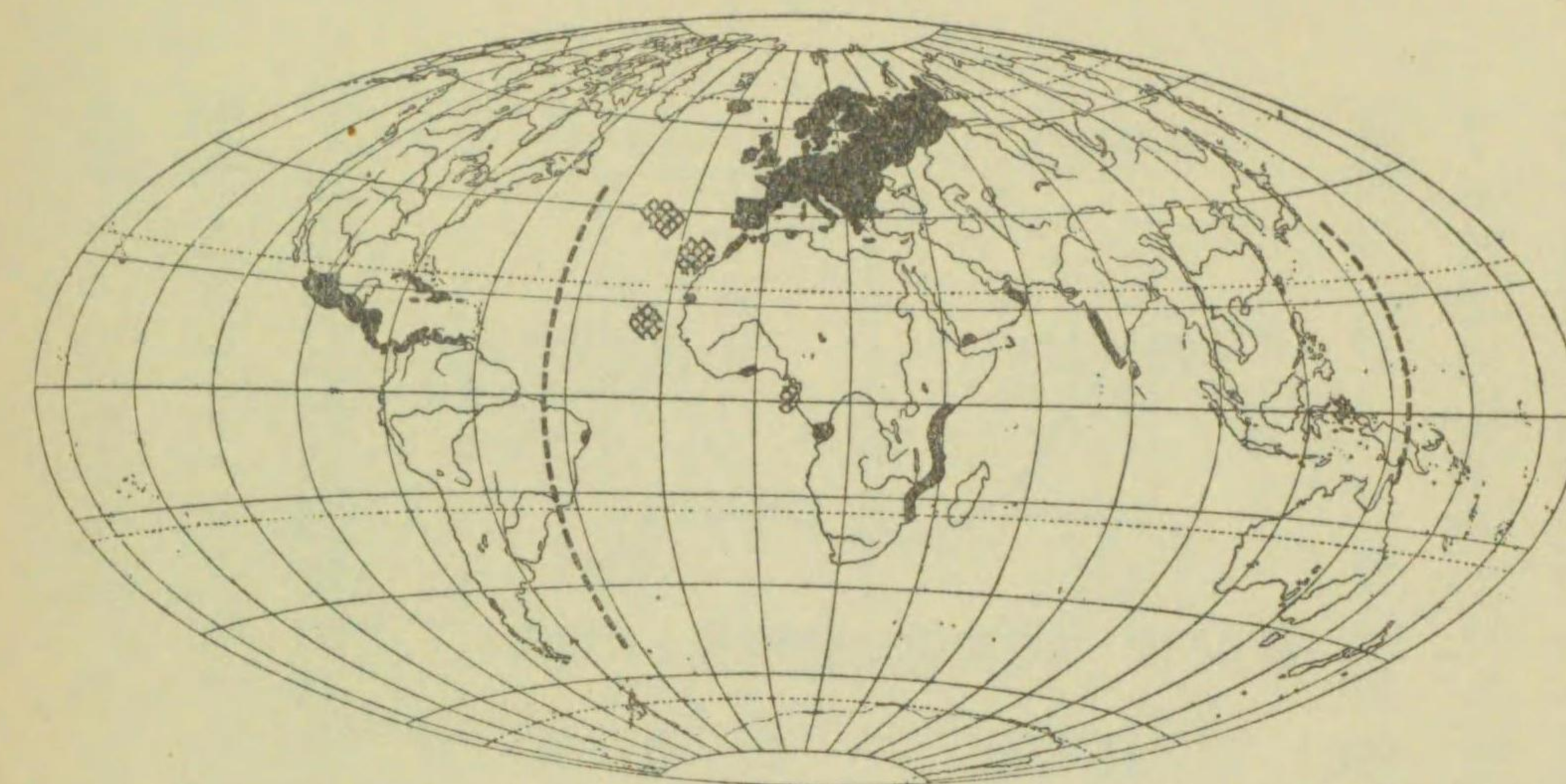
第 15 圖 文化階梯と經濟階梯との關係

以上の三民族階梯の外に、尙こゝに混合文化民族 (Mischkulturvölker) なるものがある。それは、云ふまでもなく、高・低兩文化の混合したもので、混合の特徴は文化の物質的方面を可及的多く吸収して、精神的方面をより少なく取り入れてゐる所にある。東歐羅巴全體、中央及び南アメリカは、全くこの混合文化民族の居住空間である。

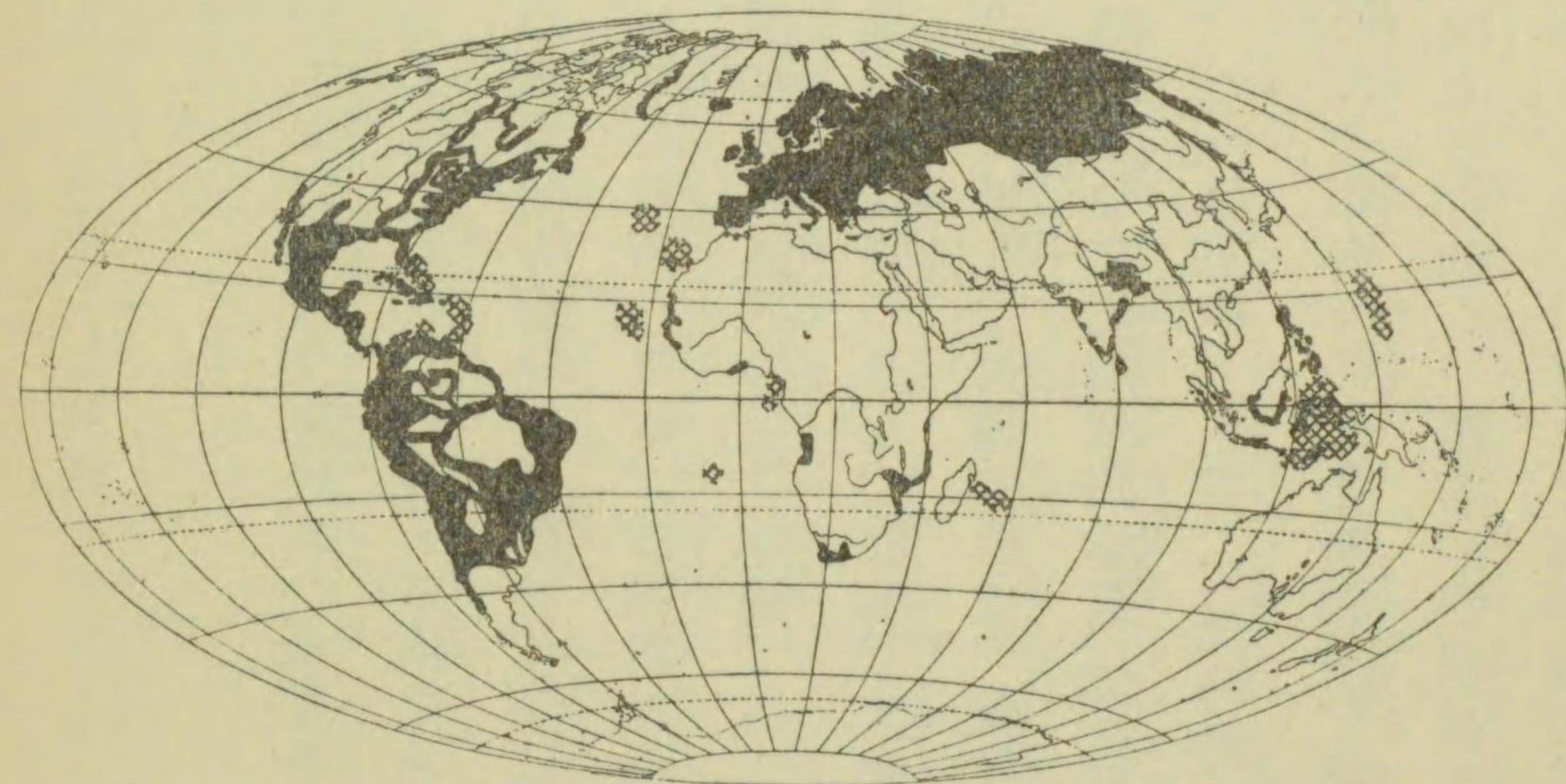
敘述の各民族の分布、即ち、文化階梯の分布は、地球上に於て地帯を形成して居り、大體に於て、氣候帯の分布と一致してゐる。それ故に、地球上に文化地理的赤道 (kulturgeographischer Äquator) を假定して、これを基準として、文化階梯の分布を検査することが出来る。と、同時に、その各々の文化階梯が、氣候と土地との要素から如何に制約されてゐるかを究むることが出来る。即ち、溫帯の空間は、高級な全文化への建設を促し、沙漠や草原の地帯は、半文化の分布を許し、更に、南半球の熱帯や島嶼は、原始文化を湛へ、そ



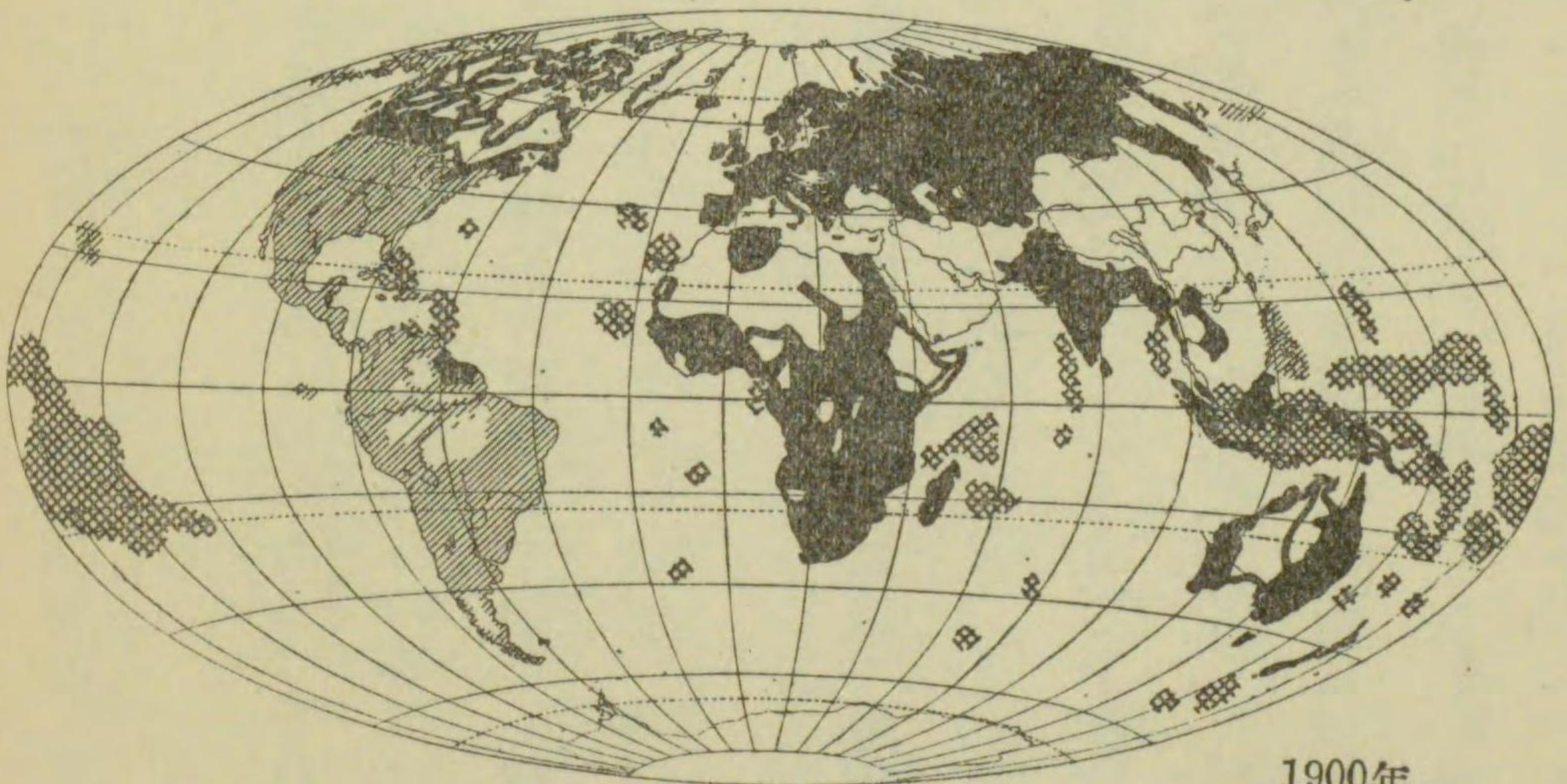
全文化圏の移動



1529年

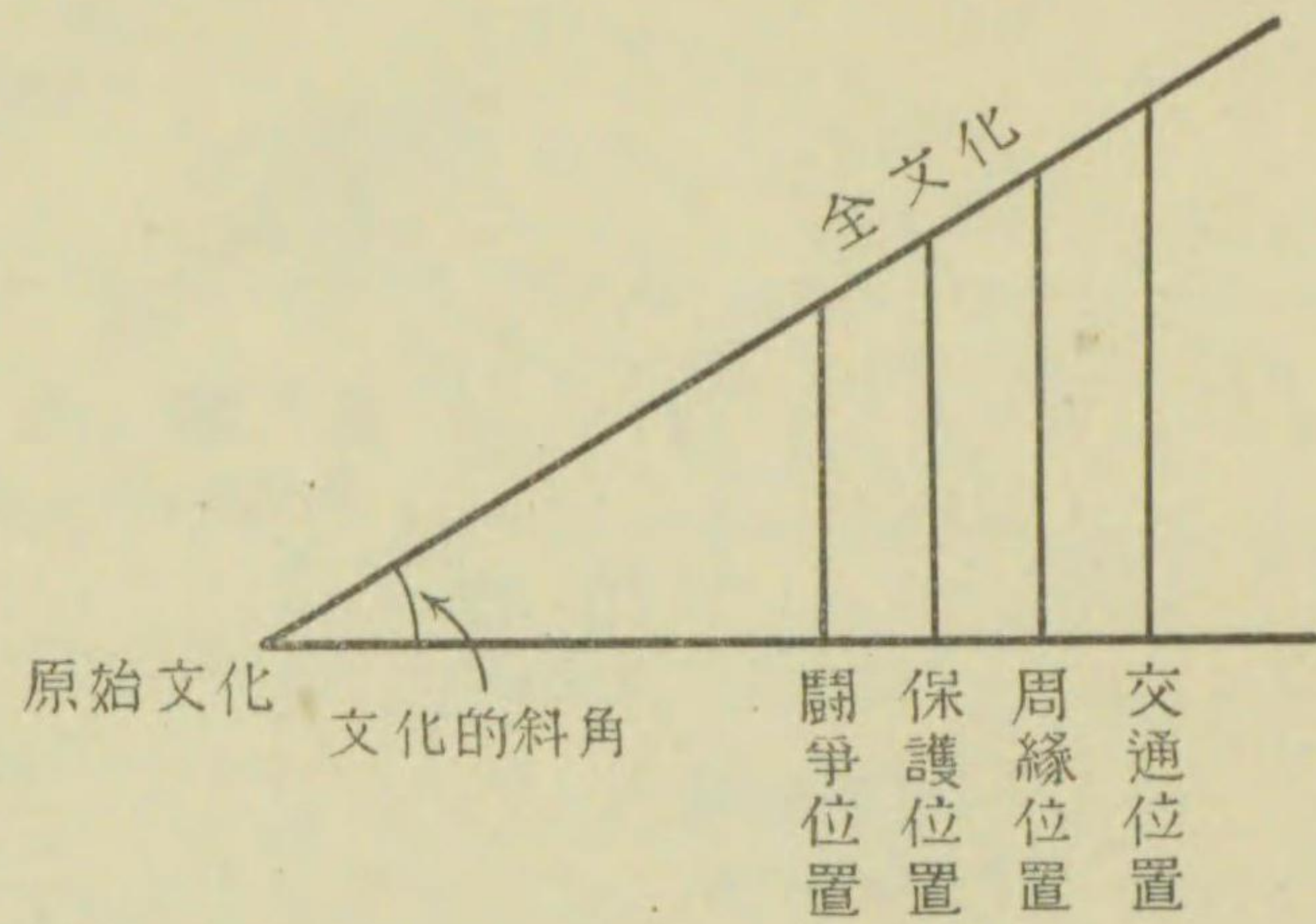


1783年



1900年

第16圖 地球の歐羅巴化



文化的斜角の構成

の各々の文化は、各自獨特の色彩を以て、これに相應する經濟階梯の基礎をなして、廣く、地球上に分布してゐる。而して、原始文化より高級文化への道は、全く自然的制約の軌道を行つてゐるのであつて、有利な自然的條件の總和である高級文化に對しては、ある一定の傾斜をなしてゐる。我々はこれを文化的斜角 (kultureller Böschungswinkel) と呼ぶ。而して、鬭争・周縁・保護・交通位置 (Kampf-, Rand-, schutz- u. Verkehrsstage) が高級文化に對する基柱となつてゐるが故に、その文化的斜角は、一に以てこれらの位置の如何に依倚してゐるのである。かくの如くして、文化階梯は經濟階梯と密接な關係をもつてゐるものである。

## 二 經濟階梯

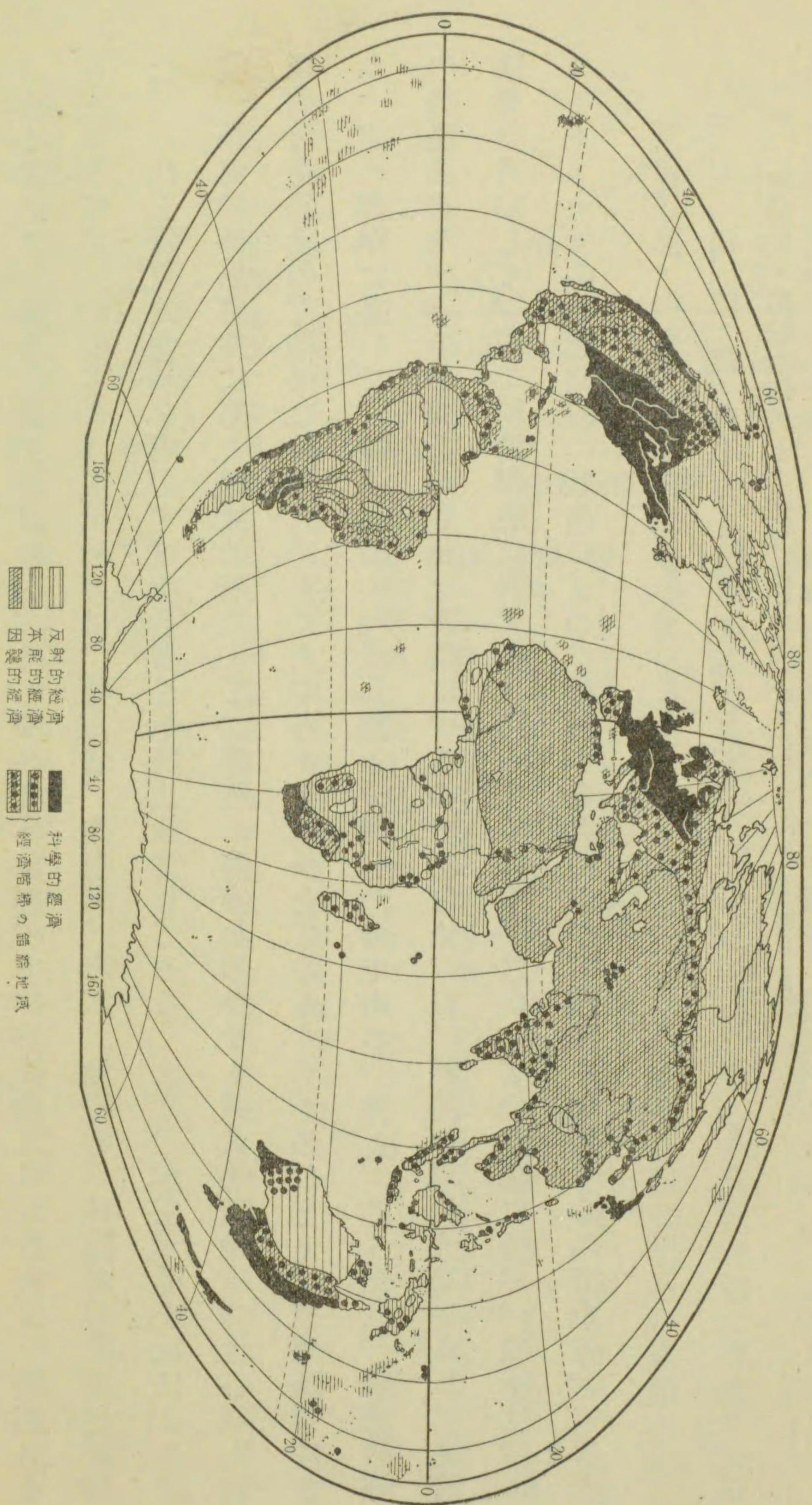
經濟階梯の發達に關しては從來、屢々多くの學説が提唱されて來たが、それは經濟の概念によつて多角的な階梯を作りあげたのである。フリードリッヒによれば、「經濟は生産、消費、商業、

交通を概念するが故に、經濟階梯は生産階梯、消費階梯、商業階梯、交通階梯に分けらるる」<sup>(一)</sup>となしてゐる。即ち、經濟階梯は、「ある一定の標準に従つて經濟組織又は經濟秩序を類別せんとするもので、かのアリストテレスは、牧畜者、農耕者、海賊、漁撈者、狩獵者の生活を區別し、これと貨幣的營利を事とする生活者とを對比論究してゐる」<sup>(二)</sup>。また、本庄、黒正氏によれば「(一)個別的外形事實に基く機械的階段 (二)諸種の要素を綜合せる圖表的階段 (三)心理化的經濟發達階段の三階梯に分類し、更にその各々を細分してゐる。かくのごとく、經濟階梯はある一定の標準に基いて、經濟生活の現象形態を分類したのである。然し、こゝでは、經濟階梯の發達過程及びその學問上の意義を明確にするのではなく、只、經濟地理的立場からみた經濟階梯を考察して、以て經濟形態に對する入門とするにすぎない。この意味に於て、我々は、フリードリッヒの自然克服の状態によつて分類する次の四つの階梯を採用するのである」<sup>(四)</sup>。

- 一、反射的經濟——reflexive Wirtschaft
- 二、本能的經濟——instinktive Wirtschaft
- 三、因襲的・傳統的經濟——herkömmlich-traditionelle Wirtschaft
- 四、科學的・技術的經濟——wissenschaftlich-technische Wirtschaft



世界の經濟階梯



第 17 圖

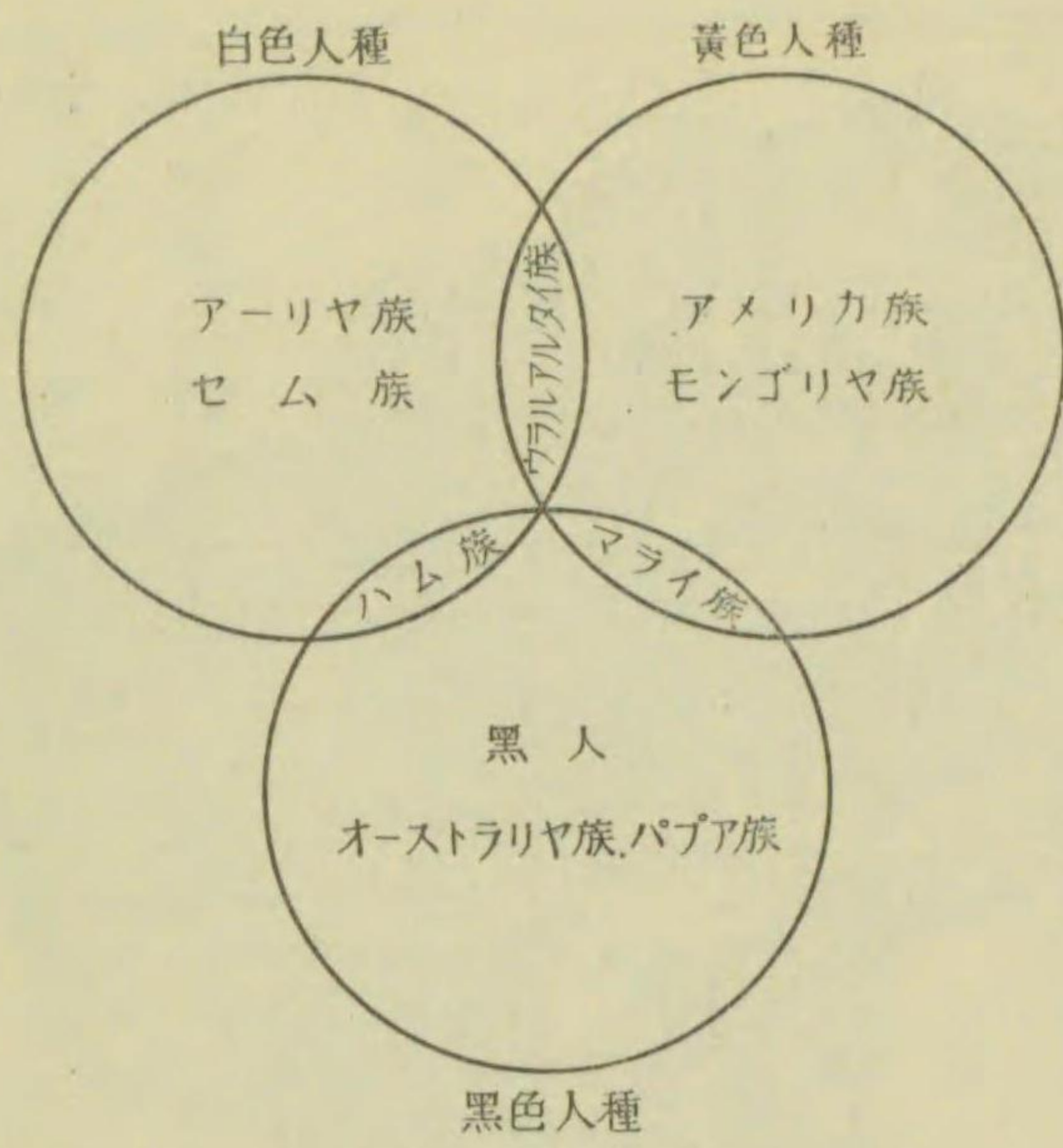
フリードリッヒに従へば、反射的經濟は、また動物的經濟 (tierische Wirtschaft) とも稱せられ、最低の經濟階梯である。あらゆる經濟的行動は本質的に、空腹、疲勞、寒冷……の上に反射されるものにすぎない。もし空腹を感じれば、眼前に存在する果實、根、蟲、蝸牛を採集して、これを食ひ盡し、「自然の支配のまゝに生活して」、その慾望充足は、完全に自然に依存してゐる。たゞ、より高い階梯への漸移にあるものにとつては、最簡單な保護的仕事道具、寒冷保護の準備、火の使用などを、徐々に始めてゐる。この動物的經濟階梯にぞくするものは、オーストラリア族、タスマニヤ人、ミンコピー人(アンダマーネン)、ウエツダ人(セイロン)、エータ人(フィリッピン)、クブ人(スマトラ)、セレベス及びニューギネヤの内地土人、ブッシュマン、サハラ<sup>(五)</sup>の狩獵者、シリア沙漠のスレブ人(Shab)、中央及び南アフリカの矮人種、南米のフォイアレンダー及びボトクード人などであつて、稍進歩した漸移階梯にあるものは、オーストラリア族とブッシュマンとである。

註一 フリードリッヒは、經濟階梯を生産・消費・商業・交通の四階梯に分類し、その各々、また四つに細分し、例へば因襲的・傳統的經濟をみるに次のごとく例證してゐる。

(一) 因襲的・傳統的經濟の生産階梯



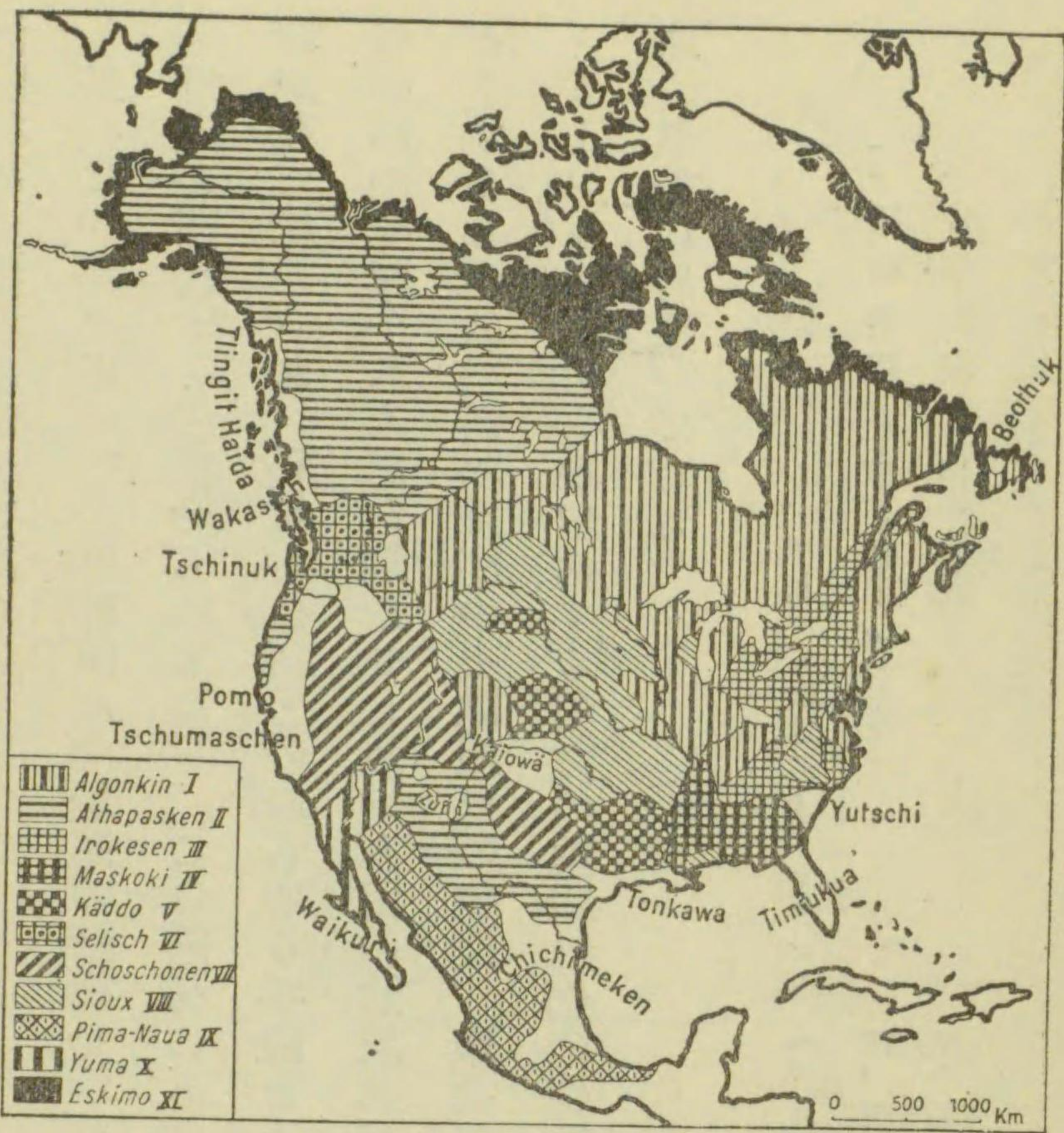
更に、因襲的・傳統的經濟は、場所と時間、量と質とに従つて、經驗の基礎に於て慾望充足を行ひ、また、自然の壓迫に、ある程度まで、抵抗しようとする地位にあるものである。即ち、經濟的本能の不確實な肉體的に遺傳された財貨(富)の上に、時代から時代へと、より大なる經驗内容が、貯積され、附與され、徐々に増加したのである。それ故に、一般的文化の進歩との關聯に於て、この經濟階梯には力強い經濟的進歩をみることが出来る。また、少しく進歩した階梯には、灌漑をもつた集約的勞働、金屬の獲得と利用、勞働分業、工業と商業と交通との發達などが觀察されるのである。半文化民族と舊文化民族との大部分は、この階梯の上にあつて、



第 19 圖 世界の人種

つゝある。これに屬するものは、舊世界のステップ及び沙漠地帯に動物飼養に従事してゐる諸民族——アラビア人、トルコ人、ペルシア人、キルジス人、モンゴール人——を始めとして、右地帯の定着的沃地住民たるベルベル族、フェラッヘン (Fellachen) など、及び東南アジアと

東アジアとの農業民族たる印度人、支那人、古代日本人などが列擧されてゐる。また、現今は



第 20 圖 北アメリカの民族分布

- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| I) アルゴンキン  | II) アタパスケ  | III) イロケーゼ |
| IV) マスコキ   | V) ケツド     | VI) セリッシ   |
| VII) ショショネ | VIII) シウクス | IX) ピマナウア  |
| X) ユマ      | XI) エスキモ   |            |

南部の大部分、バレアール、コルシカ、サルジニア、伊太利南部、シシリー、ボスニア、ヘル

ゼゴビナ、バルカン半島の大部分、ルーマニア、ハンガリー、東歐羅巴などの地域が、この經濟階梯の支持者となつてゐる。

最後に、科學的・技術的經濟は、最高の階梯を示すもので、フリードリッヒによつて、「合理的意識の經濟」<sup>(三)</sup>とも稱せられてゐる。この階梯にあつては、自然的壓迫に對して、すべての經驗が蒐集統一され、科學と技術とのあらゆる手段を以て意識的に、計劃的に、合理的に、自然の強制的支配から人間を解放せしめ、人間の慾望充足に努力するところのものである。これにぞくするものは、西北及び中央歐羅巴の住民、南北アメリカと南アフリカとニュージールランドとオーストラリアとを包括する地方の歐羅巴化の住民、新日本人などでこれ等は、何れも兩半球の溫帯に居住してゐる。

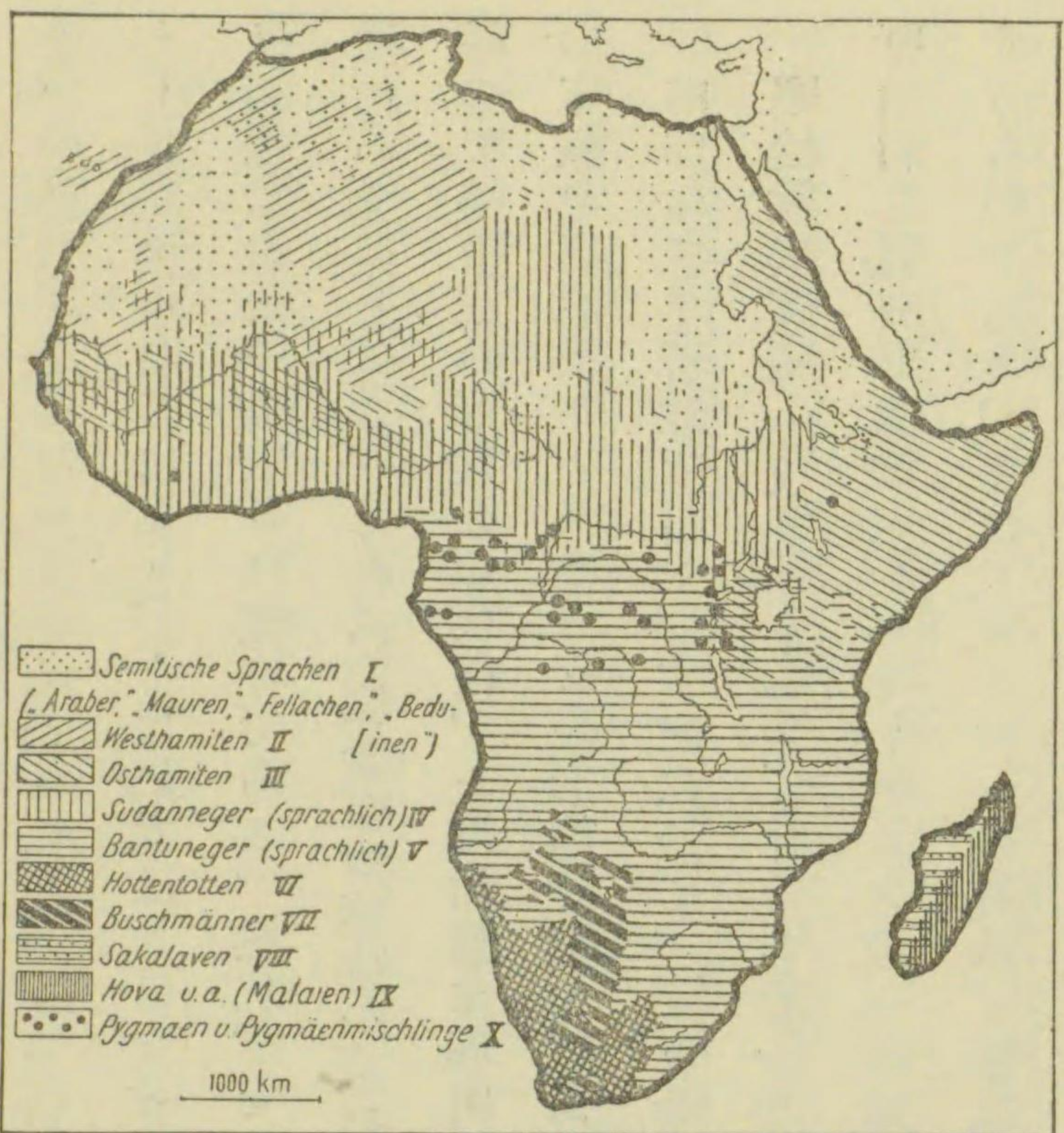
註一 リュットゲンスはヘットナー及びフイーヤカント (Vierkant) によつて、次の文化階梯を採用してゐる。

- 一、原始民族——Primitive Völker
  - 二、自然民族——Naturvölker
  - 三、半文化民族——Halbkulturvölker
  - 四、舊文化民族——Altkulturvölker
  - 五、高級文化民族——Hochkulturvölker
- 註二 フェラッヘンは人種名で、アラビア語で農夫 (Banam) を意味してゐる。  
E. Banse's Lexikon der Geographie. Hamburg 1923, S. 427.

註三 R. Litgens a. a. O., S. 163.

### 三 經濟形態

經濟形態は、經濟階梯と同じく、「種々の立場から觀察することが出来るのであつて、或は生産形態の方面から、或は消費



第 21 圖 アフリカの民族・言語分布  
I) セム語(アラビア人, マウレン人, フラッヘン人, ベドウィーン人 II) 西ハム族 III) 東ハム族 VI) スダン黑人 V) バンツ黑人 VI) ホツテントット VII) アツシュマン VIII) サカラヴァ IX) ホヴァ X) ピグメとその雜種

形態の方面から、或は消費形態、分配形態の方面から見ることが出来る。が普通に經濟形態と云ふ場合には、主として生産形態を意味する<sup>(一)</sup>のである。従つて、この經濟形態にも、種々な分類法が行はれ、既に先人のラツチェルを始めとして、フイーアカント (Vierkant)、シホルツ (Schul-

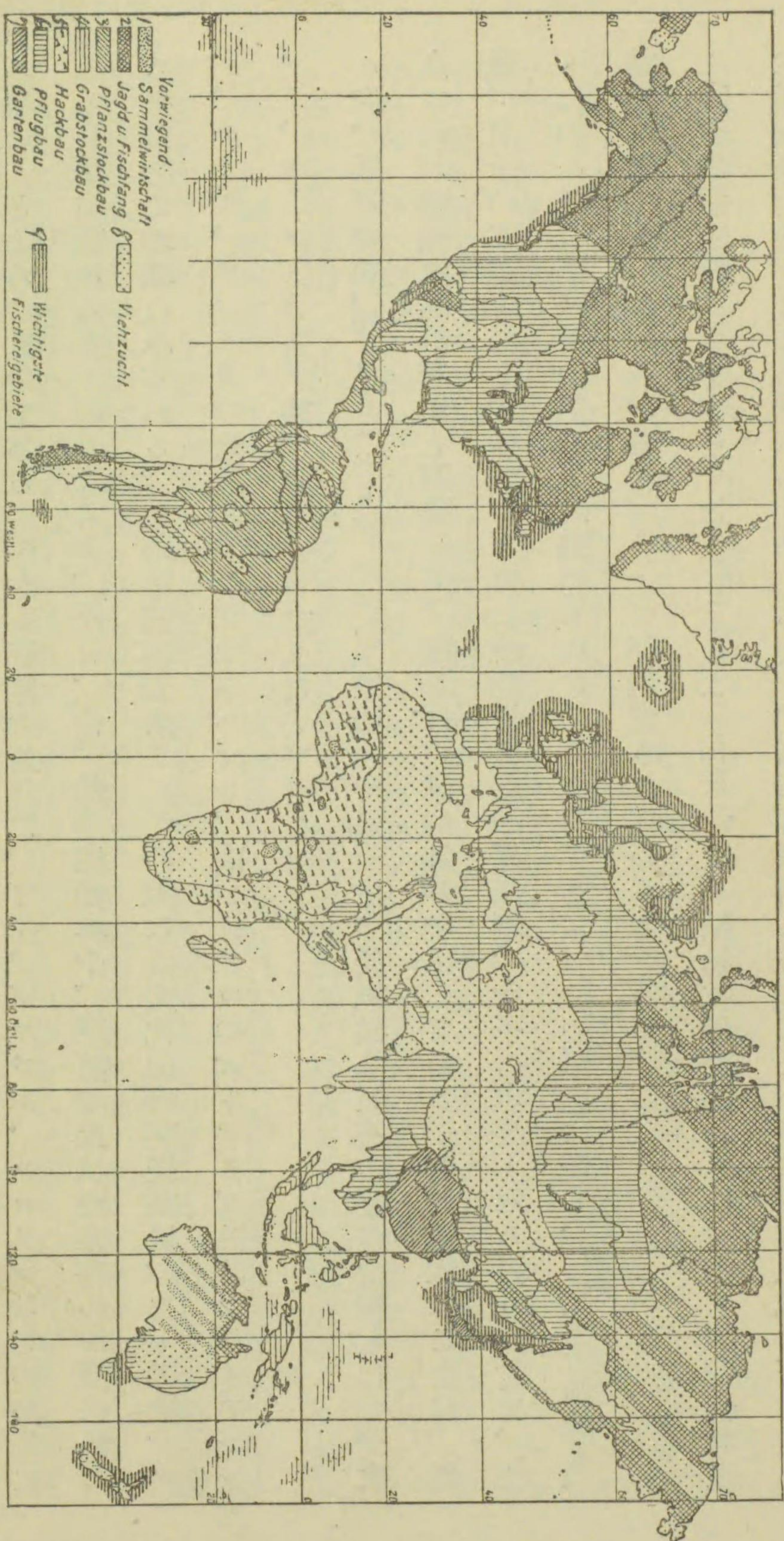
Hals)の外に、有名なハーン<sup>(二)</sup>(E. Hahn)、ロッパース(Koppers)、シュミット、ヘットナー、フリードリッヒなどにより、また最近はクラウゼ(F. Krause)及びディートリッヒによつて、各自獨特な主張が提唱されたのである。然し、その形態に於て名前と取扱法との上に、多少の相違があるにしても、それは、原始經濟形態から最高經濟形態に至るまでの發達階梯にすぎない。従つて各權威の形態分類には、それ相應な理由が認めらるゝが、筆者は、こゝでは多くの先人の文獻を以てティートリッヒの形態分類を採用することにす。それは、この形態分類が、その内容に於て精緻であり、方法に於て、より合理的であると思惟さるゝからである。

**原始收得經濟** (primitive Aneignungswirtschaft) は低級採集者と狩獵者とから構成さるゝ最も原始的な經濟形態で、リュットゲンスの「原始採集經濟」<sup>(三)</sup>(Primitive Sammelwirtschaft)に相當するものであり、また、ズーバンの所謂「採集經濟」<sup>(四)</sup>に相應するものである。即ち、接近し難き熱帯原始林地域に居住する最も原始的な、簡単な、低級な經濟階梯にある人間からのみ作られてゐるもので食慾を満足せしむる採集のみを目的とするものである。従つてこの原始收得經濟の本質と、その該當地域の自然とは、廣大な地表面に於ける人間群の小さい、しかも、完全に不定な流浪生活に基礎づけられて居り、また所有に於ける缺乏、過度に稀疎な人口密度、社

交機關の皆無などに條件づけられてゐる。故に、彼等の生活は、果實<sup>(五)</sup>、根、球莖<sup>(六)</sup>、小動物を採集し、自ら採し得て食ひ得るものは悉く、選擇なく口に運ぶところ生活のみで、「動物から區別し難い」<sup>(七)</sup>ところのものである。かかる形態の遺蹟は、丁抹、ブラジル、フロリダなどの海岸にある貝塚に認めらるゝのみならず、今日、尙、熱帯原始林や、亞熱帯及び亞寒帯の沙漠に於ける分離化の地域にみられる。この形態代表者としての主なる文化的殘存民族は、ウエツダ、クブ、エータ、アフリカの矮人族及びブッシュマン、南アメリカのポトクード及びフォイアレンダー、オーストラリア族、タスマニア人などである。

尙、低級狩獵、即ちリュットゲンスの「原始的狩獵」<sup>(八)</sup>は、低級採集經濟の發達段階として、改良された狩獵道具の利用と關聯して、確かに經濟的進歩を示してゐる。特に重大なことは、狩獵が男子の本職となり、採集——殊に植物性食料の採集が、女子の本分となる限りに於て、こゝに初めて勞働分業の第一光が點せられたのである。また、この形態に於て、その收得地域も、前より深くない森林及び森林ステップが選定されてゐるのである。

**高度收得經濟** (gesteigerte Aneignungswirtschaft) は、原始收得經濟よりは、動・植物性物質の獲得所有を、より富豊ならしめたもので、高級採集者と狩獵者との外に、尙漁獵者が附隨し



第 22 圖 經濟形態の分布

1. 採集經濟  
2. 狩獵・漁獵  
3. 木樵採  
4. 大鋤耕  
5. マット耕  
6. 農耕  
7. 放畜  
8. 主要漁場  
9. 主要漁場

てゐる。この高度取得經濟はリュットゲンスの「高度採集經濟」で、勞働分業が、より顯著にあ  
 らはれてゐる。そして、この經濟形態は、動・植物性食料の富源が、經濟的・生活的可能性を  
 許す様な卓越地域に、強く發展したのであつて、その經濟階梯は、本能的經濟であるが、屢々因  
 襲的・傳統的のものもある。既に、多様な道具も使用され、勞働・社會制度も益々發達し、貯蓄  
 も行はれ、保有装置ですら行はれたのである。即ち、インディアンの乾燥肉、エスキモーの水  
 結肉、カリフォルニア人の櫛質及び果實からの耐久品などは、これを證明してゐる。要するに、  
 この形態は、不定な流浪の代りに、自然的生産物の場所的並に時間的利用性を特徴としてゐる  
 のである。エスキモーを始めとして、インディアンの如き草原狩獵者がこれにぞくしてゐる。

註一 本庄榮治郎 黒正巖 前掲 六〇頁

註二 E. Hahn: Die Wirtschaftsformen der Erde. Pet. Mitt. 1892, S. 8, mit Karte auf Taf. 2.

註三 R. Litgens: a. a. O., S. 164.

註四 A. Sapan: Leitlinien der allgemeinen politischen Geographie. Berlin 1922, S. 141.

註五 採集者の採集する果實は *Kinmenia americana*, *Ficus damarensis*, *Hyphaene verticosa*, *Vauqueria* sp., *Citrus vulgaris*, *Schrocarpa Schweinfurthiana* などである。(K. Sapper: a. a. O., S. 170.)

註六 主要な球莖はアンシユマンの主食料である *Cyperus usitatus* を始めとして *Cyanella amboensis*, *Valleria murri-*

cata, W. nutans なるもの。 (K. Sapper: a. a. O., S. 170.)

註七 A. Sipan: a. a. O., S. 142.

註八 R. Litgens: a. a. O., S. 164.

註九 R. Litgens: a. a. O., S. 164.

低級ハック耕 (niederer Hackbau) は、木棒耕 (Pflanzungsban) と木鋤耕 (Grabsstockbau) から成立するもので、何れも土地耕作の原始形態たる攪耕——豊饒な地表面を攪土 (Bodenauflöckerung) する耕法によつてゐるのであつて、一般に木棒を原始的耕具として耕作する法をハーンは、ハック耕 (Hockbau) と總稱したのである。

木棒耕は、處女地の樹木草叢を焼拂つた後、長さに二米、太さ五糎の木棒で、土表に小穴を穿ち、玉蜀黍の種子や豆を播くもので、中米グアテマラ、ユカタン地方、コロンビア、アマゾン流域のインディアンによつて行はれてゐる。これに對して、木鋤耕は、「樹木を斧で伐採し、竹べらにて草を刈り、焼拂ひ、長さ一・五米、太さ六—九糎の堅い木棒の先端を楔形に尖らしたもので、地面に穴を穿ちタロ薯、薯蕷を栽培してゐる」<sup>(四)</sup>。メラネシアの土人、ニューギニアのバブア人がこの耕法の代表者である。木棒の尖端を楔形、圓錐形に尖らして、土地をより深く穿

つところが特長である。要するに兩者を包含する低級ハック耕は、「原始的鍬の類を用ひ、犁を用ひず、また畜力によらず、僅かに土表を攪耕するにとどまつて肥料を施さない。従つて地力は速に衰耗するが、一地方が衰耗すれば、他の地方へ移動して土地を耕するもので、この農法は、人口稀疎で土地の廣漠たるところに於てのみ行ふことが出来る」<sup>(三)</sup>のである。現在、地球上の經濟空間に於て廣く分布してゐるものは、この經濟形態で、中央アメリカの大西洋岸、アマゾニア、中央アフリカ、後印度の中央、スンダ諸島、ニューギニアが主なる地域で、「採用する作物は、熱帶的根菜、薯蕷、マニオク、里芋、荳菽、蔬菜を主とし、玉蜀黍、粟類のごとき禾穀類は僅かに採用されてゐる」<sup>(四)</sup>。とにかく、この農法は、より大なる定着性を強制し、經濟的所<sup>(五)</sup>有(商工交通業の發達)を促し、政治社會組織をつくり、人間をより高い段階にもち來たし、彼等に再發展の萌芽を胚胎させるのである。即ちクラウゼの所謂、原始文化民族と高度文化民族との間に必要な連環 (Zwischenglied) を形成してゐるものである。

尙、この低級ハック耕から發達したものに、漁獵民族 (Schiffervölker) と遊牧化牧者 (nomadisierende Hirten) とがある。前者は、本質が水の利用性にあつて、氣候と海洋とに對する接近が、重大なものになつてゐる。勿論、この際に於ては、土地の形態は主要要素を構成せず、

若し、彼等が土地の耕作に従事しても、それは、低級ハック耕であり、一時的なものにすぎぬ。エスキモー、マレイ人、ポリネシア人はこの經濟形態の代表である。而して、後者の遊牧化牧者は、リュットゲンスの所謂「牧者遊牧主義」<sup>(5)</sup> (Hirtennomadismus) で、大家畜群のために強制的に新牧地の探求、即ち、交替牧地の探求に結合されて居り、その形態の起原は、中央アジアに於けるステップ地方の狩獵民族にあるのである。牛、駱駝、特に馬のごとき家獸が飼養され、その主要分布は、熱帶周縁の大ステップ、山脈の麓地方、亞寒帶及び寒帶地方である。

更に、高度ハック耕 (höherer Hackbau) は、低級ハック耕から發達したものであることは、云ふまでもないが、土地の労働に對する集約性と不利な氣候的條件に對する克服性が、その特徴であり、また人工的灌漑の建設と道具の使用と人力の利用とがその優越的現象である。土地に關しても、進歩したものは、「休閒地を設け、年々、隔年、三年目と週期的に循環するやうに改めて地力の減退を避け、こゝに始めて肥料利用の進歩が見られたやうである。また、鐵鍬、或は木鍬を以て土地を耕すこの農法は、前者の穴を穿つて種子を投入するものよりは、遙かに進歩して居り、剩え二回の乾季及び雨季を利用して二毛作が行はれてゐる」<sup>(6)</sup> 状態で、新・舊兩大陸の大河川沃地 (Stromosen) が、高度ハック耕の發祥地となつてゐる。

註一 木棒を農具とし、女子によつて行はれてゐる「ハック耕」は、種々な名稱で呼ばれ、或は鍬耕法 (富田、前掲、四一五頁)、或は耨耕 (飯本、前掲、三三六頁)、或はハック耕 (横井、前掲、一三頁) と稱せられてゐるが、要するに Hackstock 及び Hacke (Baus's Lexikon der Geographie, a. a. O., S. 9.) によつて穴を穿ち、球莖植物 (Maniok, Batate, Taro, Yams) と禾穀類 (Reis, Hirse, Mais) を栽培する極めて簡單なものであるが故に、筆者はハックの意味を判然と示す横井博士の名稱に従つてハック耕としたのである。

註二 富田芳郎 前掲 四一五頁

註三 横井時敬 前掲 一三頁

註四 横井時敬 前掲 一三頁

註五 R. Lilgens: a. a. O., S. 165.

註六 富田芳郎 前掲 四一五—四一六頁

更に、園耕 (Gartenbau) は、ハック耕から發展した本質的に異つた植物耕作形態で、特別な條件のもとに存立してゐる。即ち、價值ある土地表面の不可能な擴大に於ける人口の増加と文化の發展とが、土地の極度の利用を促したのであつて、鋤・鍬による集約的土地の労働、施肥、過剰な労働力、輪環農法、人工的灌漑などが、收穫を豊富にし、これらが、總體に於て、園耕の本質となつてゐる。今日では、労働の機械が増加し、完成してゐるが、それでも人は共に労働しなければならぬ。かくして、定着性と法律をもつ國家形成とが、この形態に必要なのである。



殊に、最後の國家建設は、所有關係を規定するために、また人工的灌漑を規則づけるために、特に必要である。就中、灌漑は、園耕に缺ぐべからざるもので、「支配的に氣候關係と土地關係との基礎の上にあるアジャ地域に於ては、土地に水を導くことが、最も必要事である」<sup>(一)</sup>。即ち、支那の米田地域や、また、「灌漑に基礎を置く日本」<sup>(二)</sup>はもとより、「ジャバの様な農業國に於ては、灌漑は、最も重要で、米・砂糖の耕作は、全く之に負ふものであり、」<sup>(四)</sup>また、「印度では、インダスの上流チエナブ河の灌漑工事によつて毎年千數百萬弗の收穫をあげ、更にイスパニアのエプロ、タホ兩河流域では、灌漑によつて十二倍の土地生産力を増加し、」<sup>(五)</sup>また、「流水の轉向調節、湖水からの誘導、雪溶けの水、地下水などによる米國の灌漑」<sup>(六)</sup>は生産物の増産に多大の貢獻を與へてゐる。また、朝鮮に於ても「治水灌田の術は、施政の要務、王道の由つて基く處なり」<sup>(七)</sup>とあるごとく、歴代の爲政者が如何に灌漑工事に留意したかは、今日多くの灌漑が行はれてゐることをみてもわかる。かくのごとく、灌漑は、園耕——即ち、ウィットウホーゲルの所謂、「庭園的經營農業」<sup>(八)</sup> („gärtnermässig betriebene Agrikultur.“) ——の基礎をなすもので、之が状態の如何は、文化發達に影響を與へるものである。とにかく、園耕は、「土地經營の最高位にあるもので、最も多くの收量を擧ぐる集約的經營で、犁耕、畜力を利用せず、地力の補償と

して經營の遺殘物、人糞尿、堆肥などを用ひ、注意深く且つ技巧的な人工的灌漑によつて天候の羈絆から免れてゐる」<sup>(九)</sup>ところのものである。而して、この園耕、即ち、ゾーバンの「園藝栽培」<sup>(五)</sup> (Gartenkultur) の分布地域は、支那、日本、伊太利(ポー平野と南伊太利)、東スペイン、和蘭であるが、「園耕を經濟生活の基礎としてゐる舊文化民族(南・東・前アジア、埃及、メキシコ、ペルー)にあつては、時代的の最高文化がこの經濟形態と密接に結合して發達したのである」<sup>(一)</sup>。

註一 園耕の名前は、横井氏(前掲、一五頁)によつたのであつて、この形態に對しても、園藝的農法(富田、前掲、四二二頁)とか、田園耕作(飯本、前掲、三三六頁)とか、庭園的農法とか、いろいろな名稱が採用されてゐる。

註二 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 726.

註三 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 726.

註四 田中館秀三 シャバの經濟地理 地理教育 昭和四年六月 六頁

註五 印度では、インダスの上流チエナブ河の灌漑工事によつて、二百五十萬英町を潤して、百萬人を支へ、毎年千二百萬弗の收穫をあげてゐる。又、イスパニアのエプロ、タホ兩河の流域では、灌漑によつて、土地の生産力は、十二倍に及び、人口もこの割合で増加してゐる。その他、米國のルーズベルトダム、インペリアル谷の灌漑、オーストラリアの Murrumbidgee の大堰止工事、臺灣の埤圳問題、嘉南大圳の大工事、朝鮮の堤堰淤の修築など、灌漑工事の發展と利用とは枚擧に邊がない状態である(山極二郎 大阪府下の灌漑農業 地理學評論 昭和三年十二月 四四頁)また總工費九千四百四十萬圓、總延長五十九里に亘る大利根川改修工事はミシシッピ改修に匹敵する世界的のものである。

註六 山岸忠夫 米國の地下水と灌溉 山崎直方博士記念論文集 地理學評論 昭和五年七月 一三一頁  
 註七 朝鮮に於ける灌溉工事は實に美事なもので、大規模なものが甚だ多い。主なるものを列挙すれば(日本地理大系 朝鮮篇 改造社 昭和五年 三一—三三五頁)

- 一、益沃水利組合大雅里貯水池(高山川を締切つたもの、高さ三〇米、延長二六〇米のアーチ型石造堰堤)
- 二、東津水利組合雲岩貯水池(東津江、高二六米、延長三〇三・六米、混凝土造重力堰堤)
- 三、大正水利組合大鰐貯水池(鴨綠江下流、高二・二米、延長二五九・七米、石造堰堤)
- 四、平安水利組合貯水池餘水吐(平安南道平原、大同二郡に跨る、高一五米、延長一五四・五米)
- 五、その他、中央水利組合福溪導水路取水門及び延海水利組合貯水池などがある。

註八 K. A. Wittfogel: a. a. O., S. 726.

註九 横井時敬 前掲 一五頁

註一〇 A. Supan: a. a. O., S. 143.

註一一 R. Litgens: a. a. O., S. 166.

栽植耕<sup>(一)</sup> (Plantagenbau) は高度ハック耕から發達した經濟形態で、高級文化の指導のもとに於ける土人の安價な勞働力の助けによつて行はる、熱帯及び亞熱帯植物の栽培によつて特長づけられてゐる。それは道具及び勞働方法ではなく、勞働組織が、人爲的特長であり、他方にあつては、肉體的に白人の勞働を歓迎しない熱帯氣候が、地理的特長となつてゐる。其他、園耕

には個々の灌溉が必要であるに對して、この栽植耕には表面を潤すに充分な巨大な灌溉 (Ebenen-, Riefen- und Rillenbeselung) が必要とされてゐる。かくして濕潤及び半濕潤地域に於ける植物多量生産の經濟は、所謂、栽植經濟 (Plantagenwirtschaft) で、この經濟が、栽植耕とよく結合してゐる。而して、この經濟形態から作出さる、作物は、珈琲、カカオ、茶、砂糖のごとき嗜好類、棉、シサル麻、護謨科植物のごとき工藝の原料、幾那のごとき藥料及び香料に局限せられ、食料品の如きは、全く栽植しない故に、他地方に輸入を仰ぐのである。故に栽植耕は、經濟上の非獨立性をもち、世界市場の支配下にあり、これがために屢々大打撃を蒙ることがある<sup>(二)</sup>。即ち、各種の産物を除外するブラジルの珈琲のごとく、單一栽培 (Monokultur) に依頼するときには、經濟上の危険が多い。こゝに於て、シヨイは「ブラジルのサン・パウロに於ては、その州の安寧は、一に以て珈琲栽培によつてゐるもので、それは世界市場の變動に關係が多い<sup>(三)</sup>」と云つてゐることも理解される。珈琲價格調節 (Kaffeewalorisation) の必要も、こゝにある。而して、栽植耕の空間は、アメリカ地中海沿岸、ペルー、ブラジルの東海岸、アフリカのギネア海岸、マダガスカル、前印度の西海岸及びガンジス平野、後印度の海岸、オーストラリアの東北海岸などがその主なるものである。

註一 栽植耕の名前は、横井博士(前掲、一三頁)によつたのである。

註二 横井時敬 前掲 一三一—一四頁

註三 E. Schen : Deutschlands, wirtschaftsgeographische Harmonie. Breslau 1924, S. 3.

註四 H. Scherrer : Die Kaffeewalorisation und Valorisierungsversuche in anderen Weltwirtschaftskreisläufungen. Weltwirtschaftliches Archiv. Kiel, H. 3, 1919, S. 336—338, S. 602—647.

農耕 (Pflugbau) は、低級ハック耕から發達したもので、大農耕と大放畜との中間過程にあるもので、最小地表面に於ける園耕と比較して、より大なる畑を必要とし、動物から曳れる鋤を労働道具として利用してゐる。飼料栽培と施肥によつて、農耕はその定着性と相俟つて、家畜支持を可能ならしめたのである。動物力の利用と技術的方法とを以て、大地積を栽培しようとする理念は、先づ、バビロニアに起つて、その具體化としての農耕が、該地から世界各地へ分布したのである。再びこれを園耕と比較してみると、園耕は、最高に發達したる經濟形態の最終階梯を表示してゐるに對して、農耕は、「怠惰組織と見做れる」<sup>(二)</sup>ほどその本質が粗放的であり、農耕が鋤の工藝的發明に關係する限りに於て、それは將來の發展をもつてゐるものと見做されてゐる。即ち、農耕は中位段階にある。而して、この粗放的耕作の基礎として、農具、役畜、Fegge 及び Walze が役立ち、同時に行はるゝ家畜の飼育は、荷獸、輓獸、力獸 (Last-,

Zug- u. Krafttiere) をつくり出して、以て機械的労働能率をあげしめてゐる。この耕地には、禾穀植物、ハック植物、蕪菁、莢植物、油植物、纖維植物、肥料植物などが栽培され、就中、禾穀植物では、大麥、小麥、燕麥、裸麥の栽培が顯著である。その農法は、新農法によるか、輪環農法 (Wechselwirtschaft od. Fruchtfolge) <sup>(三)</sup>によるか、乃至は三圃農法 (Dreifelderwirtschaft) <sup>(四)</sup>によるか、我國の「三年切替畑」<sup>(五)</sup>によつてゐる。バビロニアに起つた農耕の地理的分布は、前印度から歐羅巴全體、北アフリカ、アビシニアに及び、歐洲人はこれを南北兩アメリカ大陸のパンパス地方並に海岸の亞熱帶部に携移し、更に、南アフリカ、東南濠洲、ロシア、南シベリア、アムール流域に至るまで分布せしめたのである。

この農耕から大農耕 (Grosspflugbau) が生れたことは明白で、面積の廣大、土壤の肥沃、人口の稀疎(比較的)、機械力の使用などが、大農耕の基礎を形成するもので、北アメリカの如きは、この經濟形態の上に整然たる農業帶を展開してゐる。例へば「棉花帶、玉蜀黍帶、小麥帶、大麥帶、燕麥帶が、南から北へかけて排列されてゐる」<sup>(五)</sup>。

かくのごとくして、大農耕は、經濟形態として、現代の高度文化への發展に對する必要な基礎となつたのである。園耕が、就中、溫暖地域の舊文化民族に見出されるに對して、大農耕は、

新舊世界、とくに新世界の温帯に於けるステップや開墾地域に、その地理的基礎を置いたのである。かくして、大農耕の展開されたところに、地球の大穀倉が存在したのである。大規模なる機械の使用と共に、大農耕は、「益、工業文化」へと發展しつゝ、あるので、デイトロップヒが大農耕を機械及び工業經濟とした所以も實にこゝにある。

註一 農耕は鋤耕、役畜耕、役畜農法などと云はれてゐるが、筆者は、こゝでも横井博士(前掲、一四頁)の「農耕」に従つたのである。

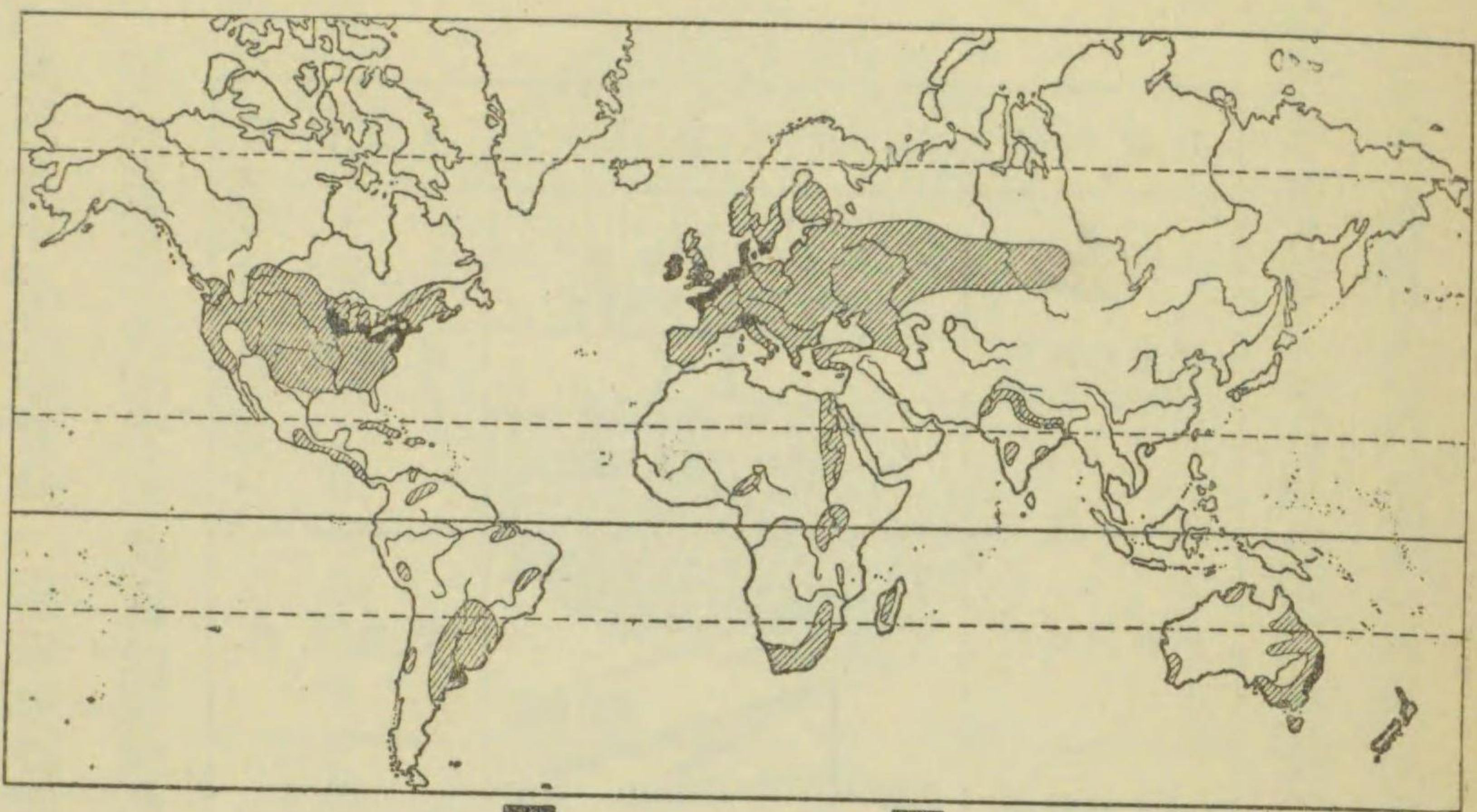
註二 横井時敬 前掲 一五頁

註三 三圃耕作法は、土壤の肥沃を以て、二圃耕作法(two field system)から進歩したもので、土地は、三つに區分され、各區劃は、夏穀(大麥)、冬穀(小麥)、休耕地となる。これは、中歐、西歐に於て最も廣く耕作された方法である。(石田龍次郎 隱岐島前の牧畑 地理學評論 昭和四年二月 四頁)

註四 三圃農業は、圃場を三分し、毎年その一部を休田とする。我國の邊僻の地に於て行はるゝ、「三年切替畑」の耕作法はこれに屬する。(佐々木清治 前掲 三五頁)。

註五 富田芳郎 前掲 四二三頁

更に放畜(Viehweid)は、高度收得經濟から、特に狩獵者から、如何なる方法で發達したか、といふことは長い間、論究されて來たところであるが、今日では、放畜形態は、ハック耕の原



主要地域 亞主要地域  
第 23 圖 世界のミルク經濟の分布

始形態から發詳したと云はれてゐる。即ち、野獸或は動物、殊に牛の偶然的捕獲が、定住化した人間の保護のもとに於て、それを神靈に捧ぐる宗教的信念と結付いて、捕獲から保持、保持から飼養へと進出したのである。これが、やがて、肉とミルクとの使用を自然的に人間に促し、一般に、家畜が、食肉動物及びミルク動物として、廣く放牧さるゝ様になつたのである。かくのごとく、この放畜の形態は、定住的農耕民族と結合してゐるので、農耕と放畜とは密接な關係をなし、農耕が、大農耕に發達したと同じ方法に於て、飼育土地の適應性、飼養植物の選擇、家畜の種の選擇などによつて、放畜の形態は、大放畜(Grossviehwid)の形態に發達したのである。